根なし草

2023 年 8 月

非力ながら

　私はこれからの世の中になら、ありえない存在でしょう。アフターピルで流されてしまう存在。
　日本もようやく同意のない性交が犯罪として認められ、婚姻中の両者にまでそれが適用されるようになりました。詳しくはこちらをご覧ください。

不同意性交等罪。
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8D%E5%90%8C%E6%84%8F%E6%80%A7%E4%BA%A4%E7%AD%89%E7%BD%AA
（参照：2023-9-20）

　そんな社会では、私のような人間は生まれないはずです。私が生まれたのは 70 年余り前。そもそも「同意のない性交」が違法でもなく、「結婚」とさえ名乗れていた時代です。総じて男はやりたい放題で、女に威張りちらしていました。子供の頃、私はよくこう思いました。
「男は、なんだってそんなに威張るのか。そんなに偉いのなら、女なしでやってみろ」
　自分の家でも、よその家でも、TV ドラマ（特に時代劇）でも、なぜか男がふんぞり返り、威張っていました。総じて体が大きいからだろうと私は思いました。だから女たちも逆らえないのだろう。腕力ではまず勝ち目はない。痛い思いをするよりは黙って従っていたのだろう、と。
　そんな時代の男が、自分と血のつながった子供は自分の味方だと思っていたら、それは厚かましいというものです。厚かましすぎる。愚かすぎる。
　女の気持ちも体調もお構いなしに手籠めにした結果の子供は、その男への復讐として生まれるのです。女の武器として。男をとことんやっつけるでしょう。子供は男でも女でもいいが、女の方がより良いでしょう。女の立場をよりよく思いやれるからです。
　私は女です。
　私を産んだ女は男児も女児も産みましたが、男児は殆ど役に立ちませんでした。生理的に女を思いやれる能力に限界があります。それを乗り越えられる男もいるのでしょうが、私の身近にはいませんでした。
　私を産んだ女は、ひたすら私を頼りにしました。女の親きょうだい友人などよりも頼りにされ、非力な私は押しつぶされそうでした。無力と言ってしまいたいほどです。何しろ子供だったのだから。無力と言わないのは、現実には、私が少しは女のチカラになれ、男をやっつけることに成功したからです。女より先に死にました。それを見届けて、我々は人心地つき、ほっとしました。やっつけたといっても、何も違法な殺人はしていません。とことん嫌い続けただけです。それほど嫌いでもない頃には、喫煙をやめるよう、ギャンブルにも、のめり込まないよう忠告しました。男は聞き入れるふりをしたことはあっても本気でやめることはありませんでした。私の切なる助言や要望は、男にはうっとうしかったのです。
　私がこれを書くのは、今は亡きその女への思いからです。それと私の子供の、そのまた子供のため。

君たちの命はどこから始まったかをきちんと伝えるため。私を産んだ女が始まりで、それ以前の血族は切り離すべきだと教えるため。なぜなら、彼らはその女を亡き者にしようと必死だったのだから。
　無知無学のおかげで、凌辱を凌辱とも知らず、子供を持ってからは自殺のじの字も思いつかず、ただただ、こんな男に負けるものかと頑張り通した女の逞しさ。21歳で遭遇した事態を「強姦だった」と断言できるまでには70年近くかかりました。それには私の助言が役立ったと思います。ある時の、私の一言です。
「あんたがさせられたんは結婚でも何でもないで、あんた、親に捨てられたんや」
　それを聞いて、女はすぐに理解しました。その話もまたします。
　女は自分の子供たちを100%自分由来だと思っていました。はっきりそう言いもしました。そう思わないことには汚らわしくて育てられないでしょう。
　私は女の無知を笑った時期もありましたが、ほどなく女に同意するようになりました。私の親は彼女だけで、それを凌辱した男は、我々の敵です。だから消えてもらいました。しかし、本当の犯人はその男ではありません。その男に女を与えた人物です。その男の親です。それと、女をその男に売り飛ばした人物、つまり女の親です。
　男も女も、互いに遠く離れた所で暮らしており、親たちのお節介がなければ出会うこともありませんでした。嫁に行け、嫁貰えなどのお節介がなければ出会わずにすみ、我々のような子も産まれずにすんだのです。
　だから私が本気で敵対すべきはその親たちです。私を産んだ女の親、その親から女を買い取った人物、つまり男の親です。私の幼少時には彼らのうち2人（女の父親、男の母親）は生きていましたが、私が長じてからその犯行を突き止めた時には、全員あの世へ行ってしまっていました。
　陰湿、ずるいやり方で我が子を捨てたじじばば。世間体は、さも結婚のように見せかけて、その実は、捨てたのでした。女の父親は妻には正直に「娘を1人捨てた」と言ったそうです。より正確には売り飛ばしたのです。娘を欲しがる人物が見合いのその場で結納を娘の父親に渡し、父親は受け取ったそうです。娘に無断で。娘を売り払った後で父親は自分の妻にこのことを言ったそうです。女の母親は、夫をとがめもせずに、それをそのまま娘に伝えました。どこまでアホかと思いますが、実話だそうです。8人も子供がいれば1人ぐらい捨ててもいいと思ったのでしょうか。誰か1人でもアホでない人がいたら、女は売り飛ばされずにすんだのです。
　このあと、今から6年前の話をします。**不同意性交等罪**　ができる前の話です。当時は**強姦罪**　から**強制性交等罪**に変更されたことだけでも大した進歩だと思えました。諸外国からは遅れているけど、それでも、今までよりは、ましだ、と。

強姦罪が消えた日　　　　　　　　　　　　　　　2017年　夏

　強姦罪（ごうかんざい）とは、かつて存在した暴行又は脅迫を用いるなど、一定の要件のもとで性器を挿入する行為（強姦）を内容とする犯罪類型。刑法177条から180条に定められる。性犯罪の中で最

も重い犯罪とされていた。2017 年 7 月 13 日に、男性が被害者の場合を含む強制性交等罪の規定が設けられたことに伴い、強姦罪は廃止され強制性交等罪がその役割を引き継いだ。

18 歳未満の児童を現に監護する者が、当該児童に対してその影響力に乗じ性交等の行為を行った場合、強制性交等罪（法定刑は 5 年以上の懲役）と同様の刑を科すとする。

このニュースは私にとって重大だった。監護者に関しては、今頃やっとか、という感が強かったが、ともかく改められたのだ、両性の不平等や、（親子関係における）子の不利が大幅に。何と 110 年ぶりという。強姦罪が廃止されたといっても、強姦という罪がなくなったという意味ではない。「強姦」という概念では性暴力被害者が女性に限定されたしまう為、呼び方を改めたのだ。かつての「強姦罪」は「強制性交等罪」に改められた。

私は、そもそも強姦という語、中でも**姦**を不快に思っていた。なぜ**女**なのか？　**女**×３なのか？　私としては、男の身勝手や女性への蔑視を嗅ぎつけてしまう、この**姦**という字が大嫌いだった。それがなくなった！　被害者、加害者共に性別は無関係になった。それだけでも溜飲が下がる。

私の人生において、これは尊属殺人罪廃止（1995 年）と並んで、画期的なできごとだった。国家的改革は私個人にとっても大改革だった。

相澤チヨ氏万歳、大貫弁護士万歳！　1968 年の事件から 30 年近い日々を要したが、あなた方が法律を変えたのだ。体を張って。娘が実父による強姦に耐えかね、父を殺害。犯罪者から出発せざるを得なかった相澤チヨ氏は、現実には法律を変えた功績者だ。私は若い頃にこの事件を知り、衝撃を受けた。妊娠してしまった女性が何人もの子を産んでいることも驚きだった。その後も折々にこの事件が気になり、関心を持ち続けていた。名前や詳細はずっと後に、インターネットをするようになってから知った。今でこそ、画像なども、それらしいものが見られるが、以前は私が知る限り、新聞や雑誌にも彼女の顔が、出てくることはなかった。私は彼女に会えるものなら会ってみたいと思った。ずっと彼女を尊敬していた。どんな裁判官より、法律家より、まずこの人がいなければ法律改正のきっかけも生まれない。加えて弁護士。国選弁護士では心もとないと、無償でこの女性の弁護を買って出た奇特な弁護士。それも親子 2 代にわたる、執念ともいえる大仕事。わが国にもこういう気骨ある人がいたのは、嬉しいことだ。

ところで、私は、相澤チヨ氏の子どものこともむろん気になって仕方なかった。女の子ばかり何人かだったと聞くが、彼女たちは自分の両親の実情を知っていたのだろうか？　父親兼祖父である男にどう接していたのだろう？

更には、この罪深い男の罪深さは彼独自の創作によるものではなく、幼くして親に捨てられたことによる後遺症であるらしいのだ。幼い頃のダメージは回復が非常に困難で、二度と再び立ち直れないほどに人を損なう。

このことにも関係するが、言葉の問題も残っている。言葉は法律に勝るとも劣らぬ力で人心を支配する。

いわゆる差別用語になっていてもよさそうなのに、今現在、それにさえ上げられていない言葉がある。**尊属、卑属**がそれだ。とりわけ卑属。法律用語らしいが、考え出した人間（複数？）の顔が見たい。おそらく近代の出来事だろう。古語にはない。江戸時代にはなかったのだ、こんな差別用語。

漢字には、カナにはない意味合いや匂いがある。**卑**という字には、日本人はあまりいい印象を持たな

い。何故こんな字が当てられたのか理解に苦しむが、中国語にも同じ言葉があるところを見たら、そのまま借りてきたのかもしれない。中国での、この字の意味合いは、日本と同じなのだろうか？　大昔からあったことばなのか、また時間ができたら調べよう。
　少なくとも日本ではいい意味をもたない、この語を平気で使えるということは、ある種の感覚をマヒさせなければできないことだ。児童虐待と深い関係があるように思える。虐待のメカニズムを白状しているようにも思える。

この人らに気を取られてはいかん　　2018 年 8 月

「知的障害者を親に持つ子どもの心得」はどこで教わったらいいのでしょうか。私はそれを教える学校や教師を知りません。自分の子供時代も、その後、数十年経った今もそうです。私が受けた教育は実にムダだらけでした。知的障害の親を持つ子どもは「健常な親」を持っているかのような、ピント外れの教育を受け、多大な時間をムダにします。
　知的障害、と私は深く考えずに書いています。実は精神障害との区別がよくわかりません。私が知っていることは、ある男が幼少時に高熱で死にかけ、医者も見放したが、死なずに生き延びた。男の母親によれば、医者は脳膜炎だと言っていた。これぐらいのことです。男自体が今は死んでしまったので、詳しいことはわかりません。髄膜炎（脳膜炎）の後遺症として大人は認知性脳障害、子供は知能障害が多いときいたので、それに似た言葉「知的障害」と言うことにしました。当たらずとも遠からずであればいいと思っています。
　その男について、私はいいことをほとんど思い出せません。頼りなさ、いい加減さ、嘘八百のようなことばかりです。加えて乱暴。
　自分の親が知的障害者だと気付くのは、子どもがかなり成長してからのこと。それも、敏感な子でなければ見逃します。
　気付いたとしても、知らぬふりしがちです。自分の親が「知的障害者」だというより、「うっかり者」とか「そういう性格」程度にしておく方が楽ちんです。今更病院で詳しい検査も億劫。したところで劇的回復も見込めないし。むしろ「禁治産者」や「後見制度」について関心を持ちます。宿題二の次で。
　私の場合、男親の障害を女親の言葉で知りました。いつ？　正確なことはわかりません。何となく小出しに、ちびりちびり聞かされていったように思います。1940 年代、21 歳で、まともな見合いや付き合いもなしに、親元から遠隔地に嫁がされた女は、婚礼後、姑から聞かされます。「あの息子は 3~4 歳の時、脳膜炎に罹り、医者もさじ投げた。死んだと思って何日か後に覗いてみたら、生きとった」
　脳膜炎とは、今で言う髄膜炎のことで、先にも書いたように幼児期に患えば、高い率で知能障害などの後遺症が残るそうです。

女は呆れ、親元へも告げますが、子沢山で 1 人でも食いぶち減らしをしたい親は知らん顔で、娘を救い出そうとはしませんでした。その時代は、よほどの良家でもない限り、娘は性知識も与えらず嫁に出されたそうで、私を産むことになった女もそうでした。

　さて、私、小学生の頃、以上のようなことを詳しく知る由もありませんが、こんな感じで両親を見ていました。

　「この人らに気を取られてはいかん」と、私は親たちを警戒していました。途方もない面倒に引きずり込まれる、という気がして。子どもの直感のようなものでしたが、当たっていました。表向きは親ということにはなっていても、実際には子どもを損ねる者たちだから、深入りしてはいけない。私は誰から教わるでもなく、そう心得て頑張ろうとしました。
　しかし、それは理論的にはあり得ても、実際は綱渡りのように難しいことでした。
　なぜなら、子どもは衣食住共に親に依存しなければ生きられない存在で、カスミを食っては生きられないからです。親と一つ屋根の下で暮らし、彼らから完全に目をそらすことなどできないのです。

　本を読んだり、映像見たり、夢いっぱい、希望にあふれた気分になっても、ふと、視界の端に見え隠れする現実の身近な大人たち。それが私を引きずり降ろしに来る。ぼさぼさ髪で、男をなじる女。
　男はやかんで湯を沸かしていました。湧いた湯をポットに入れたが、満タンではなかったのか、また沸かしました。すると女がなじるのです。
　「そんな、ちょこちょこガス点けたり消したりせず、いっぺんに沸かしてしまいーな！」
　それに対して、男がどう、うろたえ、どう反論していたかは忘れました。思春期の私の記憶に残ったのは、「こんな男女の間に、性関係があったったなんて、いやだな」ということ。
　女の身なりは、大抵いつも、わざとらしいほどのみすぼらしさでした。
　いわゆる冠婚葬祭や参観日などには、人並みの、きちんとした身なりのできる女親が、普段みすぼらしくしているのは、いやな男をなるべく遠ざけておくため。それは後日、女親自身の口からも聞けたし、私から見てもそうだろうと思えました。
　当時、私は、まだ彼らの結婚の実情は知りませんでした。好きになった者同士がするのが結婚で、時が経つにつれ、好きでなくなることもあると聞いていたので、それかな、くらいに思っていました。それにしても、その始め、彼らが仲よくしているイメージなど、どうしても描けませんでした。よかった頃の話も聞いたことないので、私は女親にその辺を訊き出そうとしました。そのたび、返ってくるのは、「自分は一度も相手を好きだと思ったことはない。親が勝手に決めた」という答えでした。
　そんな質問もできないもっと年少の頃、私は、勝手に女親のことを「あんな男を選ぶとは、なんと悪趣味、低能な女だろう」と軽蔑していました。その気持ちは態度にも出るし、折に触れては口にも出していたのだと思います。後日、女親は言いましたから。「私は、ずーっと娘に白眼視されていた」と。
　話し上手ではない彼女が、私のその誤解を解くには大変だったようですが、「相手を好きだと思ったことがあった」と思われるのは何としても我慢ならなかったようで、「ずーっと嫌い続けている」と主張し続けました。

なるほど、彼らの若い頃を想像しても、いいイメージは全くわかず、仲睦(なかむつ)まじさはみじんも想像できませんでした。そんな写真などもありません。しかし、あくまで自分の推察です。ぜひ本人の証言を得たい、と私は強く思い始めました。生きてるうち、眼の玉黒い内に、この人の口から聞き出したい、と。

それが一つ屋根の下のにもかかわらず、筆舌にし難いほど大変でした。長期戦でもありました。しかしある日、聞き出せました。女親の性生活は、最初もその後も、ぞっとするほどいやなことだったと。その話になると「あー、いやだ、いやだ！」と頭をかかえ、叫びました。私は 20 代の後半にもなっていたでしょうか。「具体的なことは何も聞けませんでしたが、その様子だけで十分でした。

私はスッキリしました。自分の命が愛情から出発したのではないことがはっきりしても、がっかりするどころか、さっぱりしました。

それ以前、一時、自分の命が愛情から始まったのではないことに、落胆し、自分を汚らわしく思ったこともありました。実際、思春期の少女にとっては、生きるか死ぬかの一大事でした。その頃のことを詳しく思い出そうとすればできないでもありません。でも、やめておきます。

それより、その昔、女性の同意も得ず、力(ちからづ)尽くで子を産ませても、その子は決して男側に付かない、男は愚かにも敵を増やしただけだということを、男に思い知らせたくなってきました。この、犯罪者のみならず、共犯者にも。暴挙、暴行でしかないことを、結婚などということに仕立て上げた男たち全員に。男の父親、女の父親ひいてはその共謀者たちにも。

女親は時々こう言っていました。「自分は子どもを産んだ時思った、この子と泣きましょ」と。親にも誰にも助けてもらえず、心の支えは子どもだけだったということでしょう。その心境は分からないでもありませんでしたが、私はこの、「泣きましょ」が気に入らなかった。悪いこともしていない者がなぜ泣かなくてはならないのか、泣くのはヤツらだ、われわれではない、と思い、その思いは年月重ねるごとに強くなりました。

合意のない結婚に嵌(は)められ、七転八倒する話ばかりに傾いてしまいましたが、その昔でも、むろん両性の合意に基づく結婚もありはしたでしょう。

それで生まれてきた子は愛の結晶などとも言えるでしょう。しかし、どの子もこの子もそうに違いなく、それに疑いを持つ子は不届き者、ひねくれ者のように蔑(さげす)むのは如何なものか。彼らは敏感なだけ。大人が振りまく嘘八百に惑わされないだけ。赤ちゃんは愛の結晶だなどと、よくもまあ嘘八百を言えたものだ。因みにこういう虚構は宗教の得意とするところ。宗教にどっぷりでは親の素顔は見えてきません。

愛の結晶どころか、
暴力の結晶、薬害の結晶、放射能汚染の塊、排泄物と紙一重、またはズバリ排泄物。
現実はそんな赤子で、世の中はいっぱいだ…

思春期を過ぎた私は湿っぽい感傷などすっかり乗り越えていました。

ところで、女親は口癖のように、子どもの血は100%自分のもので、男の血など1滴も入っていないと言いました。しんどい思いをして得た子は自分だけのもの。転んでもただでは起きないしたたかさです。事実、男は女に何の快適さも安心感も与えませんでした。股間の一物(いちもつ)突っ込む時も、その後、女が子を産んだ後も。更に、子育て中もギャンブル狂いや手癖の悪さで女を苦しめ続けたのであれば、女がそう言うのも解ろうというものです。

知的障害といっても、程度から何から色々でしょうが、私が長年見ていた知的障害者は相手の気持ちが読めない男でした。自分が相手に快感をもたらしているか、不快感で苦しめているかが判らないのです。何十年判らぬままで、生きているうちは相手の女に「汚らしそうにするな！」と脅して突っ込みまくり、死ぬ手前で、子どもにこんなことを言います。「うちのお母さん、不感症ちゃうか？」（自分の配偶者をお母さんと呼ぶ。彼に限らず日本人によくある傾向）
それを聞いて私は唖然としました。「あんたが相手なら、どんな女でも不感症どころか、触るのもいやがるわ。あんた蹴とばされるか、下手すりゃブチ殺されるで！」と思いました。因みに、この男の死後、やっと自由になった女から聞いた話ですが、こんな不満も言っていたそうです。「あんたはちっとも自分の方からおねだりして来(こ)ん。会社の友達なんかは、嫁さんの方から誘ってくると言うてるのに」
女は汚らわしくて返答もできなかったと言います。
タバコや強烈なわきが臭に加えて、水虫の皮をボロボロまき散らす男が何言うとるんや、と思って。
あまりしつこく言ってくると、カネを与えて追っ払った。でも、いくらおカネのためとはいえ、こんなヤツの相手をする女性は気の毒やなあと思った、ということです。

私個人として一番いやだったのは、自分の相貌が「女親寄り」ではなかったこと。整形手術したかったけどカネがなかった。悲しかった。

私も、常々この男とは、なるべく距離を置いておきたかったので、同居していた時もめったに話しをしませんでした。自活を始めて別の町で暮らしていた頃は顔も見なくて済み、清々していました。できればそのまま死に別れとなってほしかったのですが、年老いて適当に体力も弱っているのを見ると、ちょっとは懲らしめたいという思いがわきました。凹(へこ)ますに適当な時と思えたので、その時は、私の方から話しかけました。私30過ぎの頃です。相手のおびえたような顔をよく覚えています。私に呼び止められることを恐れていたようです。

私がまず言いたかったのは「女親が子どもを自分だけのものだと思っていること」でした。
「あんたがなんにも教えてへんから、あの人、自分の子どもを、あんたとは無関係やと思(おも)てるで。あんた

なんかおらんでも、できたと思うてる」
　これを聞くと、男は驚き、しかし、すぐに、しんみりうなだれて言いました。
「そうか！…それで、わしにあんなに冷たかったんか…」
確かに、相手に何も教えなかったことは自分の落ち度だと男は認めました。
「最初の**印象が悪かった**こと」も白状しました。
　加害者は、その程度にしか感じていないものなのです。このオヤジとのやり取りのときには、私、知りませんでしたが、オヤジの死後、20 年以上もたってから、被害者の方(ほう)からこれを**強姦**だと聞かされました。当時、結婚のなんたるかも教わらず、「家事手伝い」くらいに思って嫁がされた娘たちは、多かれ少なかれ、似たような目に遭っていたのでしょう。根掘り葉掘り訊きださなければ得られない情報です。私の女親の場合、知的障害顕著な相手への嫌悪感もあり、手や体の一部が触れるだけでも嫌だったといいます。逃げようとしたら、「結婚したら、皆こうするんや！」と襲いかかってきた、と。確かに強姦です。結婚という名の強姦。結婚≒強姦の時代は、日本に長らく続き、少子化を防いでいたようです。
　被害者は苦痛と不快のあまり嘔吐したと言いました。便所へ行って吐いた、と。「本人の面(つら)にぶちまけてやればよかったんや」と私は言いました。「それくらいせんとわからんヤツには！」実際、私は、そのことを知らせないまま、オヤジを死なせたのを悔しく思います。
　ともあれ、その時のオヤジは長年連れ添った（と自分では思っている）相手を怨み続けた自分を少しは反省出来たようでした。
「わしが間違(まちご)うとったんか」と、非を認めました。
これは大きな収穫と言えますが、その他は相変わらずピント外れでした。

　記述は順不同かもしれませんが、男との会話を思い出してみます。私は相手にそもそも、まともな返事は期待しませんでしたが、実に、予想を超える返事がいくつも返ってきました。
　我々子どもをろくに構いもせず、自分だけ遊び呆けたことを責めると、こう言いました。
　「わしは戦争やなんやで青春を奪われた。失われた青春を取り戻したかったんや」
　私は改めて、こいつをぶち殺してやりたくなりました。
　「そうしたければ、独身でやれ！」と思い、これは言葉に出したかもしれません。
　我々には青春はおろか、子ども時代もなかった。家はみすぼらしく、友達も呼べない。薄い壁や傾いた柱や建具。隣家や隣室のいびきや騒音が筒抜け。寝不足で叩(たた)き起こされる朝は死ぬほどつらかった。夜、寝床につくときは。いつもこのままずーっと眠り続けたい、朝なんて来なければといいと思った。翌朝がくるとがっかりした。死ぬほどがっかりした。暑さ寒さもろくに凌(しの)げず、特に冬の隙間風は容赦ない。手足のしもやけ、逆むけ、慢性鼻炎で「鼻紙(はなかみ)」（当時ティッシュはない）が後生大事のお守り。こんな小学生は当然活気がない。体力も乏しく笑顔も無い。すると女親がなじる。

「子どもらしくない。可愛げがない」トドメは「お父さんそっくりやな」
言われた子どもは思う。「なぜもっといい男を選ばなかったのか？」

これら惨めな思い出をオヤジにまくしたてた訳ではありません。言葉にもできないほどムカついていたのです。それに気付かないようでオヤジはこうも言いました。

「貞子が死んでしもたやろ、それでわしの頭、ごじゃごじゃになったんや」と手で、頭をかきまぜるようなふりまでして言いました。

貞子というのは私の姉で、2歳にもならぬうちに夭折した子です。私は写真でしか知りません。オヤジやその弟の煙草の吸殻を弄んで病気になりました。弟は肺を患っていました。子どもが病気にならぬうちに、女親は提案しました。この子の為に、しばらく別に部屋を借りてやろうと。男は反対し、子どもは病死しました。死ぬと男は泣いたそうです。泣くぐらい、赤の他人でも出来ます。女親は悲しみで気持が動転していたので、この男にも人の情があるのか、と、ほろりとなったそうです。正常な判断できていたら、「このドガイショナシめ！　大事な子を殺しやがって！」と気付いたでしょうに。

彼には、そのような発想、気づきは到底不可能だったのでしょう。また、初子夭折の悲しみに熱中するあまり、その後、生まれた子の放置も許されると思っていたようです。——　自分の立場や役割について、何の自覚もないのです。自分に耳を傾けてくれる人なら、周囲の誰でもいいから、手当たり次第、ひたすら自分の悲しみを訴え一緒に悲しんでほしい、あわよくば同情し、憐れんでほしいのです。図々しすぎます。死んだ子の後で生まれて、ないがしろにされた子どもは聞くに堪えません。
「悲しければずーっとおとなしく悲しみ続けておけ。また子を産ませるような悪させずに！」と、私は思いました。
そもそも、お前の頭の悪さは貞子が死んだせいで始まったわけではない。もともと悪いから、子を死なせるようなこともしてしまったのだ。
多くを述べたくはありません。一事が万事。また、彼は誰との会話でもこの調子でしょう。相手を苛立たせること甚だしく、私以外の人とでも、これよりましだったとは思えません。彼は友達もほとんどいませんでした。唯一の友達（だと、こちらが思っていた人）は勤め先の同僚（か先輩？）Yさんでしたが、ひもの結び方を色々知っていたようで、（そのうちのいくつかを）彼に繰り返し教え込もうとしたが、ついには覚えらなかったということでした。女親は恐縮しながら、Yさんからその話を聞いたといいます。

身の程知らず、とは彼の為にあるような言葉で、私に、長年（性生活を）干されているのを憐れんでほしいようなことまで言いました。我慢できている理性をほめてほしいようなことも。女に養われて生き延びてきたことなど念頭にもないようでした。

女親によれば、「わしゃ損する」と、彼はよく言ったそうです。「結婚したのに、わしゃ損する」と

結婚を自分の責任ととらえることなど彼の発想にはなかったようで、「ただでさせてもらえる権利」としか思わなかったようです。

何によらず、男は相手を逆恨みしていました。お頭のよくない人がよく因果関係を逆転させてしまいますが、彼もそうでした。自分の非を配偶者のせいにしようとしていました。自分が盗みを働いたり、仕事を怠けたり、ギャンブル狂になったのは、妻がかまってくれなかったからだ、と。

更には私にも「おまえらも、ちょっともわしに懐いてこなかったやないか」と。

これには我々子どもたちが体験したことを述べて解説に代えたいと思います。

先ず私。まだ小学生にもならない頃か、行きつけの風呂屋でのこと。その日はオヤジに連れられて行った。

湯船で、いい加減温もったので、出ようとしたら、オヤジに阻まれた。私がもういい、というのに、オヤジが押さえつけ、苦しくて、もがくのに出してくれない。気分悪く、気も遠くなって気を失った。…気がついたときは、風呂の出入り口の棕櫚マットの上にしゃがみ込んでいた。吐いたんじゃなかろうかと気になった…何とか助かったのだ。きっと誰か、よそのおじさんが助けてくれたんだろう。大勢の人がいる銭湯だから助かった。密室の内風呂なら、どうなったことか…
私が女親にこのことを言ったのは何日か後になってからです。あまりにも嫌なことがあると私は大体こうなる。すぐには言えないのです。
次に弟。まだ赤ん坊だった時、女親が彼を縁側に寝かせ、そばにいた男親に「この子を見といて」と頼んだ。女親が家の奥に入って用事をしていると、赤ん坊の泣き声が聞こえてきて、駆け付けると、男が落ちた赤子をぼーっと眺めていた。

弟は赤ん坊でなくなってからも、絶対オヤジに近づこうとしませんでした。私は自分の銭湯事件があるから、弟の口に出さない事件も色々と想像できます。しかし、どんなことがあった？　と訊くのもはばかられます。嫌なことを思い出させるようで。我々は何かと無口にならざるを得ません。
ついでに言うと、近所の友達が父親に遊園地へ連れて行ってもらったとか、動物園へ言ったとか聞くので、うちも連れて行ってと言っても、うちのオヤジは返事だけはよくて、ドタキャンか、「そない言うてくれな」（そう言ってくれるな）。で終わり。子どもは次第におねだりそのものをしなくなる。「家族の会話」などということ自体、白けて聞こえてきます。「家族だんらん」「家族ぐるみ」「家族の…」「家庭の…」なども、忌まわしいだけの言葉になってしまいます。
因みに、女親の証言によれば、我々も一度ぐらいは動物園の遊園地で回る大きなカップに乗って喜んだことがあるようです。私は女親が連れて行ってくれたと覚えているのですが、男親もそこにいたようです。女親は子どもたちの喜ぶ顔を見て「お父さん、また連れてきてやろな」と言ったということですから。男親が連れていくというより、女親にしぶしぶ付いて行ったというところでしょう。

これらの事をその時、改めて男に話したわけではありません。話したところで、「あー、その時はぼーっとしとったんや」と言われておしまい。よく言いました。「頭がぼーっとなったんや」。

なんとか彼でも覚えていそうな、出来事を一つ見つけ、子どもの私に期待させたのに、それをすっぽかしたことを覚えているかと訊くと「覚えとる」と言いました。それを追及すると、反論できなくなり、最後にはしぶしぶ詫びました。
本気だったかどうか、わかりませんが。

正直な所、私が 10 歳の頃、この男におねだりしたことを男が覚えていると言うのは意外でした。忘れた、と、とぼけるかと思っていたのに。それは先ず私が女親に凹まされた後のことでした。
女親にバレエを習いたいと言って、門前払いをされたあと、私は同じことを男親にも言ってみました。多分空しいことだろうけど、一か八か、ひょっとして…という期待もありました。何しろ小学生です。夢も抱きます。私の希望を聞くと、オヤジはこう答えました。「ああ、習うてや。あんたらのやりたいこと何でもしてや」と。
私があこがれたのは発表会や衣装というより、あの質素なタイツ姿。最初は履かせてもらえないというトウシューズ。実に地味少女でした。

オヤジの言葉はそれが実現しそうにも聞こえたのに、具体的には何の進展もなく、私は諦めました。多分その後だったでしょう。私のやけ食いが始まったのは。むくむく太り、中学から高校にかけてが、暗黒の時代でした。

それから 20 年余り。あれこれ努力して何とか標準体重になった私はオヤジに言いました。「(バレエを) あんたが習わしてくれると思うて、私はずっと待っとったんやで」と。

するとオヤジは「すまん」と手を合わせて詫びました．まるでハエのような醜さでした。
彼は、その他あれこれ寝言や、おべんちゃらのようなことも言いましたが、最高にお粗末だったのはこの発言。
「(我々は) 親子やから、何でも言うたらええんや」
出し遅れのムカつくセリフ。30 年遅いよ。もろん私は受け答えもしませんでした。

彼の言葉の中で、耳を傾けてもいいかなというのは少しありました。
子どもを全くかまわずにいた訳でなく、私が幼児の頃、どこか親戚へ連れて行った時、大事に大事にしてやったんや、ということ。そういえば、背広を着たオヤジと電車でどこかへいった覚えがありました。道中のどが渇いて「おぶうちゃん (水) ほしい」と言ったら、ビン入りジュースを買って飲ませてくれたことがありました。「おぶう (水) と言うとるのに…」と思いながらも、ないよりマシで、私はジュース

を飲みました。「おぶう」は辞書などによれば、幼児、女性語で、湯、茶のことだそうですが、私の身近な人々の間では、水のことでした。湯の場合は、幼児が飲めるほどのぬるい湯。
　水を欲しがる幼児に、まあそれに近い物を買い与えた…そんなこと、特に声を大にして、言わなければならないことですか？　親なら普通に、それくらいするでしょう。よちよち歩きなら、転ばないように気遣う、とか、普通に。
　でもそれは彼にとっては簡単なことではなく、幼児同伴で無事に親戚訪問を成し終えたというのは大変な偉業だったのでしょう。忘れ得ないほどの。
　「お母さんを粗末にしている」と言う私の言い分にも敢然と立ち向かってきました。「粗末にしてへんやないか！」と。「わしも気い使うて、気い使うて、しとるやないか」
　それは本音だったでしょう。つまり、彼は彼なりに気を使い、人並みに振舞おうとすることで汲々だった。日々の生活は人を真似る努力で塗りつぶされていたのでしょう。空しい努力で。

　それは、私がつい、訊かなくていいことを訊いてしまった時、痛切に感じました。
　「あんたは、一体、あの女の心が欲しかったんか、体が欲しかったんか」と、なぜか月並みな質問を発してしまったときのこと。彼は答えました。
　「そ、そら、心やわいな」
　正直に**体**と答えておけば話もこじれないのに、いっちょまえに**心**などというから、話がこじれる。
　若かったカズエが何度も別れたいというのに、「あんたが逃げても、わしはあんたをどこまでも追いかけていく」などと恫喝、束縛したくせに。相手の心を大事にするなら、自由にしてやった筈だ。心の離れている相手をどこまでも追いかけようなんぞということは、体を追いかけることにしかならない。
　私は以上のように思いましたが、口には出しませんでした。言ったところで、相手は、また、つべこべ口答えしてくるだろうし、なるべく早く切り上げたかったのです。

　因みに、私はその男が自分の知的障害について、親からも誰からも知らされていないようなのを、少し不憫に思いましたが、それについては何も言えませんでした。私が直接見聞きしたことでもないし、そもそも言うべきは彼の親です。健常者並みの結婚や会社勤めを強要せずに、障害者に見合う、それなりの環境を整えてやるべきは彼の親の役割です。その息子（1916 年生）の時代は知的障害者の公的福祉制度もまだもない時代です。精神病患者や知的障害者は座敷牢の時代。
　ちょっと見、そこまで酷くないと見えるような、ちょうど、彼のような障害者が野放しにされて、本人もその周囲も苦しんだのでしょう。そういう場合こそ、その親が気付くべきです。程度の差はあれ、障害者には違いないのだから、それが健常者と同じように妻を娶ったら、どんなことになるかは容易に予測できるはずです。彼の親は何を思って障害児の息子に嫁を取らせたのでしょうか？　息子以上の知恵足らず？　それとも周囲への見栄っぱり？

彼の父親は自分の職業左官をこの息子に継がせようとしたが、さっぱりものにならず、ある一流企業へ就職させたと言います。そこへ入れる時、「絶対ここをやめるな」と言い付けたそうですが、それこそ無謀です。常日頃の息子の言動をみれば、勤めきれるかどうかわかりそうなものです。
息子はギターをやりたかったそうです。若い頃、せっかく入手して来たギターを父親に目の前で叩き壊されたそうです。「こんなものはヤクザのすることや！」と。

逆立ちしたって、私はこの男の父親を理解も容認もできません。後遺症として、知能障害を残すような病気にさせたのは、何と言い訳しようと親の責任です。
知的障害者の収容施設がない時代なら、自分が生涯かけてこの息子の面倒を見るべきです。この出来そこないを尻目に、その後 8 人も子を増やしたりせず、この息子にかかりきりでも、まだ足りなかった。それもせず、この息子を就職させたり、結婚させたり、迷惑被る人々を沢山作り出しておいて、さっさとくたばるずるさ、だらしなさにはことばもありません。1946 年に彼は死んでいます。55 歳で。その妻の話によれば、医療過誤に巻き込まれたようです。

ひょっとしてこの男は長男を見限り、そのスペアを得ようとして、子を増やし続けたのか？　やはり健常な後継ぎが欲しくて？　事実、その後、彼は息子を何人か儲け、健常な子もいた。では、跡取りはその子に絞り、障害者にはそれなりの能力に見合った暮しをさせればよかった。世帯主などにさせず。

明らかなことは長男は自力(じりき)では配偶者を得ることなど、とても不可能だったということ。そんな息子にお節介にも、親が嫁をとってやるという根性がそもそも腐っている。他に適切な言葉が見つからない…**腐っている**のだ…
この男について、私がなんとか至りつけたのは、そういう理解です。

赤の他人である年若い女性に、自分の役割、わが息子の世話を全部押し付けようとした男。

そういえば、この女性、歳重ね、亭主から解放された後、言いました。「あの舅(しゅうと)、私にあいつを押し付けようと思うてたんや」と。彼ら父子の死後、自分がなめさせられた辛苦を振り返り、そう言いました。更には彼女が時々あざけり気味に指摘していたこと、普通長男に付ける名前「一郎」を、長男ではなく、末息子につけていたことを考え合わせると、舅の意図が更によく見えてきます。彼の跡取り本命は「一郎」で、その他は余計な枝葉というわけです。

1950 年に座敷牢が廃止され、精神衛生法ができたり、その改正がなされていった頃、既に一家の世帯主になってしまった男も、入院できたのでしょうか？　誰もそんな智恵は貸してくれなかった。誰もが、男を健常者に見せかけることに汲々としていました。最初の就職先で盗みを働いた時、会社がそれを警察沙汰にしてくれていたら、ひょっとしてそっちへの道も開けたかもしれません。大黒柱を失い、残された母子は生活保護を受けるとかして…。しかし、見栄っ張りの親戚連中が、寄ってたかって、それを踏みつぶそうとしたようです。彼らは兄貴が異常なことを知らぬ筈ないのに、その家族の不便や苦しみには全く知らん顔でした。

男の両親始め、きょうだい、その他一族郎党、この男を「健常者に見せかけて社会に迷惑かけてはいけない」と思う人は誰もいなかったったようです。そろいもそろって迷惑垂れ流しの発想です。だから私が思い出したくなるような人もいない。幸いなことに、男の父親の写真は 1 枚もありません。戸籍謄本で名前を見ただけです。そんなの、おくびにも出したくありません。

日本風の先祖供養ではそういう先祖にも情けをかける向きもあるようですが、私はまっぴらです。

さて、今は亡き女親について。

女性側の意向が全く容れられず結婚させられたのだと、私にわかってきたのはいつ頃だったろう？　私が成人した頃だったか？　旧民法では戸主の権限が絶大で、父親が娘の意向を無視して嫁ぎ先を決めることぐらいザラだったことを私が知ったのは30歳も過ぎてからでしょう。直接、女親にきいてみたり、同世代の女性にきいてみたり、書物で知ったり…　ともかく、自分世代の**結婚**と、親世代の**結婚**の中身には大きな隔たりがあると知りましたが、それでもなお、疑問は残りました。

嫌だと思うなら別れたらいいのに、を始め、なぜ実家の親がそれを理解し、娘を助けないのか、嫌いな男に妊娠させられるだけでもぞっとする話なのに、わが親はなぜ、それを産み落とし、育てるに至ったのか？　等々。

表向きは、世帯主や私の親だということになっている男は既に述べたようにこの上なしの甲斐性なしで、安普請の雨漏り隙間風の家に妻子を住まわせても、頭の中はいつも自分のギャンブル資金くすねることでいっぱいでした。家のあちこち探しまわり、金を持ち出すのです。子供の財布も容赦しません。実際に自分の赤い財布がこの男に引かれていきそうな時、私は声を上げ、取り戻しました。男はバツ悪そうに何か言い訳がましいこと言いましたが、思い出すのも嫌で、略します。男の虫の居所悪ければ、殺られかたも知れないと、済んでのことに、ひやっとします。

…なんていうのも、変な言い方。いつの間にか、自分も人並みの言い草に染まっている…。違う、ひと思いに殺られてしまっていた方がむしろ楽だったのかもしれない。しかし、多分その甲斐性もないでしょう。彼自身、自殺しようとしては何度も失敗していましたから。

私も中途半端に障害者にされるよりは、これでよかったのでしょう。

とやかく述べるより、次の話を聞いてほしい。その後、その男が死んだ時、我々は大喜びしたのです。私の心の奥にはいつも、女親が先に死んで、男の方が残ったらどうしよう？という恐怖もあったので、望み通り男が先に死んだのは幸運とさえ思えました。

ホッと人心地つきました。今もホッとし続けています。我々の貴重な時間や体力を無駄にしたという思いは強くあります。これでやっと人並み、と言いたいところですが、そうもいかないのです。

それは他人の父親の葬儀に出席した時、痛切に思い知りました。普通、人は自分の父親が死ぬと悲しみ、泣くのです。死者の歳に不足もないほどでも、泣く。ましてや、まだ若いうちに亡くしたら、大騒ぎ。

それが私には疎（うと）ましい。不快です。いたたまれない。すんなりお悔みも言えない。

いくらあんた方にとってはいい人、なくすに惜しい人だったからといって、
そんなに手放しでおいおい派手に泣いてくれるな。私の前で。
あんた方、親がいた時はさぞかしよかったんだろうね、
あんた方のそれまでの幸せを見せつけてくれるな。
えーかげんにせー！

これが私の本音です。親父が死んで、もろ手を挙げて大喜びするような、「めり込んだ幸せ」しか知らない私の本音。

しかしこのままではとても世の人々とギクシャクするので、
今ではさらに、こう気持ちを整理しました。
まともな父親が死んだら、子が悲しむのは当たり前。
私がオヤジの死を悲しめなかったのは、彼がまともな父親ではなかったからだ。
血縁だけで親だと威張れるとでも思うのか、
それにふさわしいことができなければ、子から見て、そいつは疎ましいだけ。
邪魔で汚らわしく、迷惑なだけ。
子を扶養し、擁護する親の機能を果たさなかった。
頼もしさのかけらもない男が親や先祖だとふんぞり返るな。

戸籍など何の役にも立たない。戸籍は妻子を扶養しない。
私に親はいなかった。特に父親は。
私を苦しめ、手こずらせたあの男は私の父親ではなかったのだ。

母親もいないと同然でした。だまされた女がいただけです。そのことを私は彼女に教え、彼女は学びました。自分にかかわった男連中が、ただのバカであったことを知り、溜飲を下げて人生を終えました。
むろん彼女は男どもを許したわけではありません。彼らがきちんと彼女に詫びた訳ではないのですから。いくらでもそのチャンスはあったにも拘らず。
今になって思うに、私の女親の相手やその親だけでなく、女親の父親も知的障害者だったのではないでしょうか。彼らのえげつなさを、時代のせい、性格のせいなどと片付けるのは簡単ですが、彼らの余りの愚かさ、非情さに、ふとそんな気がしてくるのです。だからといって、同情も容認もする気持ちも生まれません。ただ、クソミソに憎むというエネルギーのロスは押さえられます。
女親も私も言いたいことはこれだけ。
「私は彼らが大嫌いだ！」
知的障害者に子供ができてしまったら、それはそれで仕方ないことですが、私が出遭ったような障害者なら、彼ら自身に子どもを育てさせてはいけません。近づけてもいけません。会わせない、見せないのが

一番です。

とりわけ、**反面教師**などという詭弁には要注意。

物事の善(よ)し悪(あ)しを判断できない幼児にとって、親は丸ごと教師で、見習うべきでないなどと思える筈ないのですから。

「わしが死んだら、その辺の川にでも流しといてくれ」

子どもはそれができると思ってしまいます。

子どもの見栄

2018 年 12 月

子どもが自分の家庭内の貧困や不和を隠したがるのはなぜだろう？

暖房節約で寒すぎる部屋では、ぐっすり眠れない、防音も効かない壁からは、騒音が筒抜けで安眠できない。同居の大人はそれを訴えても何もしない。

何とバカな大人だろうと子どもは思うが、会話はとっくに諦めている。言っても無駄。ニコチン中毒のこの男とは会話が成り立たない。それは自分の経験から思い知っている。10 年そこそこの人生経験だが、十分だ。言い返せば殴られるがオチ。痛い思いして成果も上がらぬことは、子どもでもしない。この大人は、威張りたいだけで人の親になったな、と、子どもは見抜いている。子どもの健康や幸せなどどうでもいいのだ。顔色や表情など更にどうでも。それどころか、悪いとなじる。子どもらしくない、よその子のように明るくない、素直でない。贅沢だ、等々。女親までがなじり倒す。よその家では子供が具合悪そうだったら、女親が気遣ってくれるという。無理して登校せず、休めとさえ言うらしい。うちではありえない。女親がどなる。「気持ちがたるんどるからや！　這(ほ)うてでも行け！」

子どもは、こんな大人との同居からすぐにでも救い出してほしいのに、行き当たりばったり出会った人に、「助けて」と言えないのはなぜだろう？　困っていないふりをし、友だちには特に黙って、自分も君らと同じように幸せなんだというふりをするのはなぜなんだろう？

その方が仲間外れにされないから。対等に付き合えて、バカにされず、見さげられずに済むから。親の愚かさが暴露されたら、たちまち自分もその仲間、その程度のものと思われる。

よその人たちは、愚かな親から、その子どもだけを救い出してやろうなどとは、まず、しない。気の毒がりはする。救い出すことは別問題。その厄介を見越して、最初から見ぬふりする人も多い。

現実問題、子どもはまず、親に叱られることを恐れる。自分の親の無知や甲斐性無しが他人にバレると親自身がバツ悪い。なんで親に恥かかせるのかという、親の逆恨みに受け答えする十分な知恵や体力が子どもにはない。つまりは親の見栄っ張りに子どもも協力してしまう。知恵も愛情もない親というのはこういうものだ。

子どもにとって一番の問題は、すぐ身近な人の機嫌。教師よりも、友達よりも、同居の親。早朝から夜まで働きづめで、会う時間ろくになくても、やはり親の機嫌が一番気になる。特に親より体が小さいうちは。親の機嫌取りに子は汲々。それが子どもの生活のすべて。

　子どもが張る見栄のうち、何が一番悲しいといって、**「自分もいい親を持っている」**という見栄。これほど悲しいものはない。幼かったり無知だったりすると、それを見栄だと気付かず、信じこむ。教育や、人の噂、道徳、宗教などに後押しされて。
　それで得をするのは親。得というのは実は当らないかもしれないが、もろに世間からきびしいに批判を浴びることは避けられる。楽はできる。
　子どもは自分が過重な重荷を背負わされていることに気付かぬまま、何年かを過ごす。途中で気付くかもしれず、気づかないままかもしれない。気付かぬまま大人になり、人の親になると、同じことを自分の子どもにしでかす。

　実は、子どもというものは、親が利用する為に産んだり、もらったりすべきではない。そんなことは知っていると皆言うが、言うのは簡単。しかも、知っていることと実行することは違う。子どもを生かし、育てるのが親の役割なのだが、これを心得ている人は少ない。心得ている人さえ少ないのだ。役割実行となっては希少価値の話になってしまう。

　この国では、多くの親が子どもに恩着せがましく、子どもの自由や笑顔を奪う。子を利用し、束縛し、それを教育、しつけだとか。ざっくり言うと、この国は、**子どもいじめの国。**子は親に従順であればあるほど、不幸に、醜悪に、愚かになる。そういう男女を私はごく身近に見てきた。何人も。

　私は、自分の親や、そのまた親に虐められる以上に、この国に、散々虐められ、恩着せられた。しかし、それも私にとっては過去のこと。

　それに気付いたのは、何年か前、十年来の友人との会話の時。その中で、私は自身の思わぬ発言を聞き、恩着せがましさの重荷から解放されたことを知った。

　わが母親の友でもあり、我家の事情も粗方知っていた筈の彼女が、ある会話の中で、私にこう言った。

　「でも、なんだかんだ言っても、あなたも、お父さんがいてくれた**おかげ**で、今こうしていられるんじゃないの」
　それに対して私は即答した。
　「何言うてんの！　生れてきてよかったことなんて何もないわ。死ぬという用事ができただけよ」
　この即答が自分でも思いもしない発言だったのだ。普通、考えがまとまってから、それを言葉に出すものだが、この時は逆だった。言葉が先で、思考はその後だった。思考と言うより、実感。肩の荷が下りるような解放感。

初対面やそこらの人から言われたら、私もじっと我慢し、さりげなく受け流すだろう。今までも、傍観者たちから色々言われてきた。

「人間、木の股から生れるわけじゃなし、両親いてくれてこその、あなたではないか」

「君の半分はお父さんなんだよ」

「親を否定するのは自分の首を絞めるようなものだ」

「いつか、あなたにもご両親の愛情がわかる日がくるでしょう」

「人は親をなくして、初めてそのありがたさが解る」等々。

有体に言って、それらはことごとく私には当てはまらなかった。無理に当てはめようとすると傷に塩をすりこまれるように辛い。そんなことをしていたウブな時代もあった。

旧友はそこをわきまえている筈だった。付き合いが深まるにつれてそうなった。我々母娘二代にわたる被害に何度も耳を傾け、しだいに、血の通った受け答えをしてくれるようになった人物から初対面の人同様の陳腐な言い方をされるのは心外だった。私が彼女に一目置くようになったのは次のような発言からだ。

「そうか、子どもの頃から、**あなた自身が、**父親を嫌いだったわけやね。お母さんが（お父さんを）嫌っているからというわけじゃなく」

その通りだった。私の感性は母親の受け売りなどではなく、私自身のオリジナルだった。

私は思春期の頃から、母親がなぜあんな男に体を許したか、ずっと不可解だった。母親が平凡な結婚をしたと思っていた。見合にしろ、恋愛にしろ。ともかく子が出来ると言うことは、交わったということだ。あんな男とよくやれたものだと軽蔑していた。何と趣味の悪い女か、と。

実は彼女は私の想像するような平凡な結婚をしたわけではなかった。その時代では、特に珍しくもない親の言うなり結婚だったが、そのうちでも実に乱暴な、騙し同然の嫁入りをさせられたのだ。それで、初夜に強姦されて嘔吐したと知った時、私は溜飲を下げた。彼女 21 歳だったという。それを知ったのは男の死後 20 年以上もたってからだった。彼女は 90 歳、私、60 歳にもなろうかという頃だ。彼女自身がそんなことを言い出した訳ではない。私が訊き出した。自分が幼少の頃、その男に湯船に押し込まれ、死ぬ思いをしたことから推量して尋ねた。彼は女子供を扱えない無骨で強引な男だった。実のところ、この「男」と言うだけでも私には抵抗がある。**オス**とでも言いたいところだ。それが 69 歳でやっと死んだ直後は、私はその存在を口に出すこともなかった。家族皆そうだった。その後も、ひたすら忘れたいだけで何年も過ぎた。私が母親の目の玉の黒いうちに、より詳しい真相を知りたいと追及し始めるまでは。

知的障害者でもあったその男は処女の股間に大ケガを負わせたその後も、暴力、暴言で、手篭めにし続けたという。さもありなん、全くあの男に似つかわしいと私は思った。「汚らしそうにするな！」と怒鳴りながら襲いかかる姿は容易に想像できた。私は難儀なことに、そういう場面を鮮明に思い描けてしまう。女親にはっきり確かめない頃から薄々気付いていた。自身が望まれてできた子ではないことを。そういう生み方をした大人を心底軽蔑していた。といって、自分がさっさと消え失せる訳にもいかない。それはそれでこっちの苦痛になってしまう。悪いのは向こうなのに、こっちが苦しむのは癪だ。私ほとほと

自分を持て余していた。

　そんな、軽蔑、白眼視し続けてきた二人の親のうち、一人にでもそうしなくて済むようになることは私にとって、せめてものことだった。女親がなぜそんな孕み方をした子を産む気になれたのかは、すぐに解ける謎ではなかったが、ともかく彼女もあの男には、私と同様の感じ方をしていた。それが判り、ようやく自分と血が通った気がした。
　初夜の強姦——この決定的証言を得る以前にも、私は少しずつ彼女の本音を聞き出すことは出来ていた。最愛の彼氏は戦死、腑抜けになった自分は親や親戚に、騙し同然の嫁入りをさせられた、と。
　産んでしまった子どもの前では、言いにくいことではあっただろうが、子ども自身からの追及であれば、彼女も黙っているわけにはいかなかった。しかし、私はウソをつかれるよりは、よほど快かった。それで判ったことは、子どもは愛の結晶なんかではないこと。そういう子もいるらしいが、私には無縁。私が実感、体験する**子ども**は瘡蓋のようなもの。人体が傷付き、ドジな手当てしかできない時、生じてしまう**かさぶた**。傷を乾燥させず、上手く治癒させれば、できずに済む**かさぶた**だ。治療不手際の証。

　私より少し年上の旧友は、こういった私の気持ちを容易く理解した。
　我々母子が彼を嫌悪したのは、まずはその知的障害による我々への不行き届きゆえにだが、もし、彼にそのような障害がなくても事情は大して変わらなかっただろう。健常者であった彼のきょうだい、親、殆どどの人物にも我々はいい印象を持てなかった。異臭を感じるというのは端から性が合わないのだ。彼らに会った時、嬉しく思えたためしがない。だから彼らも我々に好意は感じなかった筈だ。
　知的障害者でもその障害の程度は一律ではないだろう。相手の表情を読み取れる能力が残っていれば、すぐに相手の女は自分を嫌っていると判った筈だ。彼にはその能力が欠落していたから、嫌われていることも苦にならず、娶り、体を要求し続けた。しかし、と、私は勘ぐるのだ。もし、彼に相手の表情を読み取れる能力が残っていたらいたで、自分を嫌う女を力づくで手篭めにする事に興じたのではないか、と。長年その男やその一族の言動を見せつけられたら、そのくらいの推量は出来てしまう。子どもでも、というより、子どもだからこそ。

　「戦争で、あの子は、あないなってしもうた」と言う、その男を産んだ女の言い草が胡散臭いことも、子どもの私は気付いていた。よほど幼い頃はそうかな、と思っても、成長と共に気付く。その男の幼児期における脳膜炎騒ぎを聞いていたせいか、私は、むしろあんな出来そこないが兵隊検査に合格したことが不思議だった。誰でも合格できるほど、人員不足だったか？と。実際、そうだったようだ。戦時中、知的障害者は兵役に採用してはならないという建前は、なし崩しになり、知的障害者たちがどんどん戦地へ送られたということだ。もともと善悪の判断もおぼつかない男たちが、戦地で殺害や略奪や強姦など

を見習い、体得していったのだろう。現地の人々を虫けらのように扱う習慣を身につけたまま、帰ってきて、嫁を娶る…何たる暴挙。
　彼らを、気の毒だ、と傍観者たちが言うことがある。確かに知的障害者がろくな治療も受けられない上に、その欠陥を兵役に利用されたのだから、気の毒だ。戦後の軍人恩給支給の請求さえ自身では覚束ないだろう。彼らの人生は気の毒には違いない。
　それは傍観者の感想だ。その障害者と生活させられる当事者にとっては、彼らの存在は気の毒どころか、迷惑、害悪だ。救済どころか、排除、抹消してほしい。軍人恩給にしても、いっそ死亡の方が請求手続きも簡単なのだ。死にそこなって中途半端な額を請求しなければならないその家族は思わぬ煩わしさに次々見舞われる。本来本人がすることになっているからだ。「なんで戦死してしまわなかったのか？」その男に嫁がされた女でなくともそう思う。
　ここで、そんな男に嫁がされそうになった女は、なぜきっぱり断らなかったのか？　と思うのは、当時を知らないからである。当時の父権の絶大さを知らないからだ。旧民法下での絶大な父権を。（私も知らないうちは、そう思った）今とは法律自体が違う。家父長制の下、一家の戸主は娘を殺しでもしない限り、売ろうが、犯そうが何をしようが許され、見逃され、合法ともされた時代である。
　彼女の父親は、世間体の為か、娘に形だけの見合いをさせるが、その時は既に相手から結納を受取っていた。役所への届出も彼女自身はした覚えがないという。当時の常識のように性知識も与えられない。何をされるか知らないからこそ、親の言うなりになれたのだ。彼女と同世代の女性の多くが異口同音に言う。嫁入りなんて、その中身を知らないからこそ、できたことだ、と。当時は、ごく一握りの良家のお嬢様だけが事前に心得を与えられたようだ。乏しい心得を。春画を渡されるようなお粗末なことを。
　娘は自分の意志とは関係なく、商品のように相手の男に引き渡された。人身売買にほかならない。
　私の憎悪はこれらの男たちにも及んでいた。つまり、娘を売った男、更に邪悪なのは知的障害者の息子に嫁を取ろうなどと思いつき、遠方から無知な田舎娘をまんまとさらってきた男だ。身近な町の娘たちとは違って息子の実情を何も知らず、逃げるにも遠方で諦めるだろうと、踏んだ上でその娘をさっさと買い取った。この男にだけは私は全く面識がない。写真の一枚も残っていない。私が最も憎む相手、我々母子の不幸の元凶である男の顔は全く見たことがないのだ。

　とは言っても、実感としては死人となった者より、毎日顔を合わす男にいちばんの不快感がある。いちばん悪いかどうかは別として、毎日のようにその姿を見なければならないという苦痛が切実なので、一番悪いと感じてしまう。

　これらのことを断片的にでも話せ、聞いてもらえる友人などはそうそういるものではない。子どもの気持ちや考えを軽くあしらう人が多い中で、旧友の彼女は光った。子どもの感性、気持ちをそこなわずに維持できている稀有な友。彼女自身にも私と似た体験があって、父親にいい思い出はないと言っていた。その男は、手短に言えば口より先に手が出る暴君で、それを恥と思うどころか誇る男。悔しかったら男に生まれてこいと言わんばかり。男の力は女を助ける為ではなく、女を虐げる為。男がしたい放題できるのは自然の摂理。女がそれに従うべきなのも自然の摂理。なぜなら男は優秀だから。体も頭も女より格段上

等。妻に「女しか産めんのか」などと平気で口に出す男。ああいやだ、彼らがこの世から消えた今でも思い出したくない…子どもが親を嫌うのは、子どもが**わがまま**だからではない。**わがまま**は親の方。**親を評価できるのは、学者でも坊主でもなく、その子どもだ**ということを知っている貴重な友人。
　しかし、かつての印象もかすんでしまうような、「お父さんがいてくれたおかげで…」などという、今回の陳腐な言い草を聞いて、私は凹んだ。知りあいも多いこの人、私を誰かと取り違えているのかと思ったほどだ。万人向きの俗っぽい恩着せがましいお説教。目に見える遺産相続なら、負の遺産は堂々と放棄するのに、目に見えない「親の恩」の話になると、途端に計算できなくなる人のなんと多いことよ。プラマイ（＋－）かまわず、ありがたく受けよというわけか。
　露骨に私は抗議した。私の場合、ドジな産ませ方をする親がいたからこそ、不幸な自分が出来てしまった。どんなに心の持ち方、モノの見方、あれこれ切り替え、詭弁を弄し、この事実を美化しようとしても、できるわけない。宗教や道徳に性根抜かれた人はできるのだろうが、あいにく私はその類には馴染めなかった。ウブな頃には必至で馴染もうとした。だが、すればするほど、自分が利用されているだけなのが判ってくる。彼らは口先では子を憐れみ、尊び、大事にするが、土壇場では子どもの味方はしない。なぜなら、子どもはカネを払えないから。
　宗教や道徳の威圧とつるんで子を圧し、ふんぞり返る、そういう親や、そのまた親に、にどうやって、**おかげ**だなどと、ほんの一瞬でも思えようか。皮肉をこめて言うならまだしも、まじめに、**おかげ**などとは、口が裂けても言えない。とっさに出た言葉が、先にも述べたような「**死ぬ**という用事ができてしまっただけ」ということなのだ。
　今こうして友人とお茶する楽しさも骨抜きにする乱暴な言い方かな、と少し気が引けたが、私の気心を熟知していた友人は、気を悪くする様子もなく、「そうか、なるほど」と納得した顔で笑った。

　私は自分の発言に驚いた。全く、とっさに出てきた言葉だったが、それで気持ちが急速に整理され、各種の恩着せがましさから解放された。自分の命について、見栄を張ることから解放され、長年実感してきたことを白状できた。つまり、生んでくれたことに感謝できるのは、その人生にいくらかでも楽しいこと、快適なことがあるからで、それがない人生では、感謝できる筈もない。それでも、人生最期は締めくくらなければならない。感謝できた人の人生と同様に、あるいはそれ以上に、きちんと。
　死ぬというのは、ある人々にとっては人生の**終点**のようなことであり、受け身で済む話だろうが、我々みたいに終点から始まったような人生にとってはそうはいかない。至難の業、いわば、幽霊が死ぬような難しさがある。
　ここで私の言う人生とは、人々が、多分まだ人生とは意識しないだろう時期、親に依存せざるをえない時期を含む。というか、主にそれ。これがなく、いきなり自力で生きられたら、どんなにいいだろう！とんでもない親を引き当ててしまった子どもなら、誰もが、きっとそう思う。迷惑なだけで、**頼もしさのカケラもない親**を**体験**しない人には想像もできないだろうが、そうなのだ。そして、いつの世にも**彼ら**はいた。いわゆる**毒親**、子どもが怨み、憎み、 復讐したくなる親というものは。それを隠蔽、ごまかすのが宗教で、それは政治と紙一重。

彼らは子に、親への感謝に加えて、憐れみの情を持て、と言う。病気、醜悪、甲斐性なしの親であっても嫌わず、尽くし、世話しろと言う。まるで役割本末転倒、娘を犯す父親をも許せと言う。そう言う自分がやってみろ、それで子どもが育っていけるか、体験してみるといい。健全な子どもは親の事情など考えない。情け容赦なく、健康な親、美しい親、**頼もしい親**を要求する。それを得て、始めて子どもは成長できる。子どもでいられる。宗教の説くいい子どもとは、人間ではなく、人形か、かさぶただ。生きていない。世界中の宗教すべてを体験できたわけではないから断言できないが、体験可能な巷の宗教を遍歴した私の実感。宗教は親しか救わない。そのくせ、子どもに死ぬなと言う。毒親の代わりにまともな親を与えるという当たり前の措置もとらず、ただ漠然と自殺はよくない、地獄落ちだと言い出すのだ。
むろん子どもは信じない。その地獄より今が辛いと思えば死ぬしかない。辛さの感じ方は千差万別。親とやり合う力量も人それぞれ。その子の感性、力量如何で子どもは生きたり、死んだり、死にそこなったり、千差万別。子は一律に親に守られ育てられると思うのは大間違い。幼少より、親との戦い、かけひき、生存競争で、成人するころには、すっかりくたびれ果てる子がいる。親より老けこむ子もいる。
私は女親からよく言われた。子どもらしくない、年寄りのようだ、と。友だちからも、言われた。老けてるね、と。反論もできない、その通りだったから。彼らは恐ろしく元気で、恐ろしく口が軽く、機嫌がよかった。私は一日のうち、夜がいちばん安らぎの時だった。やっとほっとし、もう朝など来なくていいと切望する自分に比べ、一日が終わってしまう夜がいちばん悲しい、遊べなくなるから、と言う子がいた。私は声も出なかった。体力や、環境の差を思い知らされ、その子と話しをするのも怖くなった。

自力で人生を切り開けない子どもが死にたがるのは、子どもが病気だからではない。健全だから、そんな人生を生きたくないと思うのだ。親に先立つ子が**親不孝**などとは子に失礼。親が**子不孝**なのだ。

思えば子どもの頃、（さまざまな困憊で押しひしがれる子どもたちがそう望むように）私もよく、消えて無くなりたいと思った。私の場合、その無くなり方は半端ではない。すっかり消滅したいと願うのだ。つまり、自分の姿かたちも消えて無くなり、自分を知っていた人々の記憶からも消えてしまいたい、というものだ。仮に自分が死んでも、誰かが自分を覚えている限り、本当に消えたことにはならない…本当に消え去ってしまうには、どうすればいいのだろう？　子どもの私は真剣にそう考えていた。

自殺する子がそんな子ばかりとは言えず、中には「これ見よがし」に死ぬ子もいるだろう。そういう死に方も責められない。子どもは精いっぱいの事をしたのだ。

「疲れを知らない子ども」という言い方がある。そういう言い方をされると「子どもというものは疲れを知らないのだ」と思ってしまいそうだが、現実はむろん違う。**子ども**という**モノ**があるのではない。子どもたちは、一人一人、皆、違う子どもで、皆、違う疲れ方をしている。
「頼れる親がいない」と、率直に嘆く代わりに、私はこう考えたこともある。

「優秀な子どもというのは、どんな愚かな親から生まれても、立派な人間に成長できる子のことではないだろうか」
　無論、それは詭弁。愚かな親たちを喜ばせる邪道でしかない。優秀な子ども、というのがこれまた、笑止千万。苦しむことに専念すべき子が、そんな**うわごと**にうなされるとは。しかし、子どもの私はそんな思想にまでしがみついていた。苦しんでいた。苦しみとは自覚しない。イジメのまっただ中にいる者は往々にして、イジメを自覚しないのと似ている。夢想にふけることもしばしばだった。ある日、本当の親が自分を迎えに来てくれる、という楽しい夢だ。いつもゴホゴホ咳き込むこともなく、タバコや汗の異臭もない、元気できれいな母親、身なりのいい頼もしい父親…

　子どもが見栄を張るのも疲れているせい。自分の込み入った事情や欲求をあれこれに話さず、平凡な子どもに見せかけておく方が疲れない。それ以上疲れなくて済む。

　この辺で私の昔の疲れを一つ下ろしておきたい。遅ればせかもしれないが、下ろせる日が来たのは嬉しいことだ。10 歳ぐらいの時の事件だ。（私にとってはそうだった。今思えば、世間によくあるような家庭内の瑣末事だが、当時のその子には生死に係わるような大事件だった）
　私は幼いころから絵が好きで、手近な紙切れや、家の壁に色んな絵を描いて楽しんだ。クレパスで、黄色の上に青を塗ったら、きれいな緑色になった感激が絵にハマった始まりだった。だから私は今でも、青と緑をひっくるめて「青」と言うのに抵抗がある。青信号、青菜の類だ。あれは緑信号、緑菜なのである。壁には鉄筆（てっぴつ）のようなもので刻みつけたと思う。表面より白っぽい下地が出てきて、紙に描くのとはまた違った味わいがあった。楕円形を描きたいのに、いくつ描いても真ん丸な円形しか描けなくて、もどかしい思いをしていた私がある日、楕（だ）円形を描けた嬉しさは、長いこと壁に刻まれて残っていた。ボロ家でもあったので、親は見逃し、それで叱られたことはない。学校へあがってからも図工や美術は好きで、成績もよかった。思春期が近づくと、私も人並みにエロい絵や写真に興味をもち始めた。当時は今とは違ってどの写真、絵でも陰部はかくれていた。確かに私も銭湯でしばしば思ったように、人間の体毛は目障（めざわ）りなもので、写真や絵にする価値はないと思えた。長じてから、それをわざわざ細かく描き出す春画を見るようになったが、少しもいいと思わなかった。自分が描く裸体にはそれがなかった。春画のデッサン力（りょく）不足も私には目障りだった。あからさまな反写実的技法は、意識してのデフォルメ（変形）なのだろう。距離感や立体感の欠如には笑うしかない。それで**笑い絵**と言うのだと、これは私なりの解釈。それに比べ、ギリシャ彫刻は十分観賞に耐えるものだった。裸体自体が美しかったし、体毛の色がくっきり目立つというものでもなかったからだ。それにしても、これらも十分エロいのに、俗な写真や絵とは一線を画した**芸術**としてふんぞり返るのはなぜなんだろう？　などと私はよく思ったものだった。
　その頃のある時、私は紙切れに裸体女のエロいサディスティックな絵を描いた。何故そんなものを描いたのか、自分でも判らない。描きたかったから、というしかない。当時私は自分の身体が女っぽくなることに抵抗を感じ、言いようもないゆううつを抱えていた。また、既に述べたように、よその親に比べて自

分の親が何かにつけ冷淡、不甲斐ないことに失望していた。自分の困惑や苦しみを表現したかったのか、女体を呪っていたのか、酷く虐められる女の絵が出来上がった。一枚の絵に火責め、水責めを同時に盛り込み、なかなかの迫力だった。私はそれを誰にも見られないよう、自分なりにしまい込んでいた。しかし、ある時、女親がそれを見つけ、私に罵詈雑言浴びせた。別件でお小言言われているとき、ついでのように、その落書きのことを持ち出して、私をこき下ろした。現物を私に付きつけた訳ではない。しかし「あんなえげつない絵」とか言うので、すぐわかった。女親が、しばしば子どもの持ち物を詮索するのは知っていた。それに私が不快を示すと、こう言うのだ。「親に見せられんものがあるのか！」　それが決まり文句で、彼女も子ども時代、親にそう言われたのだろう。私はいつも心の中でこう言い返していた。
「あるわ、当たり前やろ。見せられんものだらけや」
今回、私は更に思った「親なら、子どものそういうもの、見ても見ないふりしてよ」

彼女の形相、剣幕は凄かった。叱責の言葉は「あんなエゲツナイもの描いて！」ぐらいの短いもので、暴力が伴うわけでもなかったが、私の弱りようは壮絶だった。見つかったことを自分の一生の不覚だと思い、その場で消えてしまいたかった。苦しいだけで何も言えなかった。苦痛というよりは内臓を引きずり出されるような感覚だった。生涯であれほどの屈辱、困惑、後悔を私は知らない。それから数十年後に投資詐欺に遭った時でも、あんなに孤独ではなかった。困惑や怒りはあったが、仲間がいた。被害者仲間や弁護団が。
子どもの頃の苦悩は孤独で、しかも長引いた。次の日も、また次の日も消えてなくなりたいと思い続けた。上手く消えられない自分を情けなく、汚らわしく思いながら、日が過ぎ、年月が過ぎた。この件が、その後、持ちだされることは久しくなく、約 50 年後に私が指摘した時には彼女は忘れていた。あまりに不快すぎることは忘れるようだ。

何十年も、こちら一人で重荷を引きずっていたのかとあほらしくもなるが、あの時死ねていたら、私の勝ちだったか？　負けだったか？
生き延びたことは、私の負けだったようにも思える。事件後なるべく直後に私が死ねていたら、女親は少しは反省しただろうか。その**死因**にも思い当たっただろうか。後悔しただろうか、それとも陰気臭い者が消え去って清々しただろうか。…未だに、こんな混乱と不快で、心かき乱される思い出しか残らない。
その件で、子ども時代の私は女親にすっかり心を閉ざすようになった。それまでも心許していた訳ではないが、より疎ましくなった。
むろん彼女だけが悪かったわけではない。エロい事ことごとく毛嫌いさせるようにした彼女の亭主、それを押し付けた親たちだ。虐待図で彼女は自分の強姦被害を思い出してしまったのかもしれない。日々のやりくり、煩わしさで、何とか忘れかけた忌まわしい事件、古傷をこじ開けられた気がしたのかもしれない。彼女は事件そのものは忘れていたが、それによる当時の私のショック、困惑などを知ると、後悔し、しょげていた。悲しそうにこう言った。
「幼児を虐めた自分は地獄へ落ちるかなあ」

幼児ではなく少女の頃のことなのだが、私は黙っていた。ただこうは言っておいた。
「地獄へは落ちんやろ」
その根拠は何と言ったか、よく覚えていないが、多分、「こうして自分が怨み事を喋ってしまっているから、または、故意に虐めたわけではなかったから」のようなことだったと思う。

生活苦や亭主への苛立ちで、しばしば子どもに八つ当たりした、と認める彼女にとっては、子どもの年齢や成熟度など上の空だったのかもしれない。
当時の彼女の手に負えなかったことはわかってはいるが、私はこれも言いたい。子どもに、狭くてもいいから、プライベートな空間を与えなかったことも大きな落ち度だった、と。何かにつけ、子どもは窮屈でたまらなかったのだ。
因みに、賢明な養育者なら、子どもに制約与えず自由に絵を描かせ、その子の病の治療や改善に役立てるという。子どもが描くどんな不可解、残酷な絵でも、むろん下手な絵でも、咎(とが)められたり、けなされたりすることはない。私は図工や美術の時間に、しばしば、絵とはそういうものではないかと思った。作品に点数付けたり、上手下手(じょうずへた)を云々して生徒を凹ます教師の仕事っていやだな、と思った。

自殺するのはよくないことだと誰もが言う。それで無理に無理して生き延びると、誰もが避ける。生き延びた者を労(ねぎら)いもしない。敬遠し、追い払う。陰気だとか、ひねくれているとか言って。

突然だが、こんな自分が、ある日、人の親になった。
それが見栄っ張りの延長だったか、逆に断念だったか、よくわからない。延長ではない気がする。一応は女性だった私が、実は 20 代から 30 代のある期間、生理がなく、しかし、生活に不自由は感じなかったので、苦にもならなかった。煩わしさがなくてよかった。男ではないから、女。それで十分だった。それが 30 代の半ば、ある男に出会ってほどなく生理が再開。え？と思ったが、正直、彼にときめいたわけでもなかった。小柄で痩せてタバコ臭もある男。（まだ腹も出ていず、髪も豊かだったが）私と同い年だが、初めての会話で「僕、甘えたいんです」などと言う。その他、頼もしさの正反対をあれこれ聞かされ、こちらの緊張がほぐれたのは確か。初対面でカネの話をする率直さも驚きだった。給与明細見せて、「これに家族手当が加わると…」などと、現実そのもの。家族手当など、当時の私自身の収入に比べたら些細なもので、とても引き換えにできるものではなかったが、当時は主婦の税制がどんどん優遇されていた。主婦になれるなら、ならなきゃ損だとまで思わせる迫力だった。私もそれにのまれたようだ。フルタイム勤務は諦めて、パート勤務の主婦も悪くない…などと考え始めたのだから。
彼は、私のタバコ嫌いを知ると、やめると言う。私を気に入った様子なのはすぐ判った。気に入るというより、私を頼りにしたい、助けてほしいような切実さが漂っていた。
会って何度目かには、手を握ってきた。別に嫌ではなかったので、させておいた。握り返しはしないが。それでも幸せそうにする男を私は可愛く思った。こんなことで嬉しいのか、と。

何度か会ううちに「他(ほか)に付き合っている人いたら皆断ってね」と言い出した。事実、こっちには未練あ

る人もいたが、彼に比べると、のろまに思え、かすんできた。因みに、そういう男たちが、彼を刺激することになったらしい。どこにでもいるような女でも、他の男ともつきあっているとなれば、光ってくるらしい。この女を取られてたまるか、と、つい、思ってしまうようだ。人は不思議なもので、競争相手を意識すると、思わぬパワーが出るようだ。お目当ての女に自分がどう思われているかなど、彼は余り気にならないようだった。その単純さが更に私を気楽にさせた。気楽と言えば、その体臭もだ。わきがっぽいな、と私はすぐ気付いた。自分にもその気があり、以前の夫には気を使った。好きでもない相手にしょっちゅう気を使うのは疲れることだった。と言って、気も使わず、バレてしまうのもシャクだった。以前、見合いした女がわきがっぽくて断ったということを聞いて、私は複雑な思いだった。直接彼からではなく、姑が口を滑らせたのだが、嘘でもない気がした。女性は緊張して余計汗ばんでしまったのではないか。自分は若い頃にした手術のおかげで、かなり軽減していたが、それでも気を使っていた。気を使いながら、彼の傲慢さ、思いやりなさのようなものに反感を覚えていた。「誰も、好きでそんな体になるんじゃないよ。でも、お相手選びは体の印象からしか入れないの？」

その答えが出ないまま、今回の場面に突入したわけだが、どうせそれほど好きでない相手なら、気を使わなくて済む方がいい、と私は思った。そのうち彼にも効果バッチリのデオドラント剤使わせよう、と。それにしても、タバコ臭も含め、もう少し匂いに敏感でいてほしいとはしばしば思った。実際、中身よりは服や持ち物にしみついているのだ。後日、そういう物を私はどんどん処分した。更に後日、禁煙に成功した時、彼はいっぱしに言った。「タバコ吸う人のそばへ行くだけで臭いな。持ち物まで臭いで」

彼の、無骨さについて言うと、私の感じ方とは裏腹に、彼としては何とか私に気に入られようと懸命に努力していたと後日聞かされる。服装、話し方、話題選びに、会う場所選び等々。私には、適当な行き当たりばったりぐらいにしか感じられないのに、彼の方ではそうではなかったという。無論、デオドラントにも気を使ったというが、服自体を取り換えなければだめだったのだ。

それはともかく、私に会う時の彼の喜ぶ顔はいいものだった。メガネなしが大きな魅力だった。コンタクトも入れていないという。自分が近視だったので、裸眼で遠目がきく人というのはそれだけで憧れだった。アフリカ原住民人並みとはいかないにしろ、裸眼で難なく生活できる彼は頼もしく思えた。（後日、乱視や老眼、白内障に網膜剥離、と、頼もしいどころではなくなるのだが）

さて結婚。一度目の結婚もそうだったが、私はときめく相手と暮らせたためしがない。…まるで、ときめく相手と結婚したかったような言い方だが、違うな…このあたりを上手く言える筈もないが、若いころから、私がときめくのは、結婚できない相手ばかりだった。と言うより「結婚しなくていい相手」と言うべきか。私にとって、結婚とは忌むべき愚行で、誰かにときめき、時には深い仲になっても、それを結婚で汚してしまいたくなかった。この感覚はどの男にも理解不能だったようで、私が、やっとこの縛りから自由になった時には、どの男も去っていた。

それにしても、私は、男たちの甘い言葉、お世辞にはめっぽう弱かった。物心ついた時から、親に、鬼だの、ブスだの、色黒で何を着せても似合わん、などとけなされまくった私は、他人からのちょっとした讃辞にもすっかり舞い上がってしまう。似合わないと決めつけられた淡いピンク色を、「似合うよ、なぜ着ないの？」などと言われようものなら、イチコロ。実際、親に、似合わん、と言われたその色を、私の方では好きだったので、似合わないと言われた時は、その色から嫌われた気がして、悲しかった。いわく

つきの色彩になってしまい、手放しで、好き、とは言えなくなっていた。

　その色を似合うと言ってくれる！　私をその気にさせるには「その服とても似合うよ」とかで十分。漆黒、つやつやだった髪を褒められてもよかった。やんわり内巻きのストレートボブで、自分では貴重なチャームポイントにしていた。それをほめられると喜ぶ、私は実に落としやすい女だった。妊娠させて結婚してしまおうと企む男もいたが、私は子宮に避妊用器具を入れていた。医師はその効果が 100%ではないと言ったが、無防備よりはよほど心強かった。それでも、私はそれをおくびにも出さず、相手側での避妊を望み、してもらっていた。

　まるで若い日の私が遊び好きで、口先うまい男なら、誰にでも転んだかのような言い方になってしまったが、それは違う。私が抵抗を覚えて仕方ない表現の一つに「女なら**誰でも**惚れるいい男」と言うのがある。「男なら…」でも同じ。**誰でも**　に、抵抗を覚える。人の好みはそれぞれ皆違う。どんなにイケメンやダンディと世の中で定評ある男でも、私には蚊の刺したほどにも魅力を感じない男はいる。嫌悪さえ感じる場合もある。なぜか、それは自分でも説明できない。好み、相性というものだろう。男から見た女の場合でも同じだと思う。このおかげで幾組ものカップルが生れるのだろう。

　因みに、「好みの異性のタイプは？」などと訊かれて、本気で自分の好みを言ってしまうようでは、アイドルになれないな、と思ったことがある。逆に言えば、一流アイドルは個人的な好みを明かさない。「お好きなタイプは？」などと訊かれても、「どんなタイプの女性もそれぞれ独自の魅力があるので、タイプは決められません」などと答えるのだ。これでどんな異性も、更には同性までも敵に回さずにすむ。

　ところで、私は子どもの頃から「結婚は人生の墓場」だというのは本当だと思っていた。自分が見なれた男女、特に女にぴたりの言葉だった。いくらドラマや映画で「幸せな結婚」を見せびらかされても、惑わされなかった。子どもにとってはそんなのニセモノ。身近な人の話でも信じなかった。同級生が二十歳になった途端に結婚し、とても幸せだと言いふらしに来た時も、私は乗れなかった。口先ではむろん祝福したが。内心こう思っていた。「仮に今そう見えても、ほどなくホンモノに転落する。後で吠え面かくなよ」と。一年ほどしてから、その子が実際、別れるの、すっぺたのと泣きごと言いに来た時は、笑いを堪えるのに困った。

　子どものとっての本物の結婚とは、目の当たりにする親たちのことだ。子を産み、育て、歯もガタガタ、さんばら髪で亭主をなじり、子を叱責することだ。脚には静脈が浮き出し、乳はしぼみ、子に食わす為に自分が食べたい物も食べられなくなることなのだ。それに男のギャンブル、暴言、暴力等々に耐えながら、内職、パート、そのうちやっと正社員と、あくせく働きまわることだ。私が長年見てきた、これが本当のはずだった。

　「違うよ、世の中の男が皆こんな訳ではない。もっとまともな男もいるから、会ってみたら？」
と、見合いをすすめる女親に、私はかみついたことがある。「若いだけが取り柄なんやから…」などとも言っていたようだった。それも気に食わなかった。普通なら、人生で最もきれいでいられるその頃が、私の場合は一番醜い時だった。太り、むくみ、くすんでいた。着飾ることなどしたくもなかった。

　疎ましくてたまらない男と一つ屋根の下にいるうちは、我々は醜悪だった。母子共に、女の原型を外していた。顔はひきつり、体はずんぐり、あるいはやつれ、しぼみ、萎えていた。もし、女親の望むように、

私がまともな男と出会うとしたら、それはもっと後でのこと。苦の種の、この男から逃れ、見なくて済むようになってからのことだ。私は女親にどなった。
「言うな、ばかたれ。見合いやて？ そんなん、こわーて（怖くて）できるか！」
女親は泣いていた。「自分が、いい見本を見せることが出来なかったからや」と。私が20歳の頃だった。同級生たちが競って参加した成人式にも、私はむろん出なかった。
20 歳過ぎれば皆忘れてしまう成人式など、やり過ごすのも容易だったが、結婚はそうはいかない。同級生やら、ご近所やら、ヒマ人たちの飽くなき話題の一つだ。私は結婚を恐れていた。私が若い日に恐れたことは結婚と肥満。日々の気苦労は、ほぼ、この二つの回避に尽きるという単純この上ない生活だった。結婚の方をより警戒していた。自力だけで解決できない難問を孕むからだ。結婚生活そのもの以上に、結婚式、**披露宴**を更に恐れた。あのろくでなしが父親面して、しかるべき席へ着く？！　それは私にとって、名状しがたい汚辱だった。何を置いても、全力挙げて回避しなければならないことで、33 歳のある時まで私を縛り続けた鉄則だった。
20 代の後半から念願の一人暮らしを始め、やっと私は心置きなくお洒落も楽しむようになった。男性たちと関係を持つようにもなったが、その主な目的は、体型維持の為だった。ウォーキングやジョギング、ジム通いなどより、よほど楽しく、快く、しかも体が締まってくるのは嬉しいことだった。体を許せば、結婚するに違いないと思い込んだ男が多く、逃げるのに苦労はしたが。結婚など、実家の疎ましい人物がいる限り出来ないのだ。それを思い出すだけで、自分の表情が曇るのがわかった。いいムードの時にそんな込み入ったややこしい話しなどしたくもないし、仮にしても、どうやって彼らに理解させられようか。ろくでなし親に手を焼いた体験も無い彼らに。
それが外れて（つまりオヤジがこの世から消え）やっと人並みになれた時、素朴に喜び、深い考えもなく、した初婚。女親の助言が効いた。「一度は戸籍を汚しておけ。全くの独身では、世渡りしにくい」更に勇気づけられた言葉は「してみて、あかんかったら、帰ってきたらええ」その言葉通り、結婚式、披露宴も人並みにやって、約半年で帰ってきた。書けば簡単だが、実際の帰還はひと苦労だった。結婚とは、するにしろ、辞めるにしろ、面倒なものだ。まあそれで、箔が付くなら仕方ないことだが…ぐらいな思いが当時の私の本音である。

ときめきと結婚は私の中では対峙していた。物心ついた時からそうで、ときめくとは死ねることで、結婚とは死にそこないに他ならなかった。長年染み付いたこの感覚は、それが不要になっても、容易には消えない。無論そんなことを口に出したことはない。
さて、ときめき不足とはいえ、二度目の結婚生活は初婚よりずっとよかった。相手はもっとそうだったらしい。そりゃ以前のマグロ女と比べたら、どんな女でも、活きた女はいいだろう。まともに収縮痙攣し、声まで上げるとあっては手ごたえバッチリ。泣きだすこともしばしばで、夫は戸惑いながらも、感激また感激の日々。彼は言った。「アダルトビデオの映像は作り話だと思っていた。あんたを見てわかったよ。

ほんまにあないなるんやなあ」それでそのビデオの類、処分しておけばよかったものを、ぐずぐずと、しそびれたもので、何年後かのある日、息子に発見されることになる。小学生の息子に。
「お母さん、こんなビデオ捨ててるわ、お父さんかな？」台所片隅のゴミ箱に捨てられていたビデオカセットを見つけた息子がそう言った。小学校低学年、7〜8 歳頃か。壊れても汚れてもいない物を捨てるとはどういうことかと、息子は訝(いぶか)しがり、見たそうにした。私はちょっと戸惑ったが、ここで息子に思い残すことをさせてはいけない、と思った。息子にこう言った。「ほんまや、なんやろ？　見よか？」
　息子は喜び、一緒に観賞した。奇異な結合の仕方など、アダルトビデオなりの演出はあったが、成人男女の身体的構造や機能がよくわかり、教材としての役割もかなり果たせそうだった。息子はこれを誰がどんなふうに撮影したか、に気を取られたようで、「きっと超小型の隠しカメラで盗撮したんやろ」と言った。演技やスタジオ撮影ということは思いつかなかったようだ。なんともはや、可愛いな、と思っていたら、ズバリ質問して来た。「お母さん、こんなのした？」
　仰向け女性が自分の胸の上に膝を曲げて乗せ、それに男性が挿入するという場面である。「いいや」と私は答えた。「こんなんじゃなく、普通にペタンと寝て、したよ」と。女性側の身体(からだ)つきにより、こういうのがいい場合もあるということはまだ教えなかった。**私**がどうだったかを訊いているのだし、それでいいと思った。息子は納得したようだった。それで、そのビデオは無事に成仏した。
　その時、私は息子に、それが妊娠に繋がることを教えた覚えはない。そんな心のゆとりはなかった。いつどんなふうに息子はその関連を知るようになったのか……日本の学校の性教育の現状はお粗末で、性交抜きの事しか教えない。女性の体内の卵子と男性の体内の精子が結合することは教えるが、**「どうやって」**結びつくのかは教えない。「**受精に至る過程**」は取り扱わないということになっているそうだ。まぬけすぎないか？
　これは世界でも特異である。ヨーロッパなどでは性交は無論、性交時の快感にまで言及する教科書があるし、韓国でも、教科書に性交を想起させる絵があるそうだ。実は日本にも、まともな時がほんの短期間あった。1991 年、教科書の副読本として、『ひとりで、ふたりで、みんなと』（山本直英監修、東京書籍）が出て、小学校現場で普及していたという。性交の図もむろん出ている。それが 2002 年前後から、一部保守派による性教育バッシングで、姿を消してしまった。今ではごく一部の図書館にしか保管されていない幻の書籍である。
　なぜ日本では性交、つまり「受精に至る過程」を子供たちに隠したがるのか、私は考えてみた。**不同意性交等罪**というものが、ごく最近やっとできた国であることが大きなヒントになるだろう。つまり、日本の男たちは女の同意を取り付けることなく性交に及ぶことが多かった。それを罪悪とも思わず、男の特権のようにやっていた。女も仕方なく応じていた。殴られるよりはましだとか、断れば機嫌悪くなるとかの理由で。それによって子供ができたとしても、正々堂々と子供に言えるようなものではないわ、というわけだろう。
　男女共、きちんとした同意を取り付けた上での性交ではないので、後ろめたさがあるのか、そこは隠しておきたい部分になる。それをかばおうとする学校には子供の性教育は任せられない。せいぜい後ろめたさのない性生活をした男女が、ありのままを子供に教えられるようになることを望む。
　私はそれに近いことができたのではないかと思う。エロビデオに驚いた息子は、すかさず私に訊いた。

「お母さん、こんなのした？」　私は、映像と同じではないが、男性の挿入を受け入れはしたと答えた。息子を煙に巻いたり、答えを先延ばしにしたりしたくはなかった。訊いてきたその時が答える時だと思えた。なぜそんなことをするのだろう、と息子は思い、すぐに答えを見つけられなかったかもしれない。そのうち学校で、女の人のお腹に赤ちゃんができることを教わると、男性の挿入の意味が解ってきたと思う。学校で教わらないその部分をもろに見ることができた息子は、卵子と精子がどうやって結びつくのかを容易に理解できたのだろう。

父親が帰ってきても、息子は見たビデオについて何も言わなかった。思ったことを何でもかんでも口に出しがちな息子にすれば、これは大した配慮だったと思う。

新婚から急に子育ての話に飛んではいけない。話を戻そう。我々の慣れ染めは、近所の女性、母の長年の友人の引き合わせだった。「私の甥が離婚して独りでいるが、出戻りのあんた、会ってみない？」から始まった。いわば**破れ鍋に綴蓋**（われなべにとじぶた）そのもの。

さて、彼と暮らし始めると、その出会いの時から聞かされていた、彼の娘のことを忘れるわけにはいかなくなる。親権は前妻にあり、もう会うつもりもないと彼は言うが、現実に支払う養育費が否応なく子どものことを思い出させる。よちよち歩きで、彼に「おっちゃん、行こう」と言って、手をつなごうとした娘…。別居の期間が長くて、彼を顔見知り程度にしか思わなかったのだろう。後日聞いた話では、彼より一つ年上の前妻は彼より体格よく、マグロ女だったが、ほどなく妊娠、できた子は自分ひとり占めにして、ほとんど誰にも触らせなかったという。彼女自身が母子家庭に育ち、父親の話はご法度だったという。婚外子だったようで、私には羨ましく思えた。これがお前の父親だと、見たくもない男を見せつけられるよりはよほど幸せだ、と。

私は子どもの頃から気付いていた。父親ということになっている男の顔に馴染みがあるとするなら、それは**見慣れている**というだけのことだった。見慣れ、聞き慣れているということだけだ。その声とか、仕草、咳払い、おなら、足音だとかを。よその子たちが親を見る時のような嬉しさや頼もしさの気持ちがわかない。要するに、見ても、ほっとも、にこりとも、できないのだ、がっかりはしても。

そんないやな思いをしないまま、いい体格に育ち、結婚、出産をした女性。正直言って、私には羨ましく思えた。嫉妬さえ感じた。私に欠落したものをすべて手に入れているように思えたのだ。私が再度突入した結婚という罠からも自由になった卒業生にも思えた。彼女が産んだ女児の顔は彼女自身と生き写し、男親の面影のカケラもなかった。実に容易く自分の分身だと思えるだろう。後日、私は夫が処分し損なった写真をみつけて、そう思った。これだけ似ていなければ、彼も未練が少なくてすむかも。しかし、現に自分の手を引いて「行こう」と誘った娘の小さな手の感触は忘れ難いだろう。

父親としては辛かったろうな…。私との生活で、新たに子が出来なければ、彼はずっとその娘を思い続けるかも知れない。対抗策はその娘を忘れるほどの新たな刺激を彼に与えることだ。私は子を産むことにした。いつの頃からか私の中に生れていた消極的腹案、子どもを産まずに**もらう**という選択肢は二の次になった。もし産まれなければ、ということに。

自分が子ども（特に自分の実子）が苦手で、産みたくないことは新婚早々夫に告げていた。夫はさびしそうな顔で、「女の人は子どもを産むようにできとんよ」と言った。それきり会話は途切れたが、私の意

向を聞いてからも夫は私を大事にした。いわゆる妻を**子産み道具**とみなす男ではなかった。多分、私が子を産んでいなくても、またはもらっていても、私や子どもを大切にしたと思う。

現実には、私は一念発起して、産む準備を始めた。説明できない、この気まぐれは。敗北かもしれない。不意に再開した**生理に操られた**のかもしれない。それなりの体力が残っていたということではあろうが、それは自力では引き出せなかった。

これは私にとっては、自分の信条を裏切るような大事件だった。幼いころから人の親の重責を思い知り、それを果たすのが如何に難しく、子を不幸にする恐れのある大仕事であるかを思い知っている私は、自分は決して**自ら産んでまでは**人の親にはならないと決めていた。バツイチ同志の結婚でも、互いに子なしなら、そのまま子なしで終われたかもしれない。損得、苦労の計算をするなら、子なしの方が圧倒的に得だし、楽だろうから。

さて、想定外の事柄に挑むのは大変なことだ。それも時間的に逼迫している。私は既に 38 歳だった。それまで避妊にばかり神経とがらせていて、解禁すればすぐにでも、のように思っていたが、いかんせん、現実はそうはいかない。20 代の弟嫁などは、一発で命中などと羨ましい限りだったが、私はなかなか命中しなかった。がっかりする私に、夫は言った。「そんなこと忘れて遊ぼう。遊んでるうち、お釣りが来たら、もろたらええのよ」と。そう私も思おうとしたが、やはり何かせずにはいられなくて、色んな努力をした。事後逆立ちしたら妊娠しやすいと聞けばそうした。基礎体温も毎朝せっせと記録し、その他、根拠あるなし交々の方法、墓相のあれこれ、実にいろんな無駄遣いもした。後になって無駄だと判るし、噴飯ものだが、それしかすがるものを知らない頃は、後生大事のお守りである。例えて言えば、怪我人の松葉杖。幼児の歩行器。ある時期不可欠。いずれ要らなくなるにしろ。

私の母はそれを見越していたのだろう。私がどこぞやから仕入れてきた墓相の話。よい子孫を得る為にはよい墓を、という俗説。これにすっかりハマって、こだわり始めた私に戸惑ったようだが、反対はしなかった。「そんなこと、気休めだとは思うけど、あんたがそれをせずに障害児でも生んでしまったら悔やむだろう」と、高価な墓購入に資金を提供してくれた。そもそも、ちゃちな体の私に出産など、無理だろうと言っていたほどだから、そのお守りという気持ちもあったのだろう。「これで、あんたが子どもの時、辛い思いさせたの、許してな」と言って。「うん」と言う以外に自分がどんな返事をしたかよく覚えていないが、体がジワーッと温かくなったのは忘れられない。墓代と言うより、私への慰謝料、子宝料として、今でも生きているカネだ。墓自体は手放した。「子宝さえ手に入れたら、用はない」とばかりに。あるいはまた、こんなやり方、乳児院の子たちに失礼だ、とも思った。墓に必要な家系図も作れないのだ、彼らの多くが。

思う子宝を手に入れた後は、子育てに時間もカネも食われ始めた。そのうち、墓のバカにならない管理費や、墓参がうっとうしくなってきた。夫や親戚から聞く先祖の実態を知るにつれ、そんな人たちを祀りたくないとも思えてきた。実子でもない子を役所に実子と出生届を出したり、子供たちを思い切りえこひいきしたり…

しかし、黙ってやめて先祖に逆ギレされてはかなわない。念のため最後の墓参で挨拶した。「思う所あり、祀る気がなくなりました。こんな狭い所より、どうぞもっと広い自由な所へ行って下さい」と。その後、引越しを機に墓屋からの連絡は絶えた。

その「吉相墓（きっそうぼ)」とはどんなものかといえば、まず初代墓１基を造り、その後の子孫の墓を、夫婦１セットで１基ずつ代々並べていくというもの。聞くからにカネ掛り、それを戒名でやれと言うから更にしんどい。なんと、一時期、この本『世にも不思議なお墓の物語』が文部省推薦になっていた。その新聞広告を覚えている人もいるかもしれない。とにもかくにも、私は元気な子を授かりたい一念で、挑戦していた。正確な家系図に基づく理想の墓造りに。正確な家系図は戸籍に基づき作るのだが、この作業中に発見したのだ。戸籍のずさんさを。しかし、発見と同時に、系図作りも墓造りも止めようとはなぜかしなかった。惰性というか、乗り掛かった船、ともかく子を得て、その後また考えようと思った。

因みに夫は最初から墓には無頓着だった。私の気休めに付き合ってくれただけ。カネは自分が出すわけじゃなし、お好きにどうぞ、と。手放す時もあっさりどうぞ。そもそも自身が墓不要という考えで、自身の遺骨も斎場での処分を希望。私もそれがいいと思うようになった。意向は息子に伝えてあるが、我々が最後に住む自治体の、時の制度次第。それを考慮しての息子の判断にお任せしている。詳しく言えば遺骨引き取りを無料でする自治体もあれば、有料の所もある。またその制度も今後変更するかもしれない。それらに柔軟に対応しながら、なるべく遺族の負担にならないようにすればいい。

放置され、草ぼうぼうの墓を見て、我家に墓屋が忠告してきたことがある。「このままだと、よくないことが起きますよ」と心配してくれたが、起きなかった。起きたと言えば言えそうなこともあったが、その手には乗らなかった。人の不幸に付け込む業者と胡散臭い先祖がつるむというのはありそうなことだ。放置していた祖霊を墓や仏壇で祀り始めたら、子孫が幸せになるというのはよくある話。それはあるだろう。祖霊にも色々。祀る値打ちのある祖霊、祀っても祀らなくてもいい祖霊、祀ってはならない祖霊…と色々なのだが…これを知る人は少ない。更には、一口に先祖や祖霊という言葉でくくれないほど、彼ら各人は、てんでバラバラだということだ。

当然だろう。親子きょうだいでも性格色々。でき具合も色々。その中の一人にでも纏わり付かれたら、付かれた人の人生ギクシャク。憑かれたとまでは書きたくない。極意は自分を優先することだ。自分の人生を。とは言っても、私がまるで自分のことのように積極的に係わろうとした霊があったことは否めない。それは複数だった。私の先祖と言うよりは、先祖にヤラレた子どもたちである。闇から闇へ葬られた命。彼らが本気を出せば、先祖ごとひっくり返せるようなパワーを持つ筈だと私は思う。私自身、その化身かと自惚れることもある。

若いある日、私を見た霊媒が言った。「あんた、水子の霊が憑いとるよ」と。まるでいけない事でもあるかのようにそう言い、供養を勧める霊媒を私は低俗に感じた。彼らの怒りはそんなことで収まる筈ない、と思った私は、すでに霊媒の手の届かぬ所にいたのだろう。

さて、その後、ほどなく日本各地で「墓じまい」が盛んになって、お墓業界自体がよくない。墓建立

よりは処分の仕事が増え、それでしばらくはやれるだろうが。聞くところによると、業者に頼むカネない人たちが墓石不法投棄し、あちこちに、**墓の墓場**ができているという。

　ともあれ、私は墓との短い係わりで、副産物を得た。**戸籍**のずさんさの発見。今となっては副産物どころか、主たる収穫と言える。出生届が昔はいい加減で、日付や親子関係のことも信用ならないとは聞いていたが、その実例に幾つも遭遇した。また個人名の記載もずさんだった。役所も昔は手書きで、書き写す際、間違うのだ。書く方の悪筆のせいか、読み取る方のまぬけのせいか。コピーの、コピーの、そのまたコピーで判読困難だったのか。私は系図作成中に、先祖のある人物の名前が出生時と死亡時で変わっているのを見つけた。名前のうち 1 文字でも違ったら別人になってしまう。「之」が「三」になっているのだ。最初、私は別人だと思っていたが、資料を色々付き合わせると、どうもこの 2 人は同一人物らしい。役所へ問い合わせると、「子孫の方が法務局へ届けられたら、訂正できます」という。すらすら言えるということは、珍しいことでもなさそう。「そうですか」と電話を切ったが、届け出なかった。先々代の見知らぬ人のことなど、知ったことか。その子どもたちでさえ知らなかったのだろうか。親の名前が死後変化し、そのまま放置されていたことを。
　それにしてもこんな戸籍制度、何の役に立つのだろう？　元祖中国でも、形骸化、今や日本と台湾ぐらいにしか残っていない制度だと聞く。実の親子関係や個人名さえ嘘八百のこんなものが**公文書**だとは笑止千万。

　さて、お腹の子どもが男だと判った時には、嬉しさひとしお。女なら不服というわけではないが、私の場合、余計な心配の種になる。自分に似て、大きすぎるバストになったら可哀そうだし、将来整形するにしても、余計な出費、苦労である。その点、男なら、そんな心配無用。また、女の私としては、そもそも男の方が面白い。自分と同じ性ではなく、違う性が自分の中に出来上がるのは、愉快なことだ。男一匹丸ごと自分の腹の中で育つと思うと楽しかった。だが、産み落とした後のしんどさは女児の倍。一概には言えないだろうが、体験上、同じころ生まれた女児の親たちは、3 か月もすれば夜泣きからもさっさと解放され、乳離れも早く、羨ましい限りだった。わが子は 8 カ月間、夜間 3 時間ごとに泣いては、乳を欲しがり続けた。しかし自分でも不思議だが、それに付き合えたのだ。暗闇で、目も閉じてるくせに、一発で乳首をとらえて吸いつく赤子に呆れたり感心したり、…8 カ月後、夜泣き止み、ぐっすり一晩寝てくれた時には、「死んでるんじゃない？」と心配で覗き込む始末。
　白髪が目立つようになった自分を他人事のように感じていた。ヘアカラーを始めたのは小学生になった息子に指摘されてからだった。「お母さん、お帽子かぶってきてよ。白髪だとボク、恥ずかしいから」

　育児中は、周囲からいろんな雑音が入った。妊娠中からそうで、医者の言う腹帯云々。夏場そんなものしていられるか、と思い、腹帯採用しない産科に乗り換えた。産後は、弟からの「一人っ子は片輪（障害者）やで」。これにはムカついた。彼ら夫婦が 20 代でコロコロ産んだとのとは訳が違う。こっちは 39 歳の高齢初産。人一倍の体調管理と呼吸法の練習に励んだせいで、医師や看護師から、**「はなまる安産」**の

お褒めをもらい、ほっとしているのだ。会陰無傷を目指した自分としては、ちょっと切開されてしまったのが不満だったが、医学的には上出来だとか。下手に頑張り、裂傷複雑化するより、回復は遥かに早い。とはいっても、しばらくは排尿時に傷がしみる。因みに、同じ頃の入院で全く無傷で分娩成功、その後トイレでするおしっこも平気だったという女性がいた。彼女は言った。「一回目もそうだったの。（おしっこの時）全然しみない。平気よ」と、にこにこと。私は思った。「若くて、体が柔らかいから？　赤ちゃん小さかったのかな？　」羨ましく思ったが、贅沢言うまい。わが子の形良い奥行きある頭部を見て、このせいだろう」と納得することにした。傷はすぐ癒えるし、この歳では十分だ、と思い直した。

　クソ弟め、そんな私の老体にムチ打つようなことを言わないでくれ。もう一人などと考えるだけでも目まいがした。夫によれば、「彼は自分の子が２人目も女の子やったから、羨ましいんやろ。なんなと言わしとけ」と、ニンマリ余裕の構え。なるほど、そうかもしれないと、私は気を取り直した。また、こういう人もいた。息子を抱いている私に言う。「まあ、高齢出産なのに、こんな正常な子が出来てよかったわね。**老化した卵子**では、奇形や流産も多いのに…」（その通りだろうが、人が大勢集まる集会の場で、朗々とおっしゃるのは如何なものか）。他にも、姑からの「抱きグセつけるな」その他「乳離れは１歳までに」「母子手帳は大切に。特に、予防接種はきちんと受けよ」

　その頃、私はまだ勉強不足で、最後の雑音にだけは惑わされたが、あとは、聞き流した。WHO（世界保健機構）や IAEA（国際原子力機関）の胡散臭さに気付いたのは、それよりずっと後のことだ。

　乳離れも標準をはるかに逸脱した息子だったが、私は焦らなかった。とにもかくにも本人の納得いかない中断は、将来に禍根残す気がして、出来なかった。息子が赤ちゃん時代を無事終えて、幼児になり、よくおしゃべりし始めた頃、私は一番の気がかり「低いお鼻」のことを息子に直接訊いてみた。生まれたての頃、夫が露骨に笑った低さ。横から眺め、大声で「鼻低いなあ！」

　笑っていたから悪気はないのだろうが、産んだ者は気が引ける。誰が見ても母親似というから余計にそうだ。加えて恐ろしい出来事に遭遇したことがあり、手遅れにならぬうちに手を打っておく必要があった。

　それはまだ我々に子どもの気配もない頃、夫の兄一家が新婚の我が家へ遊びに来た時のこと。中学生の彼らの息子（我々には甥）が、自分の母親の横顔を見ながら言った。「お母さん、鼻低いなあ、そやから、僕も低いんや」

　私には、さして低いとも見えなかったが、その息子の基準ではそうだったのだろう。「思うことをすぐ口に出す、中学生と言っても、まだ子供だわ」などと思っていると、その母親、息子に向き直り、凄い剣幕で言った。「あんたにそんなこと言われる筋合いないわ！　お父さんがこれでええ言うてんねん！」

　私は仰天した。母親の返答に。世の中に、こんな返答あるのか？

　傍で聞いている父親が無言なのも奇妙だった。

　思春期の息子が、自分の容貌を気にし始めるのは自然なことで、それを口に出したら、ともかく受け止めてやるのが親ではないか？　私はその母親が、まず息子に「なぜ急に鼻のことを言い出すのか、誰かに

言われたのか」などからきき出すと思っていた。いきなり怒り出すとは思わなかった。生んだのだから**言われる筋合いはある**。また、「お父さん」が急に出てくるのは何ゆえ？「これでええ言うてんねん」とは？
　私は何の口出しもしなかったが、この息子の行く末を案じた。

　この事件ゆえに、「自分も人の親になったら、子どもから、いつ何時（なんどき）その問題を指摘されるかもしれない。慌てずしっかり受け答えするには事前準備が必要。思春期前に手を打たねば」と思ったのだ。横になっている息子の顔をのぞいて私は言った。
　「お鼻低いよね」と、息子にズバリ。「ふーん？」という反応の幼児。気にする様子はない。続けてこう訊いてみた。
　「この低いお鼻のせいで、何か嫌な思いしたことある？」と。
　すると息子は床の上を丸太のように転がって見せながら言った。
　「ぜーんぜん！　だって、このおはなでいろんなにおいをにおえる（匂える？）もん！」と。にこにこして。
　ほう！と私は驚いた。機能すればいいと、この子は解っている。形や高さは二の次だと。
　これでよし。万一思春期になって、鼻に不満を持つようになっても、今日のことを思い出すだろうから、あの甥っ子のようにはならないだろう。

　今、その子は思春期もとっくに過ぎ、社会人になっているが、普通の鼻になっている。特に低くも高くもない。あの甥っ子だってそうだった。彼は欧米人の顔が基準だと思い込んでいたのかも。そういえば、昔、高校の美術教師が石膏のアリアス胸像にうっとりしながら、「これが完璧な美」とか言ったのを思い出す。「惚れ惚れしますねー」などと、同意を求めるようなことまで言われ、閉口した。私から見れば異様にデカイ鼻っ柱、どこが美？なのだが、感じ方、人それぞれなのだろう。
　息子十代の終わりころだったか、私が、ふと、息子に幼児期のやり取りを覚えているかと訊いたら、覚えているとのことだった。でも、思春期になったらまたちょっと気も変わるで、と笑っていた。

　穏やかな性格に育った。性格に関する限り、私に似ない穏やかさだ。夫に似たのか？
　夫自身にもよくわからないようだった。そもそも「自分の子分」的な意識がなく、「お出まし頂いたお子様」のような接し方をしていた。「うっかり足を踏み外して、ここへ落ちてきてくれた子」とも言った。
　子供だまし的な接し方はせず、威圧的なこともしなかった。子どもは心許して言いたいことを言えていた。私と夫が議論している中にも、当たり前のように入ってきて、自分なりの意見を言った。4歳か5歳ぐらいだったか、ある時、我々の話に割り込んできて、こう言った。
　「おかあさん、こんな**おとな**とけっこんしないほうがよかったんじゃない？　なにもかんがえずに、ササッとするから、いかんのよ」
　夫は笑いながら小声で口答（くちごた）えしていた。「ササッとしたから、できたんじゃ」
　その流れで、では母はどんな大人と結婚したらよかったか、のような話になって、私が
　「別の人と結婚していたら、生れるのは、もっと違う子だったのかな」と言った途端、息子は断言した。

「だれとけっこんしても、この**かお**なの**！**」

夫も私も笑いこけた。息子は自分を 100%母親の分身だと信じているようだった。多分、誰でも幼児期には思いがちなことだ。父親は後付けで取り換えがきくような感覚。または自分が先にいて、産む人が誰でも**この顔**だという勢い。息子の発言は、自分の顔を気に入っているからこそ言える発言だろうと私は嬉しく思った。自分が世界の中心、まさに子どもらしい、自分本位な世界に彼はいるのだ、と。最近では、ひょっとして幼児の感覚の方が本当なのかもしれないと思う。子が親を選ぶ。子に狙われたら逃げられない、産む羽目になるのか、とも。または、子に選んでもらわなければ親になれない、どちらにしろ、子どもに対して「親が産んでやったからおまえがいる」の感覚は間違っているということだ。

息子は性格穏やかではあっても、人の言いなりにでもなるのでもない、何かにつけ自分なりに取捨選択した。幼いころからそうだった。墓相信仰から脱却した後も、あれこれ巷の宗教に絡め捕られそうになる私を救い出しもした。「楽園が来て、人間が歳とらず、死ななくなるなんて変よ。動物や木や花は相変わらず死んだり枯れたりするというのに、人間だけ瀬戸物みたいにカチーンとしてるなんて」とか、「お母さん、また違う人の供養？…死んだ人に利用されてるみたいだよ」とか。

ある宗教の神示についても、私の疑問に即答した。「神に感謝しても、父母に感謝し得ない者は、神の心にかなわぬ」これを私が訝しがっていると、息子は言った。

「そんな神なら、その心にかなわなくていい」と。

6 歳頃から 12 歳頃の子どもは凄いと思う。幼いのに凄い、のではなく、幼いから、凄いのだ。大人になるにつれて鈍る感性がまだ健在で、気付いたことを片っ端から口に出す。疑問や質問、意見に不満、機関銃のようにまくしたてる 6 歳児を身近に体験できたことは大きな収穫だった。私は、子どもとのやり取りにあくせくしながら、自分の子ども時代の空虚が埋まっていくような気がした。無視されたり、黙っていろと言われた頃の空しさが。うちの子に限らず、その歳頃の子どもは大人よりはるかに聡明だ。それに大人が気付くかどうかだ。私と同じ宗教に絡め捕られていた知人の息子はこう言ったという。

「お母さん、エホバがサタンとちゃうんか」

息子がまだ小学校にもあがらないころ、夫の親の家へよく遊びに行ったが、両親とも喫煙習慣から抜け出せていなかった。我家が禁煙族と知っているので、両親も遠慮気味にはしていたが、我慢できない日もあるようで、部屋に煙が充満し、息子がむせて咳をした。すると夫の母親が言った。

「あら？　この子、カゼ引きよるで。風邪薬飲ましときや」

息子はその後、彼らに会いたがらなくなった。じいちゃん、ばあちゃん、とさえ言わなくなった。

子どもとしっかり関わったのは私の実母だった。自分がよい歯を維持できなかったから、孫子にはそうならないようにあれこれ教えた。唾液の重要さをよく知っており、食後歯磨き出来ない時もお口くちゃくちゃでかなり効果あると教えた。自分の経験によるのだろう。反実仮想の発想は極力避けたい私だが、思わずにはいられない、彼女は、夫と歯医者だけにでも恵まれていたら、どんなに健康でいられただろ

う！と。
　子どもにとってのたったひとりの祖母は、その孫のおかげで、自身が生き延びたことを有意義なことにできた。不幸な結婚から逃げられず、不幸な子しか産めなかったと悔やんだ自分の人生を、一転、誇りにさえできたのだ。娘の私からは散々こき下ろされた。「あんな死にそこないに汚され続けるよりは、子を孕む前に、さっさと実家の悪徳オヤジか強姦亭主を殺して囚人生活した方が、余程よかった」とまで言われた。それに返す言葉もなく、凹みきっていた老女。
　その老女は自分の老後を一転、嬉しい老後に出来た。おしゃべり、いたずら、手をつなぐのが大好きな小さな孫のおかげで。「私が娘を産んでいなかったら、こんな孫にも出会えなかったわ」
　口には出さないが、彼女はそうとしか思えない嬉しそうな顔で孫とやり取りしていた。

「あの子は私を**家族**と言ってくれたよ」と彼女は喜んだ。話しかける時も、私を覗き込んで話してくれる。何と嬉しい、ありがたいことやなあ、と。
　私は彼女を**ばあちゃん、**とか**ばぁさま**と呼んだ。夫を**お父さん**と呼ばず、息子を**ボクちゃん**などと呼ばない私としては異例だ。自分から見ての実母を、息子から見た呼称で生涯呼び続けた。固有名詞のように。我々の元祖は唯一この人と私が思っていたせいもあろうか、息子はその他の先祖に付いて知りたがることはなかった。生れた時から、あやしてもらったり、何かと、かまってもらったせいもあり、子どもはその祖母を慕っていた。「おばあちゃんとボクだけの秘密」のようなものまであったらしく、私には想像もつかない世界だ。息子は社会人となってからは転勤族で、年二回ほどの休暇でしか会えなくなったが、いつも休暇を楽しみにしていた、お互いに。

　不本意ながら、その祖母は、亡くなるまでのひと月足らず、意識もないまま点滴で生き延ばされてしまったが、休暇で帰ってきた息子はその寝顔に会えただけでもうれしいと言った。わが祖母のやせた腕をさすりながら。
　私には考えられないことだった。そもそも触りたくなるような祖父母などいなかった。親さえいなかった。息子は、小学生になっても、よく私や夫と手をつなぎたがったり、抱きついてきたりした。極秘の**乳触り**は小学校入学後まで続いた。私に冷やかされると思うのか「落ち着くの」と、解説しながらである。
とはいえ、息子自身もさすがに気が引けるのか「お母さん、おちち」とは言わず「お母さん、ブツを」と言っていた。ばあちゃんには白状していたようである。「おばあちゃんだけに教えるけど、ボクな、まだ、おちち触ってんねん」と。おばあちゃんは知っていたと思う、昔はそういう子は珍しくなかった。朝、登校しようと、誘いに来た友達に「待ってな、この乳吸い、すぐ終わるで」などと言う子が結構いたことを。

　人は、**子ども時代**、と一口に言うが、私の**それ**と息子の**それ**とは、思い切り違うものだ。

　　じじばばの支持ない命は**根なし草**、浮いて漂う**根なし草**。

　　じじばばは、跡取り息子の、そのまた息子、その中の跡取り孫だけ後生大事。

そいつだけ我が庭の一等地に植え、水の、肥料のと世話やいた。

それ以外は、皆雑草、雑魚(ざこ)だから、捨てるも食うも気分次第。

赤子の手は、ねじる為。娘は売る為、稼がせる為、飼いならしておく家畜。
全く、もの言う家畜は扱いにくい。黙って稼げばいいものを。
じじばばよ、おまえさんらはそう思っていたわけだ。

じじばばよ、私はその顔を確かに見たが、そっちからは何の言葉もなかったな。
ない筈だ、（と、私は、よほど後で判る。）おまえさんらは、売り飛ばした娘が
その先で、生き延びるとは、思わなかった。根っこちょん切られた雑草が枯れそこない、
そのうえ、子を産むなどとは思ってもいなかった。
その子らにジロジロ見られる日が来るとはな。

根っこちょん切り、安心したあんたらはまぬけだよ。
そんなもん、いくらでも生えてくる。それで、どこにでも根を下ろし、
増殖するんだ。あんたらに言うべきことを言うために。

我々は知っている。あんたらが孫の嬰児や胎児を殺(あや)め、

子は食い物、売り物と、したい放題したことを。
跡取りだけを後生大事にするのなら、それ以外は生まなければよかったんだ。
節操もなく、だらだらと幾人もの子を垂れ流し、排泄物同様の扱いしかしないなら。

多くを語りたくないが、我慢ならん話が幾つもある。
おまえらが大事にした孫、ただ一人の跡取りは、
子どもの頃から威張りちらし、私にも暴言吐いた。一度ならず。忘れたいよ、あんな屈辱。
言葉にもしたくない。私はまだ幼く、言い返す勇気もチエもなかった。泣く気力も。
親に言い付ける気力など、もっとなかった。

あんなヤツが成長して医者になったってね。外科医だって。
出来すぎた話。何とかに刃物と言うだろう？
あんなヤツ、あんたらもろとも忘れたい。そう思うが、ふと、こうも思う。
あんたらの写真、捨てずにおいとけばよかった。
こういう顔は、こういうことができるんだって、いい資料になるのに、
うっかり破り捨ててしまったよ。

あんたらの娘は、残念ながら、あんたらよりも長生きし、
90 歳にもなる頃、遅ればせに、気付いたよ。

あんたらは君臨するだけで、親としての何の機能も果たさなかった、
それぱかりか、自分があんたらの食い物にされ続けたんだと気付いてね、
あほらしく、憎らしくてね、あんたら夫婦並んだ写真、びりびり破いて棄てたんだ。
思い出だけでもいいことあれば、たった一つでもあれば、そんなことにはならなかったろうに。

ねえ、じい、あんたが生きているうちに、ききたかったことがある。
うちの母さんが、もっと早く私に教えてくれていたら、
あんたが生きているうちに、訊けたんだ。
何も知らんで、町へ飛ばされた母さん、ノータリン（脳足りん）にいきなりチンポ突っ込まれ、
大けがして、ゲロ吐いたんよ。
あんたが選んだあんたの同類、チンポ突っ込む以外、何の能もない男。

脳ミソなしの、大食（おおぐ）らい。胃袋とチンポだけのヤツだった。

うちらの小遣いくすねては、パチンコ、競輪、競馬と忙しいヤツだった。

うちらの日頃の切なる念が届いたのか、
母さんよりも、いいかげん先にくたばったのがせめてものこと
ああ、もう、全部忘れよう、あの嬉しい日以外のことは。
我々の望む順序で片付いた。母さんよりも先に死んだ、ばんざーいってな。

でも、一つ残る疑問がこれよ。

うちの母さん、そんな目にあわされるような、どんな悪いことしたん？

　私自身の幼児期の、ほっこりする思い出は、一つはある。冬のある日、親の膝にちょこんと乗せられ、こたつに当たっていたときのこと、ふと後ろへ凭（もた）れると、あたたかく大きな支えを得て、なんと心地よいのかと思ったことだ。覚えている心地よさはそれぐらい。後日、母に訊けば、それはある正月の時、いつもより少しは寛（くつろ）いでいられた時のことだろうと言った。その時、母の心には、夭折（ようせつ）した色白パッチリ目の長女や戦死した彼氏のことが去来していたかもしれず、または、亭主のギャンブル狂いに気をもんでいたかもしれない。そう、私は次女だった。お宝長女が夭折した後、代替物のように出てきた次女。

　そんなこと、幼児にはどうでもいいことなのだ。後ろへ凭（もた）れて、大きな温かい支えを感じられたら、幼児はこの上なく心地よく幸せなのだ。

　多分、幼児なら、誰でもそんなことは、しばしば体験することなので、いちいち覚えてもいないだろう。このように記憶に焼きつくこともないと思う。私にはめったにないことだったので、しっかり記憶に焼

きついたのか。

私は、子どもの頃、飢えに悩んだ記憶はない。弟もそうだと思う。麦飯とわかめの味噌汁十八番の女親はむろん、男親でさえ、時々は菓子などを我々に買い与え、子どもと繋がろうとしていた。もっと幼い頃の思い出は皆無。母乳も十分飲めたようだ。私自身は覚えていないが、1 歳ぐらいの私が、ある日「もう、いらんわ」と言って断乳したという。弟は長引いた。何歳と正確には覚えていないが、母親が乳房に恐い顔を描いて遠ざけようとしていたから、かなり標準オーバーだったのだろう。彼はそれを自分の両手で隠し、「これでこわない（恐くない）」と、吸いついていた。彼の、「母体」への愛着は凄いもので、私の何倍も母体を慕い、愛し、まとわりついていた。私には不快に感じる汗臭さも、彼には不快でなかったらしく「いい匂いがする」と言って、母体の脇の下へ潜って行った。これには私は仰天した。私がまだ小学生になるかならずの頃だった。声も出ないほど驚いた。

その後、長じていくうちに、自分にも体臭問題が無縁でなくなり、それは人種や食べ物に大きく関係する事を学んだが、嗅覚ほど捉えどころのない感覚器官はない。同じ匂いにも好悪の個人差、個人でも体調次第で変化し、またこの感覚は疲労しやすい。介護を始めた初っ端は、気になっていた尿臭が、そのうち気にならなくなり、夫から「あんた、鼻マヒしとるで」と言われるようになる。日本人客にはとても我慢ならない外国人のわきがを、「そんなに悪い匂いでもないはず」と軽くあしらう客室乗務員。「日本人は、時々そんなことを言う。そもそも無臭の人などいませんよ」と。

日本人の感覚では、沢庵鼻に突っ込まれたようでも、あちらの感覚ではそうでもないのだ。逆にセクシーだと喜ぶ向きもあるという。全く。蓼食う虫も好き好きだ。ドリアやフナずしの世界である。横の座席で、臭う若い母親が、赤ちゃんを抱いていたりすると、日本人は、つい、あの赤ちゃんは鼻曲がる苦しみだろう、などと心配するが、心配無用。赤ちゃんは既に適応しているのだ。母親なしには生きていけない存在は、それなりに適応する。不快を感じっぱなしでは生きられないからだ。

ところでミョウバン。これは重宝。このデオドラント効果は、いつ、だれが発見したのだろう？　古代ローマではすでに愛用されていたという。私の女親は、自分の体臭が気になる年頃に、誰からも有効な情報を得られず、学友たちの噂で物知りの教師を頼って訊いてみたら、教えてくれたと言っていた。生涯で一番勇気のいることだったと言い、その時、快く教えてくれた男性教師のことを、彼女は実の親より誰より敬愛した。彼の処方は梅酢にその粉末を溶いて用いるというものだったという。

さて我々の子ども時代に話を戻そう。子どもに食いはぐれはさせなかった親なので、我々子どもが、親への不満をもつと、世の中はこぞって我々子どもを非難した。「世の中には子どもを飢えさせたり、捨てる親もいるというのに、あんたたち贅沢だよ」と。

これは彼らの詭弁だったと今では判る。飢えさせたり捨てたりは犯罪ではないか。より劣悪なものと

比べさせて、何となく、自分たちの方がマシと思わせるやり方は、大昔からある。

　あのころに戻って、そう言った人々に言いたい。「食わしてもらっているだけでは家畜か、それ以下だよ」と。甘えられなくては、子どもをやってる値打ちがないんだ。抱っこやおんぶや、なでなでの記憶が極端に少ない。世に言ういわゆるペットでさえ、私よりは可愛がられていただろう。病弱な弟は、私とはまた違う思い出があるのだろうが、丈夫な私はそれらを求めるたびに、拒否されたり待たされた。とどめは、殺し文句「お姉ちゃんでしょ」で、やられた。これもあの頃に戻って言いたい。「だから、どうなの？」誰かの姉であることと、甘えないことには何の関係あるの？

　甘えることを罪悪のように教えられて大人になったある日、ある人から「あなた、子どもの頃、もっと甘えたかったんじゃないの？」と指摘されて涙が止まらなくなったことがある。その指摘は手紙だったから、泣き顔を見られずに済んだ。泣くことも私は下手だった。そもそも泣いても放置されたり　、さらに叱責されたりでは、泣かなくなってしまう。そんなこと、泣くほどのこととではなくなってしまうのだ。身体には悪いだろう。

　子どもの私には「甘える」どころの騒ぎではないほど大問題も数々あった。どれもこれも「あとで！」の言葉で棚上げされ、期限切れで、廃棄された。

　これは私を産んだ女の人生、そのままの写しでもあると、今、私は思う。彼女は、結婚に不可欠な愛情や信頼、知識欠落のまま、親の仕組んだ「結婚もどき」にハメられた。今、改めて見えてくる、彼女の両親の焦り、闇取引が。彼らはこの取引を親戚などにも知らせなかった。結婚写真は新郎新婦だけのものだった。田舎の婚礼に付き物の集合写真もない。あの時代、普通、新郎新婦を中心に親戚一同の記念写真があるものだが、それがない。闇から闇へ葬られるように嫁がされ、捨てられた。絶望したが、自殺できずに何人も子を産んだ。そんな女が、自分が生んだという責任感と精々気晴らしとで子どもを世話していたから、子どもにはあんなに冷淡にしか感じられなかったのだ。彼女にとって子どもは自分の分身、さらには武器だった。自分を損なった男に復讐する為、味方につけるべき大事な武器。丸腰で放り出された田舎娘が、我が身を削って得た唯一の武器が子ども。そのうち、使いものになったのは、息子ではなく、娘の方だった。夭折した方ではなく、生き延びた方の。

　彼女が娘にできた性教育は「ズロースはいつも穿いておけ」だけだった。「穿き忘れると、蛇が入る」と。その後、娘が少し成長してからは、銭湯で、その股間のびらびらを見ては「黒ずんどるね」とか言っただけ。だから、どうしろとも言えない女。普通の石鹸で入念に洗うのがよくないことも知らなかった。といって、ごしごしされたわけでもないが。娘はなぜ黒ずんだのか、赤子の頃はこんなじゃなかった、先に死んだ幼女と同じ様にピンク色だったのに、と思っていたのか。そう言う本人のは、大人なので、毛に隠れて何も見えないない。本人も自分のことは知らなかったと思う。あの時代の女性は。また息子への性教育は更にお手上げだったろうが、男児の股間は可愛くてたまらなかったらしく、時々キスしていた。赤ん坊のオチンコに。小さいので、すっぽり口中に入ってしまう。後日私が指摘しても忘れていた。いやいやするフェラなら、こうはならない。思わず知らず、やってしまうなんてことには。

　彼女が、結婚する娘に言えた心得は「亭主の浮気は見逃せ」だった。二度が二度共そうだった。

穀潰しの甲斐性無し亭主をしょいこまされ、養い続けた彼女は、知りあいや友人が自分の亭主の浮気を愚痴るのを、贅沢な寝言としか思えなかった。愚痴る友に、「だからどうやの？　あんたにカネ入れなくなるの？」と訊くと、異口同音に、「それはないけど」と言ったという。「家にちゃんとカネ入れるなら、よその女と遊ぶくらい、なんやの？　大げさに悔しがったり騒いだりする気が知れない」と、彼女はよく言った。「浮気できるほどの甲斐性や魅力のある男と暮らしてみたい、一度でいいから」とも。
　そういう亭主と暮らす友人たちを彼女は少し羨み、大いに軽蔑していた。
こう言った。「やきもち焼く女は愚の骨頂だ」と。「私という妻がありながら、どこかの女といちゃついてるかと思うと、悔しくて耐えられない」などという女の気が知れんと。
「どすけべえされて喜ぶ女がいてくれるなら、もっけの幸い、自分がされずにすんで、何よりだろうに」と。「ドーンと、のしかかられて、重たいだけのあんなこと！」

　非情な親や、障害者に、体も心も壊された彼女は、その壊されたままの心でしか喋れなかった。彼女本来にもあっただろう温かい心は冷え、硬化し、体の冷えにまで及んでいた。男から解放された後も冷え性を引きずり、猥談ご法度、冷え冷え細々暮していた。結婚する娘に、
「妻たるもの、夫に浮気させない体になっておくべし」
などとは、逆立ちしても言えないのだ。思いつきもしない。そもそも、**反応する女、感じる女**を彼女は軽蔑していたのだから。そういう輩は動物的で下品ということになっていた。近所の茶飲み友達で長年親しくしていた友人がいて、ある日、先立たった夫の話をしたそうだ。夫との夜を思い出して「よかった！」と、ため息するのを、彼女は、ぞっとする、下劣だと言い切った。

　彼女はいつも困っていた。欠陥車を与えられて、運転しろと言われたように。子ども時代の親の大八車後押しの方がよほど楽チンだったろう。晩年、彼女は言った。「ドガイショナシは、やりたかったら、人間より家畜とでもしたらよかったんや。そしたら人間の女や子どもを不幸にせずに済んだ」と。

　そんな条件、環境で、彼女はよくやった。やりすぎほどやった。私にも、凭れさせてくれたという思い出を一つでも残してくれたらそれで上出来。
　いい思い出が一つでもあれば、無いよりは、よほどいい。「あった」と見栄を張らなくて済む。

　見栄張りは**もう、やんぴ**（やんぴ：やめること。やめる宣言。主に子供が遊びをやめる際に使う）。

　幼い日、ほんのひと時与えてくれた心地よさが、その後、何年分もの世話を可能にさせる。子どもによる親の介護は、欧米ではともかく日本では、ありふれた現状である。私にも回ってきた。やり始めには、いつとも終りの見えない、賽の河原の石積みにも思えたが、ついに終わった。もう２年近くも前になる。

オムツ交換や入れ歯洗いの話はやめておく。終わって肩の荷下りた解放感に浸っていたいから。
介護の期間を確かめると、同居しての介護は５年と１カ月。　え？　たったそれだけ？　　書類を見直すほどだが、確かにそうだ。実感としてはもっと長い。倍以上に感じる。同居以前、彼女がまだ独り暮らしだった頃の世話や何やも含めてカウントしてしまうのだろう。それなら確かに10年以上だ。介護生活終わっても、しばらくは、まだその余韻が残り、体は楽だが頭が空っぽ状態が続く。現実には空っぽと気取ってもいられない、親せきとの付き合いや、手続き的なことがいっぱいあった。
それも片付き、住居も、より簡素な所へ移り住み、本当に自分の日常を取り戻したのは、死後２年目。

最近では夫との親密な関係も復活して来て、ちょっと驚き。以前は全く潤いをなくしていた自分が最近変調。感覚まで戻ってきた。声も、つい上げてしまう。これには夫もむろん、私自身がびっくり。もう卒業した、と思っていたからだ。それを思い直すきっかけは、ある時ふと見た記事。「定期的なセックスが体にもたらすメリット」として、いくつか効能が上がっていた、その中に、カゼ予防、鼻炎改善、骨密度低下の防止、体型への自信、男性の前立腺がんのリスク低下等、があった。グルテンフリー等の食生活改善で花粉症をかなり改善できていた私だったが、これは更なる朗報だった。骨密度維持にも役立つとなれば、逃す手はない。早速おけいこを再開した。
実は手持ちの古い書物の中に、こういうことを詳しく説いているものがあった。それも複数。ごく最近の荷物整理で判った。関心がないとは恐ろしいこと。引っ越しの時、捨てようかとさえ思ったものだ。かつて斜め読みした覚えはある。しかし当時は見落としたのか、見ても見えていなかったのか、全く知らなかったのだ。「閉経と共に意欲も消える」という俗説がまかり通り、私もそれに傾いていた。
老母と同居を始める前に、私はすでに枯渇状態だった。老母と同居の頃はむろん、彼女が施設に入っていたときも、そういう気分にはなれなかった。夫を干すのはいけないと、便利グッズのお世話にもなりながら、求めに適宜応じてはいたが、義理か厄介。「用事」でしかなかったのだ。億劫がる私に夫は言っていた。「スムーズにいかんのは煙突掃除を怠るからや。しょっちゅうやっておかんと」
その頃、同世代の友人たちにも訊いてみると、私と同様、中にはもっと早く卒業している人もいた。そもそも興味がない、なくなる、煩わしい。要求されたら、しかたなく応じるけど…という具合だ。それが自然な成り行き、露骨にいえば老化かな？と。私も思っていた。閉経と共に去りぬ、と。
しかし自身の体験がそれを否定する。夫は「それだけ、介護は大変やったということや」と、私をいたわるようなセリフを吐くが、もっと切実な本音は「ボクちゃん、とっても得した気分。だって、若い頃のように、ゴムつけなくていいだもん！」だ。そのホクホク顔が白状している。「ボクも手伝ったでしょ、あちこちへの送迎や車イス乗り降り介助や、おんぶとか。そのご褒美よ」と思っているのだろう。
60代半ばまで続けたパート勤めと介護生活が相次いで終わり、無理な早起きもせずに済み、自分の自由な時間も取れるようになったこと、散歩やサプリの効果等々、それらが相まってこうなったのだろう。以前とは違い、日常のありきたりの家事が楽しい。買い物、炊事、洗濯等々の雑用が楽しいのだ。

閉経組の女として、もう一つの発見は、これには尿漏れ改善の効果まであることだ。発見なんて、今頃何ズレたこと言ってんの、と、医療関係者たちからは笑われてしまいそうだが、人間、切実に自身で体験しなければ、単に「知識」や「情報」で終わってしまう。「骨盤底筋の衰えは尿トラブル、性生活トラブル等を引き起こす」なんて聞いていても、雑用にからめ捕られている時は、右から左、聞いても、聴かな

い。聴こうとする心のゆとりもない。
　ゆとりないながらも、今思えば、私の体は知っていた。脳ミソよりも体がしっかり。尿漏れ改善体操で、締めたり緩めたりやってるとき私は思った。「これ、何かとよく似ているな」と。実際そう思う人も少なくなく、笑いあって言ったことがある。「体操面倒になったら、あっちの方、したらいいやん」と。

　40 代で性生活と無縁になった私の母は、晩年死ぬまでオムツを必要とした。亭主が死に、晴れて独り身になれたのが 60 歳そこそこだったから、まだ遊べた筈だ。しかし彼氏の一人も作らなかった。言い寄る男を振った話は何度かした。初体験の痛手は深く、性的なこと根こそぎ全滅だった。私は骨盤底筋強化体操を勧めたこともあるが、若いころからのダメージが大きすぎたのだろう。大した改善はなかった。骨密度もどんどん低下し骨粗鬆症にもなった。普通なら健康に役立つ筈の性生活が、強制されたものだったがゆえに、苦役でしかなかった彼女の人生。望まぬ性交や難産、中絶などですっかり体を損なったのだろう。若いころから冷え性、のぼせ等で悩んでいた。亭主が死に、自由な身なってからの方が、はるかに元気になったほどだ。悲しい女の話はやめよう。あの世で想う彼氏とよろしくやっているだろうから。

　少数派ながら、生涯オムツと無縁でいられる人々も確かにいるのだ。その人々がそろって生涯現役エッチ組と言うわけでもなかろうが、下半身筋トレに相当することはやっていると思う。骨盤底筋始め、その周辺の筋トレにはあれが一番。何より手軽。

　介護に携わっていた頃は介護者の集まりがよくあり、参加したが、その OB の集まりはないのかな。介護者たちは私も含め、介護卒業後は、今度は自分たちが介護されるのを**待つだけ感覚**でいたようだ。しかし、今、その考えちょっと待てと言いたくなった。しかし…、よそう。これは万人向きではない。
解ってくれそうな人はそうそういないだろう。…ふと思いうかぶ人と言えば、亡母の最初のケアマネ。たまたま私と同い年の彼女は言った。
「介護保険はとっくに破たんしていますから、我々が（要介護になって）それを利用しようとしても、損するだけです。保険料を納めることも損ですが、保険サービスを受けることは、もっと大損になります。大穴埋める為にサービス料金、今後上がるだけですから」
　十数年前に彼女は達観していた。すでに何年も介護現場を見、制度の形骸化を知っていたので、同世代の女性としての好意のようなもので、教えてくれたと思う。私は彼女に訊いた。
「じゃ、我々はどうしたらいいの？」
彼女は穏やかな笑顔を浮かべて答えた。
「元気でいることです」
　惜しいことに、プライベートな付き合いは認められない関係だったから、個人的な連絡先は知らないままだ。町でふと出会うようなことはないのだろうか。会えたら丁重にご挨拶して、思い切り喋りまくりたい。あなただからこそ話せることだと、根掘り葉掘り。

　日本女性の性的な無知や無関心は大したもので、すっかり気心知れてしまうまでは、うっかりその方面の話はできない。善意でうっかり喋っても、年甲斐もなく、色ボケだとか言われそう。生涯独身の人も、寡（やもめ）生活余儀なくされている人もいるだろうから。

私も少しは日本人のことがわかってきたようだ。この歳でやっと、日本人の国民性が。

それより、息子に詫びなければならない。

思春期になった頃の息子が、私に言ったことがある。「お父さんとこへ行ったりや」と。住居の事情で、夫と私の寝室が別だった頃だ。息子は、私に何度か言った。「お母さん、お父さんの所へ行ってやりよ」と。私は、ああ、この子も、自身の「男性」を体験するようになったのかと、ほくそ笑みながら、はいはい、と聞き流していた。息子のお節介は、きめ細かく、「鼻くそ見えたり、口臭かったら相手にされへんで」などとも教えてくれる。ありがたいなと思いながら、現実には息子の進学準備や、夫の早期リストラで、それどころではなかった。ある時、こんな返答を息子にしてしまったのだ。

「もうええんよ、行かんでも。あんたが出来たんやから、もうせんでもええの」

今にして思えば酷い暴言…どうしよう？

女が吾子を得た後は男に用はないと言わんばかり。子が出来ることは恐ろしいことだと息子が思ってしまっていたらどうしよう？　息子は覚えてるわな、そりゃ。いちばん頭冴えてる頃の発言だから。最近彼女が出来たという息子に、どういうタイミングで、どう発言修正しようか……今の我々夫妻の実情を、まずは知ってもらい、笑ってもらおう。「以前、君が勧めてくれたように、やってるよ、今は」とか言って。

昨今、日本では若い人のセックスレスカップルが増加の一途だという。全世代を通しての日本人のセックス下手、セックス離れは世界でも有数だが、若い世代が特にそうだという。ジャンクフードや環境ホルモンでやられているらしい。滅ぶしかない日本という気もするが、まあ、愛国心もない私は悲しむ気にもなれない。むしろ、滅ぶ日本を脱出して生き延びろ、有能な若者よ、と思ってしまう。

若い女性は、いわゆる草食系男子が当てにならないせいか、自身で膣トレに励む人が増えたと聞く。膣トレ関連の本も沢山出ている。『カラダがときめく ちつトレ！』という本は簡潔でわかりやすい。関口由紀医師の著書で、実に具体的、実践的、頼もしい内容である。これ１冊で大抵の不感症は治ってしまうだろう。医者へ駆け込む前にまずは一読をお勧めする。コスメ、ファッション、ネイルなどの外見だけでは食い足りず、こういう内実に感心を持つ女性が増えることは喜ばしい。この分野だけは見栄の張りようがなく、仮に張ってもすぐバレる。こういうことをわきまえる女性がいてくれるなら、日本もまだ見込みがあるかも。外国では母親が娘に、女性のたしなみとしてしっかり教えるという。男を外見で釣るだけでなく、内実の満足も与え得るよう、また自身も得られるようにしっかり教育する。何よりも、実際に健全な性生活ができている母親が育てたら、大抵は自然にそういう娘に育つのだ。必要な場合は専門医療機関にかかることも常識だとわきまえている。医師以上に患者が賢くなっても何らかまわない。正常位での性交痛は屈曲位で解消することも多い。自分の彼女が上付きか下付きかさえ知らない男がいる。女性自身も知ろうともしない人が多いという現実は、さすがセックスレスの国だと感心する。

冷感症についての無知、無関心は、日本の、世界に名だたる国民病だという。病気だとも気づかず、従って治そうともせず、相手への加害者意識も薄弱か、ない場合も多い。相手の男性にも被害者意識がない

ので、手がつけられない。私の周囲にもそういう人はざらにいる。オーガズム（Orgasm）を知らない女は原則、自分から男を誘うことはない。男からの誘いに応じるだけである。日本女性はそうあるべきだとさえ教えられてきた。もっと極端なのは、アフリカやインドなどで、まだ根絶できないFGM。一夫多妻制が合法化、黙認される国々に多い。クリトリス切除で、女性から快感を奪う。妊娠、出産の苦役だけを残す。子産みだけはしてくれても、抱いても反応しない女体に甘んじていられる男たちの神経や如何？　気が知れんとはこのことだ。これには私の夫も深く同意する。

「おっさんら、何の反応もない嫁さんを何人も囲うて何が嬉しい？　まあ自分の捌け口が増えて便利やろけど。年とったら逆にもてあますで。それにしても、嫁さんらが揉めることもなく仲好くできるのは、皆、感じないからこそやろ」

　ふむ！　と私は気付いた。なるほど、夫が複数の妻とやっていく上で、妻たちが不感症であるのとないのとでは大違いだ。感じない方が世話がない。扱い面倒な活魚より、冷凍マグロの方が気を使わなくて済む。いちいち感じられたり、られにくかったり、あっちの妻にはこうだったっていうのに、こっちではそうじゃない…私にするよりもっといいことを他の妻にはしてやってるんじゃないの？などと、妬みあったり、もめることもない。切除された女性にとって、性交とは多くの場合、ただ突っ込ませるだけの、快感どころか、苦痛のお務めなのだ。それで、夫たちが心身共に満足できているかと言えば、やはりできていないらしく、感じる女を買いに行く者もいるという。切除されない娼婦を、だ。

　いやはや、彼らは大金持ちだということだ。複数の妻を養うカネ、女を買いに行くカネ、カネまみれのFGM。これを最初に思いついた男の顔を見てみたい。**男**だと思う。複数かもしれないが、男側の発想だとしか思えない。複数の妻を持つ事が、何より優先すべき彼らのステータスなのか？　何と不経済な話だろう。こんなことやっていたら、夫はいくら稼いでも追いつかない。貧しさを彼ら自身が招いている。私は彼らに訊いてみたい。複数の冷感症妻を養い、かつ、娼婦を買いに行くよりは、感じる妻を一人養う方が、よほど経済的なのでは？　と。しかも人権回復にもなるのだが、これはにわかには理解させにくいだろう、彼らはそもそも**人権**の概念が希薄だろうから。

　何年も前に私はFGM被害者キャディ・コイタ氏の来日を知り、その著書（邦題『切除されて』）が日本でも翻訳されたので、手に入れたが、読み終えることができなかった。7歳の少女が麻酔もなしにカミソリでその手術を受ける場面が出てきて、読むに耐えず、手放した。注射針1本でも冷や汗，心臓バクバクの私にどうして耐えられよう？　著者は13歳で顔も知らない20歳年上の男と結婚させられ、子も産まされる。何人も。艱難辛苦の末、離婚。その後のことも色々つづられていたが、付いていけなかった…いずれまた気を取り直し、読むつもりだ。快感を奪われた女性たちの悲しい実話を。

　この本を再び手にする前に、これに関した別の本を2冊読むことになった。1冊目は先のとは別の被害者による著作。(以前の著者はセネガル出身で、今度はソマリア)。2冊目は日本女性によるドキュメント。一口にFGMと言ってもタイプが様々で、その習慣はアフリカの広範囲に広がっているという。これが出された十数年前より、今は廃止が進んでいるのだろうか。インドでも被害者が多いと最近聞いた。ソマリア出身の被害者ワリス・ディリー氏の体験は切実だった。彼女の著書『砂漠の女ディリー』に詳しく出ている。

少女が切れ味悪いカミソリで、手術される**体験**が記されている。筆舌に尽くせないその苦痛も無論だが、手術後どうにか歩けるようになった時、彼女が自分の体の一部を取り戻そうと、それが置かれていた岩場へ行ったというのが悲しすぎる。5歳の子どもの考えそうなことで、もちろんそれはもう影も形もなくなっている。彼女がその時泣いたかどうかは書いていないが、泣く涙もなかったのではないか。それにしてもこの少女は逞しい、その切除から何年か後、13歳で老人とムリヤリ結婚させられそうになるのを蹴って逃げ出す。放浪生活を経て一時はトップモデルとして活躍したあと、国連大使になるが、私生活での勇気がひときわ私の胸を打った。治療不可能な不感症という欠陥を抱えた彼女が恋愛恐怖症だったのは容易く理解できる。それでも、どうしても心惹かれる男性に出会った時、その翌日、彼に彼女はいきなり「あなたの子どもを産むことにした」と言うのだ。狂っていると思われることも承知で。自分のできること目いっぱいという感じだ。最初は戸惑っていたその男性がどのように彼女を理解し、愛するようになったかは詳しく書かれていないが、大変だったと思う。いくらモデルの美人でも、感じないことが判り切っている女性と連れ添う決心をするのは。ほどなく結婚し、彼女の希望通り、子どももできるのだが、彼女は書いている。「私はセックスの喜びを知らない」と。「遅ればせに恋に落ち、セックスの喜びを体験してみたいと思った。でも、その喜びを知っているかと訊かれたら、知らないと答えるしかない。夫を愛しているから、体を寄り添わせるのが楽しいだけだ」と。

生れ故郷ソマリアからロンドンへ渡った時、性器縫合による不具合を改善する手術を受けた彼女にしてこうなのだ。故郷では縫合しっぱなしで苦しみ続ける女性の方が大多数だ。

私は、自分が心地よくイケた後、急に涙が止まらなくあることがある。相手が「なぜ泣くの？」と訊いてきても、答えられない。そんなによかったと感激しているのか、と思うなら思わせておく。私は、自分の女親も含め、生来の快感を奪われた女性たちの損失、被害を思うとなんとも、胸えぐられるのだ。こんなささやかなお駄賃もなしに、妊娠と出産の苦役だけを強いられた女性たち。

女性の快感は男性のよりも長持ちするといっても、何時間も続くものでもなく、妊娠や出産に要する時間に比べたら、ほんの束の間だ。そのわずかなお駄賃さえなく、苦痛でしかない性交の後、これまた不快な妊娠、出産の重労働に駆り出される…暴行であれ、FGMであれ、その被害を被害だとも認識できず、自分の運命のように耐えるしかなかった女性たち。あってはならないことだ。自分がどうにかしてやれるものでもないという無力感も加わり、泣くしかないのだ。更には、自分がまさにそういう妊娠から生じたという事実が、自分の存在を根底からぐらつかせる。望まれない、祝福されない命から出発したお前が、何をいっちょまえなことを…とでも言われているような。お馴染みの、雑音だ。そう思って自分を励まし、建て直す。生れてしまえばこっちのもんだ！と。

他者の人体に人為的な損傷を加えて、本来享受できるはずの快感を奪う権利など誰にあるのだろう？それも少女に、大の大人が。少女は不感症になるだけでなく、日常生活も不自由で、無感情、無能な女性になり下がる。切除後、傷口をむやみに縫い合わせてしまうらしく、排泄や出産も大仕事の障害者だ。一度の排尿に10分もかかるようでは話にならない。それを体験済みの母親たちが、性懲りもなく、娘たちにも強制する。自分が苦しんだから娘にはさせずにおこうという女性は、なかなかいないようだ。いても少ない。その他大勢の凡人たちは、**自分たちの種族の誇り**のような感覚で引きずる。日本とはまた異種だが同類の、**子どもいじめ、女いじめ**だ。

さて、今から 20 年近くも前だろうか、私もまだ 40 代頃の話。ある女性との談話のなかで、性生活の話が出てきた時、彼女が、私にこう言った。
「ご主人からのお誘いを断ってはだめよ。あなた、誰に食べさせてもらってると思ってるの？」
これにはどう応じたらいいものか、私は途方に暮れた。女も生身の人間、気の進む時も、進まない時もある。断って悪い筈ないと私は思ったが、即答もできなかった。その後の、食べさせてもらってる云々の発想について行けなかったからだ。　一体いつの時代だ？　昔、女性の経済的自立を故意に阻(はば)んで、男に頼らざるを得ない社会を作り上げた連中がいたが、その罠にもろにハマった思想ではないか。今時(いまどき)パート勤めもしない全くの専業主婦は少ないし、また全くの専業でも、主婦自体が一つの職業。主婦に現金収入がなくても、**夫に養ってもらっている**とは言えない。家事労働を賃金に換算したら夫の収入の約半分という数字も出ている。それに加えて、外で買えばけっこう値の張る**性的快感**も提供しているではないか。
意気投合して事に及ぶ時は、ウィンウィンで、恩着せがましい気持ちにはならないが、こちらが気乗りしないのに応じる時、それに値段を付けたくなる。心身共に全くゴメンと思うときは断るが、そこまで嫌ではない時は、相手の無理を聞きいれることもある。その代わり私の無理も聞いてね、という感じだ。この人にはそういうことはないのかな？

私は、彼女に訊いていてみた。「ご自分からお誘いすることもあるの？」
すると即答だった。
「ないわよ、そんなの。はしたない。それに、用事を増やしてどうするの。しなきゃ死ぬものでもなし。お父さんが言って来た時、応じるだけよ。はいはい、って。他(ほか)にすることいっぱいで断りたいと思うことも多いけど、放っておけないじゃない、結婚してる以上」
なるほど、オーガズム云々どころか、欲求自体ないのだ。冷感症というわけだろう。不感症の場合はまだ自分の症状を苦にすることともあるが、冷感症は苦にもしない。セックスの相手を「お父さん」と呼ぶことも、自分からは誘わないことも、日本ではありふれたこと、普通でさえある。というより、そう教わるようだ。母親などから、「女の方から誘うものではない」と。どうやら彼女もそうらしかった。それが常識、心得ごとのように思っている人に、それ以上切り込めない。その人にも子どもはいる。男女計 3 人。妻の務めは夫の求めに応じること、それで子どもが出来たら育てること。それが女の道だと教わってきたのだろう。そもそも、なぜ結婚した？　皆がしてるから、何となく。しなきゃ目立つでしょ。職場でも売れ残りか？って目で見られて。

そういう女性の夫たちは大抵が、妻を「お母さん」と呼べる神経の持ち主である。寝室でもそうだというからどうしようもない。妻をセックスの相手だと認識していない。そもそもセックスを知らないか、射精をセックスだと思い込んでいるのかも。思わぬ、妻からの誘いにドキッとする「楽しさ」や「プレッシャー」も、逆に断られる時の「がっかり」も経験しないまま生涯終える。だからあんな平和顔？　平和で傲慢、身の程知らずの自惚れ顔？「冷感症、不感症」の言葉をわが妻に当てはめる発想さえなく、家事あれこれしてくれる重宝で従順な女性として、**食べさせて**いるのだろう。この思い上がりを懲らしめたり、

逃げ出したりする気力のない妻、いわゆる耐え忍ぶ妻たち。彼女たちが「亭主を殺してやりたい」と言うのを私は何度も聞いた。「家事や仕事でくたびれ果てた私をねじ伏せ、やるだけやり終えたら、ごろっとあっち向いて、たちまち爆睡。何度、こいつを殺してやりたい、と思ったことか」と。
　怨念はいつかは男たちを襲うと思う。膣(ヴァギナ)の逆襲がどんな形で男たちに及ぶのだろう。楽しみと言っては身も蓋もないが、それに近い感覚が私には確かにある。

　さて、夫が自分の妻を「お母さん」と呼ぶことに抵抗ない日本人は、妻も夫に「お父さん」と呼びかける人は多い。大した根拠なしに、そう呼ぶ人ばかりではない。ある効果を期待し、意識してそう呼ぶ人もいる。

　「私が主人を**お父さん**と呼ぶのは、そう呼べば、あの人を直に触らなくていいから。子どもにかこつけて呼べば、直接触らなくてすむ気がするの」
　そう言った友人は全くの不感症でもなく、時々は自分からお誘いにも行くそうだ。次々に 3 人の元気な子を産んだ健康体。真底触りたくなる男との出会いが望まれる。健康な女は好きな相手でなくても、体が勝手に反応することがある。する方が身体にはいい。いわば、異物に対するくしゃみ、鼻水のようなもので、強姦される女性の苦悩がここにもある。無理やりの挿入で膣が傷つかないように、と、体が急遽潤滑液を出す。自衛の為で、喜んで出すわけではないのだ。なのに、これをいいことに「いやよいやよも好きのうち」などと思いあがる男が出てくるのだ。友人の相手もこの手合いで、知性にもデリカシーにも欠ける男で、確かめもせずに突っ込んで来るという。彼女曰く、「そんな時は、私、言うの、お父さん、そこと違うよ」って。若いある日、見合いで見初められて結婚したが、亭主関白に後悔している。例えばこんな誘い方。「おい、今晩やったるからな。よう洗うとけよ」…こんな言い方、私が別れた男でもしなかった。「今夜、僕、お風呂しっかり入るけど、あんた、どうする？」ぐらいの言い方はするものだ。友人は別れたいとよくこぼす。できるかな？と、私は思う。自分が離婚するときは、他人にこぼしたりしなかった。そんなゆとりはなかった。自らのあらゆる能力、エネルギーを結集し、目標達成にこぎ着けたからだ。他力も大いに必要だった。実家の母親始め協力者には今でも感謝している。いやはや、結婚などよりよほど神経すり減らす。なし終えた時には体重も何キロか減っていた。
　それにしても、「触らなくてすむ気がする」と言ってもこの友人、現実には触るどころか、融合している。めり込ませ、抱合している実態なのに、呼び方工夫で、「触らなくていい気がする」とは、なんとむなしい気休めだろう。

　現状をこぼすふりして、実は楽しんでいるような彼らには、不思議な共通点がある。「悩んでいたい」あるいは「治りたくない」のだ。自分たちが病気だという自覚がなく、他からそれを指摘されようものなら気分を害する。憤りさえ表わし、こよなく自分たちの不運、病気を愛し、守ろうとする。**病気**ではなく、**国民性**だという。**個性**だとも。生まれた時からずっと全盲だった人が、人生の途中で急に視力を得ると、

喜ぶどころか、戸惑い、うろたえ、疲労するという。患者の年齢にもよるが、病気は治さない方がいい場合もあるのだ。

　幼少の頃からなじんだ習慣、考え方、信念などを変えるのは容易ではない。親やその先代から刷り込まれた異性に対する固定観念もそうそう変えられるものではない。幼児にとっては神様のような存在の親や大人に、例えば「女は愛嬌、男は度胸」「男は泣かない」などと繰り返し聞かされたら、そうかと思い、その思想から逃れるのは容易ではなくなる。女は自分を主張せず、男に従い、歩く時も少し遅れて、慎ましく。「女にとって結婚とは、白無垢衣装で、主人の色に染まること。主人の苗字になり、その一部になることです。旦那様、あなた様の喜びが、私の喜び……」の類（たぐい）である。この思想にからめ捕（と）られた男は例えば次のようなことをのたまう。

「女は耐え忍ぶ所にその値打ちがあるんや。男に抱かれて疼（うず）いて来ても、じっと耐え忍び、慎（つつし）む姿にぐっとくるな、僕なんか」
　鍵もかからず、音筒抜けの、木と紙の家の時代の話かい？　こういう男には不感症女が適している。感じまくり、あえぎ、泣き出す女は騒々しく、はしたないのだ。おねだりしてくる女など論外で、女に性欲あるなど不潔で耐えられん。自分が望む時だけ従えばいい。断るなど、仮に生理中でも男に対して無礼だと、まるで女の方に非があるかのように見下し、貶（けな）す。

　それに類する忘れ難い出来事があった。現実の話ではない。私が小学生（多分高学年）の頃、テレビで見かけた時代劇の話だ。女がその亭主らしい男になじられていた。どうやら、妻を寝とられた亭主の怒りのような場面だった。妻を責めて、その男が言うに「死をもって、抗（あらが）えなかったか」とか…。私は時代劇に興味のない人間だったが、これは聞き捨てならず、見入ってしまった。というより、時代劇嫌悪の根源はまさにこういう所、と感知し、見入ってしまったのだろう。怖いもの見たさで。
　犯された妻に対し「なぜ死なん？」と言い放つ男に私はムカついた。女は胸のあたりを押さえて苦しそうに耐えていた。黙って。私は思った。「おっさん、あんた、襲われる妻を助けにも行かんと、何言うてんねん？　やった男を捕まえんかい。　そんで、もし妻が自殺しとったら、気が済んだんか？　その原因判るんかいや？　いかにも強姦されて死んだと丸わかりな死に方せな、わからんわな。死体が行儀よく、そこにコロンとあったらわかるんか？」様々な思いが私を駆け抜け、こうも思った。そんな男に限って、自殺されたら、死体に縋（すが）っておいおい泣き、「こんなことぐらいで死ぬことなかったのに」と言うのではないか？　あるいは正反対に、汚れた女に用はない、とばかりに次の妻をさがし始めるのか？　「汚れた」と言う概念も失礼である。複数の男と性関係を持った女をそう言うことが多い。実際はそういう女の方が清潔である。手入れも行き届いて。

　因みに、ある日突然、見知らぬ男に強姦された女性が、自分を汚（けが）れた女のように思ってしまうのは仕方

のないことだろう。独身女性なら、なおさら。そのことを婚約者に打ち明けられないまま一方的に、婚約破棄した女性がいた。これは実話だ。性暴力救援センターが取り上げた実話で、女性は匿名、顔を出さずにインタビューに応じていた。独り暮らしの自宅玄関で帰宅早々に襲われた。「言うこときかんと殺すぞ、やらせろ」と押し倒され、余りにも突然で、何が起きているかも判らなかったという。半年間、誰にも言えなかった。妊娠せずにすんだものの、事件後、死ぬことばかり考え、何種類もの精神安定剤で、気を紛らわしている。それでも人生ロスした切なさは紛らわし難く、未練っぽく婚約指輪を見せていた。……私は、その映像を、婚約者だった男性が見て、彼女に連絡したらいいと思った。指輪を見て驚き、彼女の不可解な心変わりの謎が解け、慌てて電話入れて、彼女に会いに行く、そうなったらいいと思った。私がその男性なら、「殺されなくてよかった！」と、抱きしめる。また、私がその女性なら、婚約破棄する前に、すっかり事件を打ち明けて、彼の反応を見る。ダメ元だ。打ち明けて、新たに失うものは何もない。彼のことをよりよく知るいいチャンスだ。それもせずに、うやむやのまま別れるという彼女の神経が私には理解しがたい。精神安定剤よりも何よりも、有効な治療法がすぐそこにあるのに、なぜ見過ごすのか。

私が最も不可解だったのは被害者が、事件を誰にも知られたくない、特に彼にだけは知られたくない、などと言っていたこと。他の誰を差し置いても、彼にだけは知らせるべきだと私は思う。なぜ急に彼女が心変わりしたかもわからぬまま、捨てられる男の気持ちにもなってみろというのだ。

被害者は古い考えの女性で、「婚約者には自分の処女を捧げたい」の一念だったかもしれない。彼氏もそれにお似合いの男だったかも。今時、処女崇拝など珍しいが、ないとは言えない。

同様の被害者で、一か八か、彼氏に打ち明け、理解を得、治癒に向かう女性もいると聞く。それでこそ人間。人形ではない、人間だろう。打ち明けて、万一理解得られず振られても、治癒は妨げられない。もっと理解ある男に巡り合える機会もある。じくじくと自身の傷を弄んでいては、自身だけでなく、他をも損なうだけである。

一体、どんなモノを食い、どんな親に育てられたら、こんな男女ができあがるのか？　トランス脂肪酸か電磁波の仕業か？　自分を果てしなく見失う女と、閻魔大王のように思い上がる男。時代劇の中だけでなく、現実の男たち、親、教師、親戚の男たちもそうだった。男は偉いとか、女の浅知恵、とか、何やかや威張り散らしていた。「女子供」をひとくくりにして、「男」に対峙する愚者のようにあしらっていた。

あんたら男は誰から生まれてんねん？　と、子どもの私はよく思った。

生殖の仕組みを知った後も、この思いは大して変わらなかった。女の卵子を突いただけで、すぐ人間になるか、女の腹の中で 10 カ月養うてもらわな、いっちょまえになれんやないか。そんなに威張りたければ、女なしでやってみろ。と。

これよりは少しましで、女なしでは立ち行かないことを自覚する男たちでも、お寒いお方は多い。ご自身の持ち物のサイズこそが男の値打ち、自分が気持ち良ければ相手もそうに違いない、などと思い込む初歩的勘違い組始め、女の股間はピンクが上物、黒ずんでるのは遊びすぎ、など、俗説、迷信に惑わされっぱなし。こういう衆生のためにこそ性教育が必要なのでは？　小中学生どころか、大の大人にこそ、必要だろう。性だけでなく、下半身全般の基礎知識、心得。お尻洗浄便器普及のおかげで、ビデ洗浄や肛門洗浄しすぎの患者急増、巷の医院は大繁盛。

しかるべき理由あって、締まり失う妻の膣を、ユルユルつまらんと蔑み、ソープ嬢の締まりいい膣を高く評価する男には、マグロ女がお似合い。ダッチワイフで十分。一体、商売女が、いちいち客に感じていられるか。身体もたんよ。彼女らは「早くイケ！このノロマ！」の一念しかない。感極まる訳も、ゆるゆるになる筈もない。

妻の貴重な快感に気も留めず、自身の快感追及だけに汲々の、こんな亭主が日本にはいっぱいだ。

ついでに言えば、双方いい加減満ち足りた時にでも、そのあと漏らす男の一言で、女はすっかり興ざめすることがある。「何回イッた？」これを言われて平気で答える女も、（イカないので）答えに困る女もいるだろうが、イッても答えに困る女の心は「数えてないわ！」だ。「回数やないわ、程度やわ」かもしれない。いずれにしろ、そんなことは、まだ肌触れあっているうちに感じ取るもので、「質問」するものではない。ウブな初心者の男でもあるまいし。そういう男ならありだろう、そんな質問も。

男同士で自慢しあっているのだろうか？「俺、１ラウンドで相手を〇回もイカすんやで」とか言って。イカせる男が上手いからでもあろうが、イク女が感度いいからなんだ。よすぎて失神することさえある。

実は、いくら感度いい女でも実はそうそう簡単にイキはしない。自身の体調始め、相手への好意、その場の環境、雰囲気等々、色々条件整わなければ、そうはならない。男のように単純にはいかない。それを知らない男はごまんといる。または、知っているとうぬぼれている。事後、相手の顔や体が紅潮もせず、痙攣もしていないのに、「イッた」と言われて信じる男がいる。ここは日本の母親たちも悪いのだ。「亭主はおだてろ、うぬぼれさせておけ」式の躾を娘たちにして来た。亭主に食べさせてもらうために。つまりはカネの為。この点だけなら風俗嬢と変わりない。主婦業とは住宅街の風俗業だと言ってもいい。だが、風俗嬢は妊娠、出産はしてくれない。この重要事項だけは、風俗では扱えない、人権問題、重要な意思決定問題である。しかも、女性にその自覚があるなしにかかわらず、決定権は女性側にある。「住宅街風俗業」にすぎない主婦業の中に、妊娠・出産・育児が自動的に含まれるなどと思うのは、夫たちの勝手な思い込み。これはだけは別勘定で、家族の新たな「お出まし」には夫自身もお出ましを願わねばならない。他人任せで人の親になれはしない。平たく言うなら、出産、育児を母親任せにしてはいけないということだ。

ところで、つい見落としがちな人たちのことに触れておこう。インポと言うのは昨今品がないようで、ED と言うのがよろしいとか。女は冷感症でも性交不能というわけではないが、男の ED はもろに不能。物理的に、歴然。これに本人の困惑や劣等感が伴えば、まだ治る見込みがあるが、それが皆無となるばあい場合がある。更に、それ（自分の ED）を誇りとして、性的活動全般を見下げる方々がおられる。性的活動全般を、動物的だ、卑猥だとまではおっしゃらないが、そういう目で見る。高学歴、社会的地位も高

い方々が多い。そういう方は独身で通せばいいものを、その地位の要件の一つと思うのか、見合い結婚などしてしまうから、面倒なことになる。地位や学歴に女性が飛び付き、縁談成立となることが多い。すらりとしたイケメンなら射落とされるのも早い。惚れた側の女性が寛大にも治療に協力して、医者に通いつめても、やっぱモノにならんわ、という結果になることが多い。多くは幼少時の母親の躾（しつけ）の賜物。おしっこの時以外、オチンコ触るなと躾（しつ）けられ、忠実に言い付け守って 30 年間、たった一度の皮むきもせず、医者を驚かせる男もいる。まあ、本格的な皮むきも射精もしなくても、精液たまりすぎて破裂して死んだ人の話は聞いたことがないから、それでも生きのびてはいけるようだ。人生の初っ端、母親に躓（つまづ）かされた男たちは、その後いかなる名医でも、美人妻でも、立ち直らせること超困難。

　そういう男は最初から、冷感症女がお似合いだったのだ。**独身ではない**という見栄も張れ、自身の病気を苦にする必要もない。実際にそういう相手を探し当てるのは至難の業ではあろうが、ED と**冷感症**が、がっちりタッグを組むと、最強のプラトニックラブカップルができあがる。うっかり**セックスレスカップル**などと言わないこと。彼らも手をつなぐことぐらいはするのかな、キスはどうかな？と勘繰（かんぐ）るのはいいが、不毛だとか、非生産的だと決めつけないこと。子どもを望むカップルには養子という手もある。同性カップルにでも言えることだ。
　さて風俗の話に立ち返ろう。
　女性の中には（色っぽさ演出の為）メイク落とさず行う人もいるらしく、またそれを望む男もいる。顔は洗わず、胸と股間をボディソープで洗うなど、暴挙もいいとこ。信じ難いが、現実だ。亭主に素顔を見せたことがない、化粧は女性のたしなみだと信じる女性は昔多かったし、今もいる。男にだけは、すっぽんぽんの解放感許して、自分は化粧崩れ気にしながら、デオドラントや脱毛やと気を使い、あるいはきれいに整えた、アンダーヘアのその奥にはゼリーを仕込んで、タイミング外（はず）さぬようにと、相勤（あいつと）めるわけだ。せっかく仕込んだそのゼリー、一緒に風呂へ入った客に、洗い流され、クサるソープ嬢もいるという。自分が**イク**どころの話ではない。その瞬間つけまつげがハズレでもしたら、大なしだ。
　春画の日本髪女性を見るたび、私はドン引き。あからさまな巨根よりも違和感ある。あり得ない体位や巨根は漫画だとすぐわかる。しかし髪型はどうだろう。崩れた髷や洗い髪のような絵もあるが、きちんと結いあげた髪の女性が多く描かれる。客をイカせるのが本分の花魁（おいらん）や芸者は仕方ないとして、そうとは思えぬ女性まで、結いあげた髷（まげ）はむろん、くしやかんざしまで挿（さ）して…あられもない裸体ポーズとはおよそ不釣り合いな、畏（かしこ）まった日本髪。あれを私は漫画っぽく感じるのだ。私なら、それが気になり苦になって、とてもイケない。彼女らはあれでイケたのだろうか？　そのような顔にも描いてあるが、そもそも描き手は男ではないか？　作者不明も多いという。春画展などが盛況だという、虚構の絡み合い図がな

ぜ人気を呼ぶのか。理解に苦しむ。
　春画だけではなく、古代エジプト美術でも露骨な性愛描写がある。古今東西、キスもクンニもフェラもあったようだ。心許した二人が何をしようが自由だが、下心なしに男性にフェラをしてしまう女というものは、いるのだろうか。ソープなどでフェラ慣れしてしまった男は、それが女の計算尽くというのを忘れて、いい女はフェラする女であり、それを拒否する女とは結婚しないとさえ思うようになる。自分がクンニをしたから、相手もフェラをして当然という言い分だ。こういう男に考えを変えさせるのは容易ではないが、彼らも次の一般論を知っておいてもいいだろう。
　えてして男は女から求めなくても股間愛撫をしたがるが、女はそうではない。射精も排尿も兼用という男性器の粗雑さへの戸惑いが大きい。男が吸い込まれるように女の股間へ赴くのは、自分が生まれ出てきた体験を懐かしむかのようだ。ついでに、割れ目の次第にぷっくりしてくる変化も楽しめるようだが、女は男の小便の管などに何の楽しさも懐かしさも覚えない。それを口に含むなど、ソープ嬢や膣に問題ある女性など、特殊な事情ある人以外は、煩わしいことだ。
　妻が生理中だったのかどうか知らないが、膣の代わりに口の使用を望んだ夫が捨てられた。（私のよく知っている男）
　女の気持ちはよくわかる。カネが絡まず、対等な立場での交わりでは、まず、したくなることではない。赤ん坊のような、つるり、ちょこんとした可愛いものでもないのに。
　念の為、付け加えておくと、私はフェラを全面的に否定するわけではない。一般論はあくまで一般論に過ぎない。特殊を排斥するわけではなく、むしろ見い出したいという儚い野望さえある。自分の体験では、男性のその部分に思わずキスしたくなるようなことがなかっただけだ。それ以上になる筈もない。それは相手の男性のせいかもしれないし、私の体調や思いこみによるものかもしれない。そもそも私は世界中の男に出会えたわけでもなく、出会えた男たちにしても、心身ともにベストコンディションだとは限らなかっただろう。
　私の考えを覆すような男性が出現したら、それは素晴らしいことだ。下心なしに、つい、その部分に、自分の可能な限りの、あらゆる手段を尽くした愛撫をしたくなるような男性に出会えたら！　文字通り食べてしまいたくなるような男性に。
　現実にそういう男に出会える可能性は恐ろしく低いのを、私を含め、女たちはよく知っている。
　現実の男たちの男根は、洗浄不足だったり、貪欲に摩擦を欲しがったり、口中で射精や放尿したがったりと、迷惑千万なのだ。こんなことにも気付かず、自分はクンニをしたのに、お返しのフェラをしてくれないと不満をいう男性が日本には溢れている。

　しかし、敢えてこれに気付かせず、男の持ち物を**金科玉条**のごとく奉り、かしずく女たちがいる。フェラはさておき、男性優位、男系偏重の前時代的女性は、やはりいるのだ。

夫に本音を言えないまま長年連れ添い、友人などに、「オーガズムってどんなの？」と尋ねる女性がいる。恋愛結婚で子持ちだったりする。夫は愛撫の類をいろいろしてくれるので、嬉しく思っているが、本番になっても、巷で伝え聞くような快感がないというのである。それを夫は知らないようだが黙っている。明かしてがっかりさせるのも気の毒と思い、それで十何年過ごしてきた、と。

ご亭主は女をその妻しか知らず、痙攣や紅潮の反応を目の当たりにしないからこそやっていけるのだろう。話には聞いても体験しなければ、誇張だとか思うものだ。男は直に伝わるぴくぴく痙攣や耳をつんざく叫び声を体験したなら、何の反応もない美人妻など抱く気もしなくなるだろう。ダッチワイフと変わらないからだ。絶頂で痙攣しながら白目むいたりするような女を知ったら、このご亭主、喜ぶどころか、恐れ、戸惑い、逃げ出すのではないか。てんかん発作と思い込み救急車を呼ぶ騒ぎかも。

生れてこの方、女は妻一筋、他に試したことないという男にありがちなことだ。何という損失かと私などは思うのだが、下手に入れ知恵はできない。彼らのそれなりの平和を壊してしまうからだ。要らんこと教えるなと逆恨みされる恐れもある。

特に、妻が夫に感じているとウソをつき、それを夫が信じてしまっている場合。これには手がつけられない。女の的外れな男への思いやりには閉口する。夫婦の意識が変わらぬうちは、周りからとやかく言っても始まらない。

「オーガズムってどんなの？」という質問は、友人や他人にすべきではない。するなら、夫にするべきなのだ。もしくは医師に。なぜなら、オーガズム不全は病気だから。治療すべき病気なのだ。

たまらんよ、こんな人たち。男尊女卑の天皇制が根絶できないわけだ。あれも病気だ。国民病だ。

国連も問題視、是正勧告した男子偏重。これに対し、安倍首相は社交辞令のかけらもない石頭丸出しの反論をし、世界の更なるひんしゅくを買った。

象徴天皇制。ごくごく近年貼り付けた、神聖にして侵すべからずの「現人神」が剥がれ落ち、その後、尚、剥がれ損なった瘡蓋のように、この国に、しがみ付くあの醜態。

はたまた、庶民は、歴史も浅い謎の因習、夫婦同姓をわが国古来の伝統のように盲信し、今や世界標準の夫婦別姓にさえ、到達できない。日本で以下の事実が報道されることはない。

日本は 2003 年以降、国際連合の**女子差別撤廃委員会**より、日本の民法が定める夫婦同姓が「差別的な規定」であるとして是正するべきとする度重なる勧告を受けている。なお、日本で夫婦同氏が定められたのは明治民法が施行された明治 31 年（1898 年）からであり、明治民法施行以前は明治 9 年（1879 年）の太政官指令によって「婦女は結婚してもなお所生の氏（婚姻前の氏）を

用いること」とあるように、夫婦は別氏と規定されていた。

　このように、本来あるべき姿、夫婦別氏（別姓）に復帰するまでの妥協策、**姓の選択は両性の協議で、選べるという現行法律**を活用しているかといえば、それもしない。
「ねえ、一緒になるなら、どっちの苗字にしよう？　僕たち」
　なんて話合うカップルいるか？　ザラにいていい筈のそんなカップル、現実にはほとんど聞かない。わが夫も、（多分無学なせいだろうが）これはすっ飛ばし、迷わず自分の姓にした。たまたま、私はその時の自分の姓を捨てたかったから黙っていただけ。欲をいえば私の意向も訊いてほしかった。
　それより何より、第三の姓を創設出来たらもっといいのに、と思う。我々のような、先祖からの離脱を望む者は特に。
　今、私は注意深く観察している。この件を。息子は彼女と、どうするのだろう、この件を。
　むろん私は口出しするつもりはない。成人にとやかく言わない。訊いてくれれば別だけど。

　息子から、彼女が出来たと聞かされる少し前、私は息子にこう言った。
「あんたにどんな彼女ができても、我々親は必ず反対するからな。駆け落ちしてくれ」
　息子は無言だったが、不快な顔はしなかった。黙認してくれたと思う。共に屈折した子ども時代を経て、暗黙のうちにも、それが意気投合の最大要因である夫と私が、世の標準的両親を演じられる訳ないのだ。敬神崇祖の素養がない。愛国心や道徳心、貞操観念も誇りもない。披露宴やスピーチや、先方の親たちとの付き合いなど、考えるだけでも目眩がしてくる。ネクタイが嫌いだ。それが必要とされるような場所が嫌いだ。付き合い悪いとか、変人とか思われてもいい。見放される方が楽だ。

　夫は自分の子ども時代や親の話をほとんどしない。親に捨てられた話ならまだしも、親に食われ、親きょうだいごと養ってしまった話など、思い出すのも腹立たしいのだ。ことに母親を彼は嫌悪し、母などと呼ばず、「僕が出てきた穴」と呼んでいた。「僕が、出てくる穴を間違えたんや」と。まるで子どもの方で自分の母親を選べでもしたかのように、そう言ったことがある。その「穴」は、生涯、見栄を張ることしか知らない人で、張り続けたまま、死んだ。養ってくれた息子に詫びも礼も言うことなく。その死を、夫は勤務先のある人から聞いた。そこで夫に魔が差した。葬儀に出てもいいかな？　と思ってしまった。人並みに見せる、見栄を張るという、かつての習性が頭をもたげたのだ。
　そこで私は牽制した。「出るな。出たら別れる」
　それは、私の正直な気持ちで、夫がその女を嫌っていたのとは別に、私自身にもその女に幾つもの怨みがあった。夫のことを、自分たちが貧困生活中にはいちばん世話になった子だと言ったくせに、娘が小金持ちと結婚するとそちらにべったり。**いちばん家の為になった息子**からは遠ざかり、ある日こう言う。
「親はどの子にも同じように、してやらなあかんでな、何人おっても、どの子にも分け隔てなく」

　夫とその兄の 2 人が中卒で 15 歳から働いた。後の弟妹 3 人は時代の波で、そうもいかず、高校へ進ん

だ。兄たちが彼らの学費を稼ぎだすことになる。**いちばん家の為になった子**とは、我々の縁談整った時、私の実家へ両親として挨拶に来た時、その女が言った言葉だ。誇らしげに言っているように聞こえたが、私は、にわかにはその意図も意味もわからなかった。母に訊いて、**いちばん家にカネを入れた子**という意味であるらしいことがわかった。その女は恩を感じていたのか、我々の結婚後しばらくは、夫の前妻の子への養育費を肩代わりしていたが、震災のどさくさで、投げ出した。阪神淡路大震災で被災したのをきっかけに、**弱者**になりきり、何かにつけ、それをアピールした。他のきょうだいたちには、後妻の私の要求で、やむなく支払っていたように言って。

いやはや、記憶力ない人と付き合うのは気骨が折れる。迷惑でさえある。この件始め、数々の寝言や暴言で私をびっくりさせた。びっくりと言えば、その女、数人の子を産んだが、つわり知らずの楽々お産。気付いた時にはいつも（堕胎も）手遅れで、ついつい産んでしまったが、そのほとんどが未熟児。実に軽いお産だったという。会陰裂傷や切開などの心配もない、陣痛もなく、するりと出てくる。ちょっと大規模な排便程度の感じで済んでしまうから、正常な出産の苦労や達成感を知らない。いちばん問題なのは、親が自身の早産を、まるで子ども側の責任のように思っていたことだ。夫も 7 カ月で出てきたという。それを育てるのは通常の育児よりずっと大変で、この子には苦労させられた、と（これは両親口をそろえて）言った。自分たちの若いころからの喫煙習慣を考えるだけでも、その責任は親側にあるとわかりそうなものだが。育てるのに親は人一倍苦労したのだから、その子は、恩返しに人一倍親に尽くせと思っていたのかもしれない。

彼らのズレた感覚、ズレた発言。あげつらえばきりがないが、もう一つだけ挙げておきたい。

我々夫婦に子どももできて、話題も広がり、自身の子ども時代の話も出てくるのは自然なことだ。特に同い年で同じ市内で過ごした我々夫婦は、互いの小中学生時代のこともあれこれ知りたくなる。小学校では昼食は給食だったが、中学では弁当だった。その話の時、夫が、「兄貴」の話をした。2 歳年上の兄貴は家が学校に近かったので、弁当持たず、帰宅しては爪楊枝くわえて、（食べたふりして）学校へ戻っていた、というのだ。私は尋ねた「あんたはどうだったの？」。夫の返事はなかった。後日私は義母に訊いた。「この件どうだったんですか」との主旨を、手紙で。

それが義母の逆鱗に触れた。手紙の返事はなく、次に会った時、私にこう言った。

「あんたら、夫婦やゆうて、根から葉まで何でもかんでも喋らんでええんや！」

これが私の逆鱗に触れた。

「ほっといてんか！　うちらは仲ええんや。根から葉から、花から種まで、なんでも喋るわ。子どもに、よう弁当も持たせんような、ど甲斐性なしのあんたら親を、息子らは、かばおうとしたんや。その気持にすまんとも思わんか？」

私は、その思いを口には出さなかった、というより、とっさにはうまく言葉が出てこない。ただ顔には出ていたと思う。「見下げるわ、あんたを」と。

夫から、「（母親が）死んだらしいで」と電話があった時、私は「勝手に死にーな」と答えたと思う。「今頃死んだか、やっと死んだか、死ぬのが遅すぎるんや」が正直な私の感想だった。結論として、夫は、見

栄を張りたい誘惑に打ち勝った。後はその連れ合いの葬儀だが、親戚連中も、母親の葬儀を蹴った男には期待もしないのか、知らせても来ない。そろそろその時期だとは思うのだが。

　このオヤジも何のために生れてきたのかと思える人で、仕事は転々、ど甲斐性なしの色男。若い頃モテモテだったらしく、それに躓いたのが今の妻ということらしかった。年老いて、色香失せても女好き。自分が独身モテモテだった頃の感覚そのままに、自分が触れば女が喜ぶものと信じ込み、妻以外にも、いろんな女に手を出す。娘、息子の嫁、その他親戚、おそらく他人にも手当たり次第。私にも、ちょっかい出して騒がれた。他の女性は、黙って、逃げてくれるのに、私は騒ぎ「やめてよ、何すんの！」と、事荒だてたので、慌てたらしい。似たもの夫婦とはよく言ったものだ。こんな時「すまん」など、言わないのだ。こう言った。「わしは何もしてない。そんな汚いケツ、誰が触るか！」「うっかりだ、すまん」とでもいえば、こっちも乗ってやる。それをなんだ、こいつ、こんな言い草ある？　正月の親戚の集まりで、私はこたつに当たっていた。そのこたつに義父もいた。私は子どもも連れていた。幼児は眠っていたかもしれない。しかし覚えているかもしれない、この騒ぎを。姑は、これを知っても驚きもせず、こう言った。
「あれは、誰にでもそんなんするねん。今度したら、きゅーっとつねったり」
　その場には居合わせなかった夫も私に告げられ、これを知り、いやな顔をした。そして言った言葉がこうだった。
「でも…ええやんか、減るもんじゃなし」

　これで一揉めしたのは言うまでもない。私は夫が幼少から、何かにつけ、オヤジの不甲斐なさに手を焼き、人並みの親として期待しなかったことは察していた。オヤジの手癖の悪さを経験済みの娘たちもオヤジに対する尊敬など皆無、呼び方も「父さん」などではなく、名前呼び捨てだった。「いたずらされるのは、される方の気がゆるんでいるから」と娘の一人は言ったという。悲しいな、家庭の安らぎなどなく、緊張しっぱなしの暮らしだったのだろう。夫を含めその兄弟姉妹たちは、親を頼らず、信用もせず、逆に警戒、我慢しながら、なんとか凌いできたのだ。しかし、それを割り引いても、今回の事態については夫たるもの、妻に悪さする**男**を咎めてほしかった。私は夫の気弱な失言を見過ごすことができず、問い詰めた。これを理解出来なければ別れようと本気で思った。最後は夫の土下座でなんとかおさまった。今後はオヤジを遠ざけておくしかない。もし、同じような現場を見かけたら、こう言う。
「オヤジ、やめろ。僕の嫁さんに何するんや」
と言うことで収まった。なんともはや、情けない話ではある。オヤジの悪さを聞いた途端に怒りがわきあがり、そう言いに行ったというわけではないのである。
　因みに家族としての機能がいい加減な人物の呼称は厄介だ。私も夫の母親をどう呼ぶか、困った。実際の対面時では「お母さん」とか、子供が出来てからは「ばあちゃん」と呼んだと思うが、このような記述の代名詞になると、その女とか、義母とか姑とか、定まらないままだ。どれも適切とは思えぬまま使った。

夫は、子ども時代、アル中のオヤジが時々入院するのが**天国**だったという。夜っぴいての「くだまき」（酒に酔った人が同じことを繰り返し、くどくど言うこと）がやみ、夜ぐっすり眠れるのからだ。自分の幼い息子の寝顔を見て「安心しきって寝とるなあ」と感慨深げに言う夫に私は訊いた。あんたはそうじゃなかったのか、と。すると夫は自分の子供時代のことを話した。
釣り仲間でいろんなことが話題になるが、親の話を自慢そうに、懐かしそうにされると、いちばん困る、と言ったことがある。
彼のことだ。そんな時、見栄も張らずに、場も外さずに、黙ってブスーッと聞いているのだろう。
見栄は子どもの頃に張りすぎた。張らされたのだ。そんなことは子どもの仕事ではなかった。ああしんど。若い頃にもそうだった。最初の結婚でもそうだった。つい先ごろまで、そうだった。もう、たくさんだ。今は本音でゆっくり過ごしたい。家へ帰って、ひと風呂浴びて、すっぴん女とチチクリあい、夜が明けたら仲間のいる海へ行き、皆としゃべくり、釣り糸垂れて、また家へ帰って来ては、溜まった録画を見て過ごす。子ども時代のなかった彼に、今やっと来たんだろう、ほっとする時、楽しい時が。

さて、ついでに、こんな情報どうだろう。尿漏れ改善策と性生活の関連を、あれこれを探しているうちに、こんな広告みつけた。**膣トレグッズ**なるものだ。以前からあったアメリカ製が品切れで、それよりお手頃、機能も今風なもの。多分国産？　女性医師のおススメ品。見かけは、**たらこ**っぽく、色はピンクの小ぶりな商品の写真入り。その説明は、

「スマホと連動した膣トレグッズ。本体に膣圧を感知するセンサーがついていて、トレーニング記録をアプリ内に記録できます。」

通販の購入者レビューなど見ていると、購入者は女性ばかりでもないらしい。類似の商品いくつかあって、機能すぐれものからイマイチのものまで色々だ。彼女の為に購入して、喜ばれているとのレビュー、にわかには付いていけない感覚だが、何とかして彼女を喜ばそうとする気持ちはほほえましい。でも、なぜかこうは思わないらしい。「そんなのに人気（にんき）取られて、僕が要らなくなったらどうしよう？」と。
これ、あながち杞憂でもなさそうだ。**セルフプレジャーグッズ**なるものが売れ行き好調だという。女性向け大人のおもちゃ、と言ったらわかり易いか。私は、これ、ひょっとして、古今東西、女性たちが虐（しいた）げられてきたことへの逆襲、男たちへの**ヴァギナ**(膣)**の、陰核の逆襲**ではないか、と思えてくる。

女性の性的快感は男性の利那的なものより、ずっと持続的で深いと、よく言われる。持続的は確かにそうだが、深さとか、強さはどうやって測り、どうやって比べるのだろう？　100組以上の男女を実験室で観察計測したというマスターズ＆ジョンソン報告は参考にはなろうが、あの曲線では表しきれないものもあるのではないか。最近では性器そのものよりも、脳の観察に重点が置かれるようで、MRI での実験や観測が行われているという。
まあ、しっかり取り組んでよ、と思うが、男女にはっきり差があるのは快感の余韻だろう。確かに男性はあっという間に冷めるようだ。それに比べて女性の方はだらだらといい思いをしていると言われると、

そうかもしれない。まあ、そういうことにしておくとして、これをその後に続く妊娠、出産という重労働のご褒美だ、のような説明をされると、ちょっとしんどい。閉経後の女性もそうだが、若い女性でも、諸事情で妊娠、出産に繋がらない快感はいくらでもある。快感それ自体が女性に必要で、それが女性を元気に、きれいにする。「女性に限らず、人間とはそういうものではないか。更に、知る人ぞ知る、の奥義だが、やり方次第では出産それ自体も快感になりうる。これを私は自分の出産後ずっと後に知り、悔しい思いをした。これを知ればラマーズ法など、かすんでしまう。また、いわゆる後産、自分の胎盤を見向きもせずに捨ててしまうのは愚かだったことも、後になってから知った。動物はちゃっかりそれを食べることは知っていたのに。その栄養成分プラセンタを取り出してカプセルにしてくれる助産院もあるという。今度生まれてくるときは、そういう凄腕の助産師を是非とも確保したい。助産師を女性限定とする日本とは違い、男女の助産師がいる国もある。そういう国に生まれたい。

夫は、自分がそういう国に生れたら、助産師になり、妊婦のマッサージをしまくり、イカせまくって、スルスル産ませるで、と笑う。

思うに、妻の出産を夫が手伝うのが、本来なのではないか。我々にお馴染みのお産というものは、病院であれ、助産院であれ、「ご主人はあちらへ行って下さい」などと、言われて出産の場から（医療関係者以外の）一般の男は閉め出されていた。出来ても精々立ち会いだ。これがそもそもの間違いだと気付いて、積極的に妻の出産に係わろうとする男性も出てきている。自宅出産などで。出産はセクシーなものではないという定説に真っ向から反対する人々がいる。出産は究極のオーガズムだと。

病院では立ち会わせてはもらえても、肝心なことはできない、それではだめだと気付いて自宅で産もうとする人が出て来ている。素晴らしいことだ。役所への出生届も、医師の出生証明書の代わりに、現場写真で受理されるそうだ。へその緒でつながったたままの母子の写真なら、どんな証明書より有効だ。

ところで男性が、女性と交わりたがるのは、まずは自分の欲求を満たす為だが、女性の反応を楽しむ為もあるだろう。熟練し、心にゆとりが出てくると、そちらへの関心が強くなる。女性としては無論こういう男性の方が楽しい。女を排泄壺のようにしか扱わない男と、女を楽しまそうとしてくれる男、どちらが女性に愛されるか、訊くまでもないこと。しかし、それには男性側に子ども並みとも言える飽くなき好奇心やエネルギーが必要だ。外国映画で、うつむいた女のうなじをゆっくり撫で上げる男がいた。女が自分の方から長い髪を染髪するときのように、そうしつらえたのか、男が、そうしたのかわからなかったが、双方、それを楽しんでいる様子だった。いわゆる前戯でのシーンだったが、女の身体のあらゆる部分を楽しみ、相手にも楽しませようとする彼らには、日本人にはちょっとかなわないほどのゆとりを感じた。

日本人はそこまで、お遊びに長けていないが、本番は大丈夫、それをそれはいつの時代にも変わらぬ男の本能などと思い込んではいけない。昨今、これを面倒だと感じる、いわゆる草食化する男が増えている。若い世代に多い。性的接触どころか、デートなどの対人関係さえ楽しめず、煩わしがる。当然、結婚にも及び腰。まずしない。

もっと複雑に病んでいる男は、行為は出来ても、刹那的な自分の性的快感と、持続的な女性のそれとを比べてしまい、敗北感や絶望を感じるという。これは聞き捨てならないことだ。そんなのは、私にとって

は新種の男だ。最近、ある男性の独白本『感じない男』（森岡正博著）を読んで初めて知った。女性の快感享受をそのような受け止め方をする男がいるのを。本は十年以上も前に出ているから、そういう男はもっと以前からいたということだ。

私が体験したり、知っていた男たちは、いかに女を楽しませようか、喜ばせようかと夢中になる男だ。女があまり反応しないと凹み、感じると喜ぶ、さらに女が取り乱し、白目むいて失神するような過激な反応をすると超ご満悦、そういう男たち。関心は相手の反応、それをもたらした自身の満足。専らこの二つで、男性自身の（射精に加えての）持続する快感など欲しがる男はいなかった。この本を書いた男は悶絶するような過激反応を示す女を見たらどうするのだろう？　喜ぶどころか、立ち直れないほどの敗北感に苦しみ、目前から消し去る？　逃げ出すか、殺すのか？　意外な所で FGM と重なり合ってくる。女性の快感に圧倒されそうな、ひ弱な男性が女性の優位に立とうとして女性性器を切除するのでは？

それにしても、この本には射精やマスターベーションという言葉がふんだんに出てくるのに、ペッティングやキスという言葉はほとんどない。この著者の性生活が窺えるようだ。

結論から言うと私は彼の**苦しみ**を**寝言**としか思えなかった「自身の性欲に手を焼いているなら、断食でもしたら？」と思った。それより、この手の男、羨み方が中途半端で足りないんだ。あんたたちが羨む女性の壮大な快感と同時に、妊娠、出産という大いなる可能性も羨んでほしいね。それはどんなに高性能な避妊用具もすりぬける可能性ある怖いものだよ。悪阻なんてものも味わってみたら？　急に味音痴になり、いつもムカムカ、何も欲しくない。夏ミカンがいいというけど、他のものよりマシというでけで,そうそうおいしいものじゃない。食いしん坊の私には世も末かと思えたよ。そう、それより、もっとしょっちゅう遭遇するものが毎月ある。思うに任せぬ股間の出血、月経。訓練により、この排泄を、随意にできたという昔の芸妓は別として、怠惰な現代女子には大抵ムリ。出したいときに出せるってものでもないから、オムツ当てと変わらぬ状態。タンポンという挿入吸収用具もあるが、経血は素直な液体ばかりではないからね。月一とはいえ、1 日では済まない。数日は続く。これが約 40 年間、どう？

そう思いながら、同じ著者の別の著作を見ると女性の妊娠、出産への配慮もちゃんと書いてある。生理についても事細かく。知識としては知っていても、身に付いていないようだ。むろん男性の彼自身が妊娠ということではなく、伴侶の妊娠、出産だ。

いやはや、この著者の、ごく狭い視野での女性への羨望、自身への絶望には閉口する。「女は男の何倍も気持ちいいんだ、男は単なる道具だ」などと思えるのは人生のごく限定的場面でのことだ。生殖という仕組みからいえば、そのエサ、罠とさえ言える女性の快感を羨むだけ羨み、その根本にある**生殖**には遠巻きにしか言及しないこの著者。色ボケと言っては失礼かとは思うが、つい、そういう言葉も浮かんでくる。

自分が女になれない男だとわかっているのであれば、無い物ねだりの女性のオーガズム云々にこだわるより、現に得ているものをもっと大事にしたらどうか。利那的であれ、男の快感も苦痛ではなく、快感には違いないのだから、もっと大切にしたらどうだろう？　一瞬であるからこそ、貴重だと。男は悠久の昔から、それを受け入れて、代々次世代へ繋げていった。これに異議あるなら、男をやめるしかない。

フツーの男はそれを公理のように**承知**しているが、彼はそれを**了承**出来ない、と、こだわっているように見える。

　こういう複雑なご病気の男たちは中途半端に人の親にならない方がいい、と私は思ったが、それは私の老婆心で、彼ら自身が心得ているようだった。親になるという発想は彼らにはない。または万一、既に親の立場にいる場合は、それを明かさず、一男性として白状するのだろう。射精後の虚しさを。私の夫はこれを笑う。「出しきったら、虚脱感は当たり前や。男は誰でもそや。それを材料に長々文章こねまわし、本にまでするとは、なんぼヒマな男や。タイトルの『感じない男』もふざけとる。自分がミニスカートの女に欲情する、と書いときながら、自分を、感じない男やて？このおっさん、頭イカレとるで。出した後の虚脱感を虚しがるなら、食後の満腹感も虚しいで、することなすこと、何もかも虚しいで」

　さらに私があれこれ訊き出したところ、夫は言った。

「出しきった後、僕は、虚しいというよりは、解放感かな。次また溜まってくるまでが、男のしばしの自由よ。割れ目ちゃんから自由になれる、ね。溜まってきたら、また捕まってしまうの、割れ目に。男は女にオチンコ捕まれた不自由な生き物よ」

　嬉しそうな顔でそう言う夫は、瞬時の快感も、その後の虚脱感もひっくるめて楽しんでいるようだ。虚脱が長続きしたり、自分を支配してしまう筈ないのを知っているからだろう。「おっさん、独り暮らしのチョンガーやから、そんな陰気臭いんとちゃうんか」とも言った。

　そういう批判も著者は覚悟しているだろう。何しろ読者は老若男女不特定多数なのだから。

　彼は自身の公式サイトで連絡先を公開していたから、私は一読者として、素朴な質問をした。「あなた様は独身ですか？」と。返事はない。

　著者は日本人にありがちな、持病を愛し、治りたがらない類の人のようだ。本人も気づいてはいるのだが、最良の治療は性転換手術だっただろう。この著者、思春期に「男になりたくない」という自分の性同一性障害に気付きながら、その気持ちに添った治療をしなかった。今でこそ、その病も治療も珍しいものではなくなったが、40 年も前では、一般人の手の届くものではなかったのだろう。なすすべもなくズルズルと男になってしまい、気持ちの整理がつかぬまま、中年も過ぎた頃、長々と文章をつづることになったようだ。「自分と同じようなセクシャリティを持つ男性が自分以外にも実在してほしいと願っていた」という告白はホロリとさせる。著者はその後、自分と同類の読者たちの実在を確認出来、慰められたという。自分の病気を材料にカネ儲けした点には抵抗もあるが、謙虚な独白で仲間を求めたという正直さは評価すべきか。何であれ人は仲間、同類を欲しがる生き物なのだ。それにしても、「イカレとる」の一言で病人たちに憐れみのカケラも示さないわが夫には、笑うしかない。彼にはそんなヒマはなかった。忙しかった。逞しかった。常に一家の担い手だったのだ。

　男が自身のわだかまりも解決できないまま、人の親にならない方がいいのは当然だ。そんな親は生まれてきた子どもの為にならない。小さな命の誕生を目の当たりにしても、戸惑うだけだろう。「ああ自分の刹那の快感がこれに化けた！　魔法だ！　すごいなあ」などとも思わないだろうから。歓迎されない子

どもも不幸だ。ひと昔の男の中には、これとは対照的な男がいた。「妻は自分のおかげで子を孕み、産めたのだ。おれは偉い。妻よ、子供よ、感謝しろ」と。草食系とは対照的な病気の男が、ごまんといたのだ。妻の 10 カ月間の労を全く評価できない男が。これは概して草食系より始末が悪い。病気の自覚皆無という場合が圧倒的だから。

ところで、女性の妊娠、出産は、確かに男にはできない女性の特権だが、しかし、女性がそれをしないからといって、女性ではなくなる訳ではない。意図してしない場合、不本意ながらできない場合、どちらについてもそうだ。人間、男でないなら、女なのだ。それは体の構造よりも、心が欲する方が支配的だと私は思う。ところで、ほんの少数派だが、どちらでもない人々もいる。どちらも望まない、まるで私の子ども時代を貫き通したような人々が。そういう人々は宿題としてお預けにせざるを得ない。実際そういう人と係わることになったら、しっかり取り組もう。いいかげんな想像や憶測で論じるのは軽率だろう。

同性愛者も私は否定しない。そうならざるを得ない理由があるのだろうし、非生産的などという批判も軽々しくは出来ない。平凡な異性カップルより、子ども思いの人々もいる。養子縁組により、彼らに育てられる子は、いい加減な実の親に育てられるより幸せだろう。現実には特別養子縁組はまだ無理である。（それなら実の親と縁が切れ、完全に自分の実子にできるのだが）完全な実子扱いにはならない普通養子縁組か、里親なら可能だ。日本の今の法律では、特別養子縁組の親になるには異性の配偶者を持つ成人でなければならない。どこまでも子どもの側に立つ福祉に本気になれない国だ。

今現在、同性婚カップルに可能なのは里親になるか、普通養子縁組しかないが、それでも子どもの必要は大いに満たせる。子どもが頼れる、愛せる大人が必要な時期に、それを満たす存在がいてくれるというのは子どもにとって、何よりの幸せだ。たとえばそれを成し得た女性同士のカップルは、子どもを産み捨てる女より、はるかに生産的な女性ということになる。

自分の体よりは、**心**の望む性が自分の性。体が完全に男でも、女になりたい人はそうならないと生涯悔やむのだ。『感じない男』の著者のように。片や自分の思いを遂げた人は、たとえ不完全な女にしかなれなくても、男から脱却できただけで十分幸せなのだ。時代と共にこういう人々には道が開けてきたようだ。かの陰気臭い著者から十数年後に生まれた男性。オカマ高じて性別適合手術を受けた某有名タレントの女っぽさは凄いものだ。普通の女性なら敬遠するような、女の子っぽさ。メイクはもちろん、ウエスト絞ったドレスは定番。そのドレスはレースにフリル、リボンが付き物。さらに、コサージュ、イヤリング、ハイヒール、小さな帽子か大きなリボン。今時じゃないと笑えてくるが、これは人に見せる以上に、自分が楽しむ為だろう。水着もお得意。見事なプロポーションはどこから見ても女だ。TV 画面に彼女が登場するたびに、私は拍手、「あんた、女になれてよかったなあ！」と。むろん、卵巣や子宮などの増設は出来ない。精々乳房造形ぐらいしかできないのだが、それでも彼女の喜びは大きいのだ。

その逆、女が男になりたがる場合も同様。妊娠、出産の機能を捨てて、代わりに精巣新設できるわけではなくても、やはり男になりたいのだ。外見だけでもいいから。性同一性障害者の気持ちが私は半ば解る。私自身、思春期に目立ってくる胸の膨らみが嫌でたまらなかった。その頃にしたかったバレエを始めて、きちんとした下着で胸を支えることも学び、日々激しい稽古に明け暮れていられたら、胸の膨張もぐっと抑えられただろう。バレエや体操競技、陸上競技やハードなスポーツに熱中すると、女らしい体からは遠ざかってしまうらしい。願ってもないことだ。思う存分やって子ども産まずに 40 歳で生涯終える、というのが私に似つかわしい人生の筈だった。貧困ゆえに、その望みも断たれ、親たちのドジしまくりの調査、尻ぬぐいに奔走するなど、不本意の極みである。

10 代の初め頃、同級生の中には胸の膨らむのを喜ぶ子もいたのに、私は少しも嬉しくなく、うつぶせ寝で膨らみを潰そうとさえした。(後になってこれは逆効果もいいところの最悪なやり方だと知った)といって、男になるのも嫌だった。銭湯で老若男女の裸体を観察できた私は、女児の身体が最良だと思った。成人女性の乳房は、かつて自分も世話になったことがあるせいか、嫌悪感はなかったが、わが身に降りかかってくるのは憂鬱だった。まして役割終え、しぼみ、垂れた乳房の始末悪さといったら！　男たちの陰茎が千差万別なのと同様に女の乳房も千差万別だった。中には年老いても子ども並みの平坦なままの人もいたが、多くはそうではなく、中にはヘソ近くまで垂れている人もいた。この不平等さはいまだに承服できない。

日常生活の便利さが違うのだ。まるで違う。ブラや補正下着では追いつかない。ブラや各種インナーが、いくら着心地よく改良されても、裸の楽ちんさにはかなわない。その不便さを想像もできないという人は、試しに作り物の長い乳房を胸に取り付けて、生活してみるといい。たった一日でいいから。関西の某コメディアンがやるようにだ。あんなに短時間ではなく、丸一日ぶら下げて暮らしてみればいい。邪魔になれば、各種インナー、補正下着で固定しまくって。

アフリカなどの裸族の年配女性も、私から見れば、ずいぶん不便そうに見える。長く垂れ下がる胸をブラなどで、固定もしないのは暑苦しさを嫌うせいだろうか。切除すべきは少女時代の股間ではなく、授乳後の乳房だろう。

私は老年になってから、それを部分的にでも切除して、いくらか身軽な体を得た。

実は若いころからの悲願だった。小柄な体のわりに大きすぎる自分の乳房が邪魔で仕方なかった。女親に似たのではなかった。男親を産んだ女に似てしまったのだ。我々母子に「どんな根性で孕むと、あんな男が出来てしまうのだろう？」と思わせた、あの女だ。

私の女親がよく話したのは、その姑が雑巾とフキンを区別せず、寝具や衣類の扱いも投げやりだったこと。布団上げ下ろしの度、埃もうもう。居合わせるのが苦痛だったという。要するに衛生観念のカケラもなく、炊事や洗濯も、決して姑に任せたくない、自分でしないと安心できないと思うやり方だったそうだ。そして、覗き見。自分のできそこない息子が人の親にならないように監視すべき所を、何を思ってか、この子も一人前にコトを行えているか、とばかりに覗きに来ていたそうだ。覗かれていることに気付いた方が「何してるんですか？こんな所で！」と咎めると、ふてくされるように黙っていたそうだ。

よりによって、そんな女に部分的にでも似たことは、私にとって不本意極まりないことで、どんな手段を講じても何とかしなければならなかった。「あんな女に似ないでおく為になら何だってする！」私はずっとそう思っていた。私が 20 歳の頃、どこへ相談していいかわからないまま、ある医療機関を訪れた。大学病院の多分、整形外科だったと思うが、母に付き添ってもらって行った。医師に希望を言ったが、受け付けてもらえなかった。医師は良心的だった。これから結婚、出産、授乳という大事なことを控えているのに、リスクの高い手術は思いとどまるように言った。実際、当時はそうだった。医師はこうも言った。「その、あんたが言う大きい胸が嫌で結婚しない、という男がいたら、そんなやつとは結婚せんでよろしい！」お気持ちは嬉しかったが、かくて私は重い胸をぶら下げたまま何十年を耐えることになってしまった。そのうち、遅ればせにでも出来た子どもが威勢良く吸ってくれて軽くはなったが、縮むことなく、

しぼんで垂れた。元々垂れ気味だったのがなお一層。マッサージや筋トレもいくらか有効だったが、労の割に効果は微々。

それから、更に時は流れ、リスクも激減、美容整形も乱立するほど普及した。それぞれのサイトで施術前後の写真も見比べることが出来、選ぶのに苦労したほどだ。授乳もとっくの昔に済んでいる私の希望としては、すっかり切除したかったのだが、医師がためらった。私の年齢を考えると、大規模な切除は体への負担が大きすぎるというのだ。受け入れざるを得ない意見で、従ったが、私は後悔した。介護やパート勤めに汲々で、それどころではなかったが、何とか時間を工面して、もう少し早くしていたら、カエルのようなペタンコ胸に戻れただろうに、と。実際、私はブラジャーをしなくてもいい胸を、まずは希望していた。乳首も不要だった。（いわゆるペチャパイでも、乳首の所在を隠す為にだけ、ブラをする人が多い）医師は私の要望にいい加減、困り切った様子だった。物理的に出来ないではない、だが、その大規模な切除に体が耐えられるかだ、と。出血も多いし、回復にも時間がかかる。…色々考え、私は妥協した。現状と理想の中間で妥協することにした。費用もかなり抑えられる。回復も早い。

無念な私と、ほくそ笑む夫。手術後、夫は、私がてっきりペタンコ胸で帰ってくると思っていたのに、意外と取り残しがあったことを喜んだ。どっちにしろ、全く無傷ではすまないのなら、ペタンコじゃない方がよほどいい、と。乳首もあるのが当然だ。これは後になってそうだと思った。もし要介護状態になって、入浴介助される時、カエルのような、のっぺら胸では人を驚かせてしまう。また、これは重要な性感帯でもあった。それにしても、授乳時の感覚と、性愛における感覚が全く違うのは不思議である。同じ箇所であるにもかかわらず。

我家の場合、夫にしろ、息子にしろ、乳房大好き人間だ。彼らの場合、感触がまず第一らしく、形は二の次。三の次。垂れ胸持ち主の不便はあまり考えない。夫は、最初、胸をいじること自体に反対していた。私が切除を決心したと聞いた時には、悲しんだ。乳がんで乳房の大部分を失う女性が、人工的な修復をする気持ちが解るという。私は解らない。それどころか、あわよくばそうなって、それが片方なら、両方無いようにそろえたい、とさえ思った。私は夫に、例の「ぬいぐるみ乳房装着体験」を勧めた。嫌がるので、ブラジャー着用体験だけでも、と食い下がった。それも考えるだけでも窮屈だと降参し、私の手術に賛成した。

ちなみに、乳房に性的魅力を覚えるのは日本の男性に多く、ヨーロッパやラテン系の男性たちはヒップの方に、より魅力を感じる傾向があるという。乳房がまずは赤ん坊の為のものであることを考えると、日本の男性は赤ん坊段階から脱していないということか。そうだろう。乳房でも、使い込んで垂れたようなものより、お椀を伏せたような若い乳房を好む。いい大人、オジンになっているくせに、歳（とし）不相応に！

女性でも、こういう話に全く縁のない人もいる。授乳を終えて、特にケアしなくても、垂れない人がいる。というより、元々垂れる余地ないほど平坦なのだが、彼女たち自身はその貴重さに気付かない。膨らみが欲しいなどと寝言を言う。シリコンを入れたりする人もいる。入れて外見はふっくらになるが、寝ても流れず、ゆすってもうまく揺れない。そういう女性をアダルト動画で見たことがある。

その立場になったことがないから、私はペチャパイ女性の気持ちが解らないのかもしれない。でも、ペチャパイの小学生の頃から、ほんの少し膨らみかけた時、これ以上育ちたくないとはっきり思った。思春期に、情け容赦なく育つ乳房を鬱陶しく思った。貧乳や何やと言われても、それで授乳が果たせたら、私

から見たら最高の乳房、垂涎の乳房である。
　乳房縮小手術。技術進歩したとはいえ、受ける側も楽ではない、保険がきかない高額な費用、その後の何度かの通院、自宅でのケア…すべて余計な苦労、出費なのだ。
　この不平等は男性の陰茎の千差万別ぶりの比ではない。
　そんなことはない、と男性から異論が出そうだ。そうそう、私が女性だから気付きにくいだけで、男性の股間の一物も生涯持ち歩かなくてはならないお荷物だろう。更には、剥けている、いないと、面倒の始まりでもあろう。私はそこまでの詳細は知らないうちから、男を気の毒に思っていた。股間の一物が見るからに邪魔そうに見えた。近所の女の子で男児のオチンチンを羨み、自分にそれがない、と泣いた女児がいたが、気が知れなかった。子どもたち何人かで遊んでいるとき、男の子が立ちションするのを見て羨んだという。それを聞いて彼女の気持ちも少しは解ったが、人が排尿に費やす時間など、それ以外の時間に比べたら些細なものだろう。私は、それに固執する気にはなれなかった。更に昨今では、日本の一般家庭内では、男の立ちションがタブー化してきた。トイレ掃除に手を焼く妻たちが、「座ってして」と言い出したのだ。我家でも早くから皆そうしている。

　幼少時から銭湯で老若男女の裸体を観察できた私は何と恵まれていたことかと思う。まだ近視でもなく、遠目が利く目で十分観察でき、考察する時間もあった。
　私の理想は乳房も陰茎も、無論体毛もない姿だった。実際 10 代の始め、親戚の風呂場の大きな鏡に映った自分の裸体に惚れ惚れしたことがある。銭湯にも、もっと大きな鏡があったが、その他大勢で見るのと、一人きりで見るのとは大違い。まじまじ見たのは親戚の風呂場でだった。私は、ほんの少し膨らみかけた胸の、そのままで、ずっといられたらどんなにいいかと思った。人が何かを嫌悪するのは、それが自分に不要か有害、またはそれを使いこなせないからだろう。乳房しかり、陰茎しかり、体毛なおさら。要するに生殖器官をうっとうしく感じるのは、生殖能力がないからなのだ。年齢的にそうであったり体力的にそうであったりする。成人していても、病弱でそれどころでない人は性的な話題さえいやがる。性暴力の被害者もそうだ。
　私が小学生の低学年頃、近所の同い年の少女と一緒に大人の雑誌を見ていた時のことだが、大人の女性の裸体写真が出てきたとたん、彼女は「キャッ！不潔」と叫んで本を閉じてしまった。昔のヌード写真だから、股間は隠れた写真なのだが、少女には衝撃だったようだ。裸体自体が大事件だった。いわゆるヘアヌードだったりしたら、どうなっていたことか。股間というのは、子どもにとっても大事なところだ。ただし排泄器官として。それしか体験しない子どもにとって、その近辺のもの、またはそれそのものが未知の機能を持ち始めるというのは当惑する話なのだ。初潮にしても、本人にしたら「何がめでたい？こんなうっとうしいこと！」でしかない。少年の精通も同様だろう。知りたくもない、という時期もあるだろう。
　キャッと叫んだ少女は、まだその時期だったようだ。また、銭湯へも行き慣れていないから、私のような免疫もなかったのだろう。私が思うに、子どもは、なるべく早く免疫を得る方がいい。平たくいえば、早くから人の裸体を見慣れておくことだ。老若男女の。それも写真ではなく本物を。すると、バカでない限り、気付くだろう。おしっこの為の道具がなぜ、男と女ではこうも違うのか。おしっこの為だけになら、男のこんなに大層なものは邪魔でしかない、何か理由があるのではないか、と。

不特定多数の裸体を見なれていないせいか、それに気付きもしないお子様たちを相手に、懇切丁寧に男女の体の違いや機能を説明するのは億劫なことだ。しかし、これは大人たちの務めだろう。人類を滅ぼしたいと思うならいざ知らず、そうでないなら教えるしかない。というのも、人間は他の動物と違って、本能だけでは生殖行為が困難だというから。不可能だと言い切る学者もいる。本能ではなく、知的な習得だという。言葉や図による理解が無ければ、交接不可能だというのだ。いくら体が成熟していても。私のような天才的どすけべえは別として、普通はそうなのだろう。そうしておくことにして、そのタイミングだ。

それは子どもが知りたがる時。「赤ちゃんはどうしてできるの？」などと訊いてくるとき。だから学校で一律にというのは最良とは言えない。家庭で、その子の関心に合わせて、が最良だが、むろん、少々タイミングずれても、教えないよりはずっといい。早すぎるぐらいでも、遅すぎるよりはずっといい。わが息子は早すぎたかもしれないが、知ってからは知らない子のことをかげで笑っていた。その子の親を差し置いて、自分が得意そうに教えることはしなかったようだ。「あのな、〇〇ちゃん、まだ知らんで。教えてもろてないみたいや、ふふふ」と。

性教育という言葉は漠然としすぎて、余り使いたくないが、妊娠の仕組みを教えることも、またそれを防ぐ方法を教えることも含むだろう。知的障害者の特に女児は性暴力の被害に遭い易く、それを問題視した教育者たちが、人形を使って性教育をしようとした。人体の仕組みをわかり易く、立体的に模倣したぬいぐるみを使って子どもに指導しようとしたところ、一部の政治家たちが、これを、猥褻だと言い出した。2003 年**七生養護学校事件**の始まりである。当時の東京都知事、日本国首相、石原氏、小泉氏はこぞってこれを猥褻呼ばわりし、東京都教育委員会が当時の校長及び教職員に対し厳重注意処分を行った。人形教材を押収した都議たちは、通常着衣だった人形の下腹部のみ服を脱がせ、性器を露わにした状態で写真を撮り、これを産経新聞が大きく報道。都教委は人形以外にも、授業記録、ビデオ、会議録等、ありとあらゆる資料を押収。事実は没収。その後、行方不明だと言って返却しない。

これを不服とした校長、教員らは提訴し、結果は勝訴した。2010 年最高裁での勝訴でこの事件は、知る人ぞ知る、の重大事件となった。日本の司法が、本来の役割を果たし得た数少ない例だろう。この学校の教材は、知的障害者にわかり易くということで、男性器、女性器を備えた人形、そこから生れてくる赤子まで作られていた。その忠実さに私は感心した。男女の人形作りについては、似たようなことを、性暴力救援センターなどでもすると聞いた。心理的に不安定になっている被害者は知的障害者と同様、言葉だけではうまく状況を説明できないからだと。七生養護学校の人形の性器の周囲は黒く仕上げられていた。陰毛を表すのだろう。日本人が大人になれば、実際に性器の周りはそのような色になるのだから、そう表現するのは当然。それは教材としては正しい。

それとは別に、個人的な私の美的センスにとっては抵抗がある。

裸体に免疫あり、目をそらさずに、鑑賞できる私でも、体毛にはいい印象を抱けたためしはなかった。長じてから自分の身の上にもそれが降りかかり、私自身はクサっているにもかかわらず、男たちがそれを苦にもせず、それどころか、愛おしそうに愛でる様子に私は呆れた。「性欲は審美眼を狂わせてしまう」そんな気が私はした。「蓼食う虫も好き好き」ということわざがまた浮かぶ。そうだ、ある男性は得意そうに言っていた。「ハート形が心臓の形なんて嘘だ。ぷくっと膨らんだ時の割れ目だ」と。

動物にグロい、という感覚があるかどうかは知らないが、人間は、えてして発情時には、グロいモノに抵抗感じなくなり、それどころか好み始めるようだ。陰毛露出した全裸女性を美しく感じるのは射精前だけで、終わった途端、見るのも嫌になるとはよく聞く話だ。学者の言うには、人間の陰毛は交接 OK のサインだという。それに適応できる機能が成熟した証だと。しかし、全くの裸族なら、いざ知らず、着衣があたりまえの民族には、これを相手に見せびらかすわけにもいかず、もっぱら自分の自覚の為ということになる。自分はもう生殖機能備わったのだ、と。しかし、それとて、説得力ある話ではない。女性は月経がはじまり、男性は精通があれば、それでわかるではないか。女性の陰毛を性的興奮のバロメータという学者もいる。興奮の最初の兆候として、この立毛現象があるという。よく観察したものだと感心するが、いわゆる鳥肌が立つ状態で、その仕掛け人は毛そのものではなく、皮膚以下の組織だろう。毛はその状態を白状しているにすぎない。毛がなくても興奮は出来るのだ。それを観察する男性側の目安にはなろうが。

脇毛についてはどうか。異性の腋毛を見て発情するか？　男のであれ、女のであれ。むしろ引いてしまうのが実情だろう。だからこそ女性は、大多数が、当然のように脱毛するし、男性にもその傾向多い。

眉毛、まつげ、鼻毛のような明確な役割があるものは大事にしようと思う。しかし、退化し損ねたようなその他の**体毛**に今更、何の役割があるのだろう？　実に厄介である。汗はたまる、蒸れる、ゴムつける時には絡む。脱毛すると生え始めチクついてかなわん。永久脱毛は高価で億劫。女性でも不便が大きい。

私の子どもが小学生低学年の時、赤ちゃんはどこから生まれるかを知りたがったので、タイミング逃がさず教えようと私は意気込んだ。入浴時がいい、一緒に湯船に浸かり、私だけ立ちあがって、ここだよ、と指示すと息子は言った。「毛だらけでようわからん」と。

私の体験上、それをプラスに感じたり、歓迎したくなったことは皆無だ。脱毛が最近の常識になっているのは肯けるけることだ。男子体操選手が脱毛するようになった。

私の若い日、無毛（ハイジニーナ）は敬遠されていたが、噂では、それを好む男もいるということだった。私はそういう男と出会えたら、迷わず脱毛しようと思ったが、出会えなかった。出会えていたら感激で、燃え尽きてしまっていたかもしれない。

子どもの頃に「ずっとこのまま子どもでいられたらいいのに」と思った人は少なくないのでは？

私は強くそう思っていた。女でも男でもない妖精のように生きて、ほどなく消滅できたら本望だった。今でも私はその願望というか、憧れを引きずっている。生殖を断念してまで、**思う自分**になれた元オカマ

たちをまぶしく感じるのだ。性転換手術までして**望む自分**になれたら、もうそれで完結したのだ。子を残す必要もない。子孫を残すというのは、そういう望みを果たしえなかった人々が、果てしなく死にそこなっていく姿ではないか？　望む気力さえない人々が。

性転換手術については、まだ失敗例も多く、結果に満足できず、自殺する人までいるというが、さりとて、手術に挑戦せず、ぐずぐずと生涯終えるのは如何なものか。

さて、なにはともあれ、現実は平凡な死にそこない組に入ってしまった私は消滅もできず、願いも虚しく、乳房は情け容赦なく育ち、月経が始まった。うっとうしく思っていた女性という性別も、受け入れざるを得なくなってくる。首尾よく消滅出来ない限り、受け入れざるを得ない。男も女も嫌だが、女の方がまだましだ。思春期の私の判断はそんなところで、しかたなく女を生きていた。成人後、途中で生理がなくなっても、たいして苦にもせず。それどころか、産まずに済む、嬉しいわと内心思いながら。

血縁の親と自身への嫌悪から、結婚はともかく自分の妊娠出産を自制していた私だが、世の赤ん坊や幼児は可愛く思えることもあった。（無論、大人になってからだ。自身が子どもの頃は、赤ん坊など見るだけで嫌だった。妊娠中の女性もそう。子供が生れること自体が汚らわしいことだった）
大人になってからは、子どもを育ててみたいと時々思った。特に親に恵まれない子の親を引き受けたいと。自分一人では無理だろうから、理解ある配偶者にでも恵まれたら、という条件付きだが。私はそういう考えの持ち主だから、親子の絆に血縁という要素が大事だとは思えない。更に私は子どもが親を慕うのは「産んでくれたから」ではなく「構ってくれるから」であることを知っている。食べさせ、抱っこし、受け答えしてくれるからだ。これは断言できる。私自身の息子も幼児の頃言った。「ぼくがおかあさんを**たからもの**とおもうのは、おいしいものをいっぱいたべさせてくれるから」だと。息子が私のことを「ぼくの**たからもの**」と言うので、訊いてみた「なぜ、そう思う？」と。息子は即答した。にこにこして。「だって、おいしいもの、いっぱいたべさせてくれるやんか！」と。韓国ドラマの王子のように「自分を産んでくれたから」などとは言わない。
跡取り王子を産んで、子なし正室に差を付けた側室が、しばしば王子に確認する。
「王子よ、王子、この世で一番大切な人は誰ですか？」
まだ幼い王子は硬い表情で答える。
「母上です」
すると更に訊かれる
「それはなぜですか？」
と。それに答えて彼はいう。
「はい、わたしを産んで下さったからです」
「はい。そうです。それでいいんですよ」

このドラマを見た時、私はかつての息子とのやり取りを思い出した。全く絵にかいたようなドラマで、笑うしかなかった。現実にも、この芝居を地で行くような堅苦しい親子もいるだろう。それに比べてわが

親子はざっくばらんで何と幸せなんだろうとほくそ笑んだ。
　産んでくれたというだけでは、子どもはその親を慕いも愛しもしない。更には障害者に対する差別思想だと言われるのも覚悟して言うと、「産むだけなら、障害者でも出来る」のだ。「孕ませ、産ませる」のも、もちろん。
　障害者は知的か、身体的か、またその程度にもよるが、子の養育には向かない場合が多い。出来ない人に無理なことをさせるより、できる人にさせる方がいいに決まっている。生みの親が、出来るかもしれないなどと希望的憶測で、子どもを手放したがらない場合もあるだろうが、主眼は子どもの幸福におくべきだ。私自身の、知的障害者の親にてこずった経験から、これは切実だ。障害者でも子どもを育てられるんじゃないか、などと、子どもを実験台にするようなことは慎むべきだ。子どもの人権を主眼にすべき。それに尽きる。子どもは無能な親より、他人でも有能で自分を快適にしてくれる大人を慕うのだ。当たり前だ、健やかに育つためにはよい世話が必要なのだ。
　障害者に限らず、子どもは、それを産んだ者が育てるべきだという考えに固執すると、種族滅亡にまで至りかねない。少子化問題云々と、表面だけ悩んでいるふりせずに、本気で取り組めばこれが判ってくる筈だ。平たく言えば、婚外子（非嫡出子）、赤ちゃんポストに入れられる子、または、どこぞやに置きざりにされた子も含め、とにかくこの国に生れて来てくれた子は誰でも歓迎することだ。生みの親には産んでくれたことだけを感謝し、それ以上の期待はかけないこと。説教がましいこともご法度。国家としてそうしなければ、少子化は止まらない。その子たちの養育をどうするか、生みの親に期待せずに、子どもたちの手厚い養育をどう実現するか、真剣に考えるかどうかで、国の将来決まるだろう。…まるでこの国の将来を気遣うような書き方になったのは不本意だ。本意はそうではない。この国が滅んでも、私としてはなんてことない。滅びに向かう姿勢しかなければ、滅ぶのも当然、と言いたいだけ。この国では、ここ10 年以上、人口減少に拍車がかかり続けている。女性が子どもを産まなくなっているからだとか、男性の精子も少なくなり、弱体化しているからだとかを指摘するだけで、手をこまねいている知識人たち。政治家たちの間抜けぶりは指摘するのも恥ずかしい。10 年余り前から**内閣府特命担当大臣（少子化対策担当）**なる役職が登場し、年々少子化に拍車をかけ続けている。
　少子化を悪いことのように言うが、子沢山時代の母親の中には「産みたくて産んだのではない」と白状する人も珍しくなかった。大っぴらに言えず、はばかる人も含めたら相当数になるのではないか。女が望む子どもしか産まない時代になって、その結果が少子化なら、それはそれでいいではないか。不幸な親子が大勢住む国より、少なくてもいい、幸せな親子の住む国の方がよい国なのではないか。
　少数派の話をすれば、障害者の中にも育児に向いている人もいる。障害の程度も軽かったり、非常に器用だったりすると、健常者並みの養育ができる。それ以上かもしれない。全盲の父親が手際よく乳児のおむつ取替えをしたりする。自身が障害あるゆえに親からも差別虐待された女性が、障害者施設で知り合った同じく障害者の男性と結婚、子ども 3 人を儲けて、にぎやかに暮らしている。彼女言うには、「子供に囲まれて嬉しい。私は親に虐められてつらかった。姉や弟ばかりかわいがる親に負けたくなかった」。これには私もジーンと来たが、これらは、周囲の手厚いサポートあって初めて実現可能になる。障害者の結婚に理解ある人々、理解し、その後も育児や生活全般何かとサポートする人々の存在が不可欠だ。少数ではなく、ありふれているほど必要だ。一朝一夕に日本がそんな福祉国家になれるとは思わない。良いサポートを受けながら子育てできる障害者は、日本ではまだ一握りだろう。

ところで、人一倍子ども好きで、博愛の精神に満ちている人が、結果として、子どもと縁遠くなるということがある。子どもを持たずに暮らす人たちが、子ども嫌いや、育児嫌いとは限らず、不妊症などのせいもあろうことは、誰でも容易に推測できる。なら、もらえばいいじゃないか、と、つい、傍観者は思いがちだが、それにも大きな壁が立ちふさがる場合がある。子どもに無頓着な人ではなく、子どもに付いて、人一倍配慮深い人ゆえにそうなってしまうことがある。

友人の一人に、私より少し年上の既婚女性がいた。知り合った時、既に彼女は 60 歳近くで、リタイア生活だった。手芸や書道の趣味を楽しむ悠々自適生活に見えたので、子や孫もいると思っていたが、実際は、夫婦だけで子はいないという。

「私は子どもがいるように見えるやろ？」と自分でも言う友人。子どもの気持ちや扱いにも慣れていそうだったので、不思議だった。そのうち、付き合いが深まって、彼女のかつての職業が教職で、障害児専門のそれだったと判った。自身は何度か妊娠したが、いずれも出産には至らなかった、とも知った。「では、もらえばよかったんでは？」と私は何度か言いそうになったが、言えずにいた。言わなくてよかったと最近思うようになった。無意識のうちにでも彼女への配慮が私にあったのかもしれない。当時私は母親の介護や、息子の職業のことやで、友人のことを本腰で考えるゆとりはなかった。今、その頃よりは、かなり本気で考えられる。子どもをもらうというのは、産むよりも大変な配慮を要求されるということだ。特に、彼女のような職についていた場合は。自分が産む子なら、五体満足、障害なしの子でも、誰からも何も言われない。しかし、もらうとなれば、どうだろう？　五体満足障害なしの子をもらって手放しで喜んでいられようか？　教え子、その親たちはどう思う？　彼女は悩んだに違いない。彼女の配偶者も。

彼女夫妻が踏み切れなかったように、障害者の親を務めるのは大変だ。

私の親戚にもいる。知的障害者の独身息子を世話し続ける従兄が。私の亡母の甥っ子だ。広島県に住むが、遠い神戸へ嫁いだ私の母を気遣って、毎年、賀状をよこし、何かと情報も与えてくれた優しい男。彼の母親は私の母の妹である。彼は自分の母親の姉妹たちの中で、一人、遠い都会へ嫁いだ女性を気遣ってくれたのだろう。その彼の何人かいる息子のうち、一人が障害者。自分が生んだ息子なので引き受けざるを得ないだろうが、身体的にも毎日人工透析が必要で、旅行などまず無理。朝寝坊さえ出来ないという。男性なので、性的なケアも必要かもしれない。関東や関西ならホワイトハンズも利用できるが、広島県では、まだ無理。労働にも携わり、収入も得ていると言うが、その管理は無理だろう。

多分結婚はさせないと思うが、親の一番の気がかりは、親の自分の方が先に死ぬということだろう。

障害者と**家族としての係わり**を持つというのは大変なことだ。私は知的障害者を親に持ったが、その障害は私に責任のあったことでもなく、何より、もう済んだことだ。厳密に言えば、家族だ、父親だと因縁を付けられただけで、実は赤の他人よりも他人だった男だ。その因縁を解くのはひと苦労だったが、解いた。私は彼を肯定する為に生まれたのではない。私は、親としての彼を否定し、退治する為に生れた。

私は彼に犯された女が産み出した、彼女の分身なのだ。女の助っ人。このあたりの話になると、従兄はたじたじで、話にならなかった。

体験した父親がそもそも違う。家族の為に骨身惜しまず働き続けた大工の棟梁という父親しか体験し

ない彼には、私が体験した**父親面（ちちおやつら）下げた穀潰（ごくつぶ）し**のようなものは想像もできないようだった。骨身を削って、娘、息子を大学にまで行かせ、長生きもできず死んだ父親のことを彼は未練っぽく語ったが、私にはまぶしすぎた。カネのない私の家では弟だけが何とか大学へ行き、それも学費はアルバイトで凌ぐ苦学だった。子どもの頃に何度か会った従兄（いとこ）の父親（私には叔父）を私は今でも覚えている。顔もはっきり。その名前、どんな字かまで。温和で、頼もしそうで、この人が自分の親だったらどんなにいいだろう、と私は思った。その働きぶりや甲斐性あるなしなど、知るよしもなかったが、その顔だけでも好きだった。大好きだった。

毎年夏の帰省は我々が中学生になるころにはしなくなり、彼らとも疎遠になった。その一家の出来事にも疎くなった。何十年後かに、彼のよこす年賀に「母のグループホーム入所」の言葉を見つけた私が、要介護老人を抱える者同志として、やり取りを始めたのだ。子ども同士の頃にはろくに話もしなかった従兄だったが、年月流れ、要介護老人となった私の母の望みで、実家の現状を色々知りたいと言うと、色々詳しく教えてくれた。専らメールだった。その中で彼は、今の自分は何人もの子持ちであること、そのうち一人は早死にし、一人は知的障害者であることなども教えてくれた。先に書いた父親の死を悼む気持ちも、メールでよこしたものだ。もっと長生きしてほしかった。家族の為に朝早くから夜遅くまで骨身を削って頑張ってくれた父親だった、と。

そんな親に育てられ、その死を悲しめる従兄（いとこ）が、私は、羨ましかった。はっきり言えば妬（ねた）ましかった。そのメールを見た時もそうだったし、今もそうだ。

それはさておき、今の彼の苦労が、私をなんとも複雑な気持ちにさせる。私の苦労は思い出話になってしまい、彼のは現在進行形。障害者から被るダメージは多分、比べ物にならないくらい私の方が大きい、何と言っても子どもだったのだから、と私は思うが、彼は終りのない苦労の方が辛いと思っているかもしれない。要するに苦労の辛さは比べようがない。

子ども時代、従兄（いとこ）の家に何度も滞在させてもらったから、今度は一度ぐらい我家へも来てほしいと誘っても、逃げの一手だった。今もずっとそうだ。私のことを血のつながった父親をけなすバチあたり、ぐらいにしか思っていないかもしれない。

実際、私がその男に嫌悪しか抱かず、ほんのわずかな憐れみさえも覚えなかったか？　と振り返ると、うっかり憐れんでしまう危険はあった。自分の責任でもない病気の後遺症のために、物心ついた頃から、誰にも相手にされず、晩年はタバコと TV ドラマと喫茶店のマッチ箱集めの楽しみしかない老人を見たら、誰でもついホロリとするだろう。危険とは、妙な言い方になってしまうが、そう言うしかない。私が彼を老人ではない頃から知っており、その頃、彼がすべきことをしなかったから、そう言うのだ。親の役割を果たさぬばかりか、本末転倒な立場に子どもを追い詰めた。そんな子どもが成人して、その親を顧みることが可能だろうか？　できる人もいるだろう。しかし、それは面倒の始まりでしかない。障害者を憐れむのは、その親の役割だ。その子どもの役割ではない。子がうっかり親を憐れむのは危険だ。この基本を見失うことから役割の本末転倒が始まる。諸悪の根源だと私は思う。

従兄（いとこ）に「息子さんの結婚を考えたことある？」と訊いてみたら、どう答えるか、実際に試してみたい気

持ちは私の中にずっとあるのだが。拷問と言うものだろうか。愚問であることは百も承知だ。一緒に思い切り泣いてみたいのだが…
　逃げるなら、それで結構。私のことなど理解も想像もできなくて結構。思えば一つ屋根の下で暮らした弟でさえ、今では逃げの一手だ。破格の両親を見送った打ち上げを、体験者同志で水入らず、露骨に楽しもうと企(たくら)んでいた私を見事に裏切った。
　去る者は追わずだ。従兄にしろ、弟にしろ、まだ宗教の縛りから解かれていない。私のような無宗教ではない。

　私は今、自分を目いっぱい楽しんでいる。私の周囲で身内のようにまとわりついていた人々の正体も暴いた。多くは赤の他人だった。一時は自分の分身のように思っていた女親のことでさえ、そうだと今では思う。彼女の本心を尊重すればするほどそう思える。彼女が本気で愛した男は一人しかおらず、彼が死んだ時、彼女も死んだ。抜けがらだけで何年か生き延びてしまったが、今やあの世で彼と結ばれる彼女の念頭に、思わぬ災難でやむなく産み落とした子どもたちのことなどあろうか。子どもたちを忘れないでとさえ、私は思わない。むしろ、さっさと忘れてほしいのだ。
　私が生じた原因ははっきりしている。それに係わった人物もはっきりしている。しかし、親がいたのかと考えると、いなかったと感じる。今、私が享受する楽しみや快適さを、彼らの**おかげ**か、と訊かれると率直にそうだとは、言いたくない。皮肉をこめてなら別のこと。
　いい思いも確かにしている。しかしそれは誰かのおかげというよりは、自分が勝ちとったものだと思える。何かにつけ、甲斐性なしの親でも反面教師として、感謝できるではないか、と言う人がいる。傍観者の寝言だ。当事者だった私は言う。
「感謝出来ない。お手本にもならない大人をお手本にせずに済むほどなら子どもではない。大人だ。**反面教師**の発想自体が大人のもので、子どもには**全き教師**の発想しかない」と。
　自分の身近な大人の、良いも悪いも区別せず見習い、成長したある日、見習うべきでなかった部分を知り、排除するには人の何倍もの苦労がいる。感謝どころか、迷惑だ。以前は、それを大した苦もなくなし得たような見栄を張った私だが、もうやめた。体に悪いからだ。率直に言おう。酷い親を持ち、私は悲しかった、苦しかった。羨ましかったし、妬ましかった。現実の自分の親をもっと良い親に取り換えたかった。そもそも**親孝行**という概念がなかった。

　さて、その自由な私は、子どものときより、娘時代より、今が楽しい。おしゃべりな子ども相手の子育て中も楽しかったが、それと同じくらいの楽しさだ。その息子は、私が老母の介護を終えた時、言った。私に「あんた、あと死ぬだけやんか」と。これに腹も立たず、その言いたいところは「もう無理せんと、ゆっくり過ごし」だろうと思えた自分が嬉しかった。父親譲りの訥弁(とつべん)、ダサさは、なんともなしがたい。後日息子はその失言を悔い、詫びたが、あれやこれやの失言が減るにつれて、彼を容認する女性も現れてきたのだろう。どちらから言い寄ったのかは知らないが、ひとつ年上の彼女だという。保育士というのも、頼もしい。彼らは人の親になるのだろうか？　こんな日本で、子どもがまともに成長するわけないと思う私は、子産みを奨励も歓迎もしないが、それは口に出せない。

彼らの身体だ。私の思うようにはならない。現状の不幸な子が一人でも減るように、産むより親を必要とする子を貰ってほしいとも思うが、それも、「駆け落ちしてくれ」と逃げ腰の立場では口が裂けても言えない。苗字のことも、「彼女の姓の方が平易な字で便利」とアドバイスしておいたが、本気で受け入れるかどうか。何よりも女性側がそう思わないでは話にならない。

日本人に多いのは、人の親になるに際して、執拗に血縁にこだわる人々。特に男性に多いようだ。年配とは限らず、若い世代にも。彼らに特徴的な発想は女性に**子を産ませる**という発想。

悲しいことには、女性を子どもを産む道具だとしか考えない男性がまだいる。若い男性の中にそういうのが、まだ。2018 年 10 月のことだ。

彼女にプロポーズしたら、子供も産めない体だと告白された。3 年も付き合って今更かと腹立たしい。彼女の家族ぐるみで騙していたのか、慰謝料請求したい。

という主旨の相談が、あるサイトに投稿された。私はこの女性の正直さに呆れたり気の毒になったり、一方、この男、自分が種（たね）なしではないという自信、保証でもあるのか？と、その傲慢さ、思いやりのなさを腹立たしく思った。夫はわらった。

「この男、何歳か知らんが、彼女に手もつけず、3 年も、よう我慢したな。サッサと関係深めといたら、そういう話も出とるやろに。これだけ正直な女やったら、男がゴムつける時、言うやろ。『それ、あたしには、無意味』とか。そういうこともなしで引っ張ったんやから、女はプロポーズの時しか言うチャンスないわ。それ以前の、いつ言えというんや？」

なるほど。その意見も参考にして、あれこれ回答を考えていたが、うまくまとまらず、ある朝、見ると、ベストアンサーが出ていた。

女は子どもを産む道具ではありません。あなたは彼女を一人の人間として愛していなかった。そういうことですよね。
慰謝料は、そういうあなたに傷つけられた彼女が請求していいと思います。
あなたが請求するなんてお門違いもいいとこです。

私はこの意見に、本当にその通りだと、留飲を下げた。

それから数年後の今日（2023 年 8 月）、そのサイトを久しぶりに覗いてみた。

この回答の少し後、同じ質問者と思しき人から、次のような報告と礼状が来ていた。その主旨は、

彼女から離れたくない やっぱりよく考えてみれば，俺には彼女しかいない この 3 年間も時間の無駄だったなんて思えないし，彼女のいない人生なんて考えられない 。…みなさまにはいろんな意味で勇気をいただけました 子供を作る方法は一つじゃないし，代理母出産などもあります 彼女と結婚する決心がつきました これから幸せになろうと思います ありがとうございました！

私は驚いた。彼は変わった。その変化を知らずに過ごしてしまうところだった。ふと覗きたくなってよかったと嬉しくなった。更に嬉しいことに、回答者にも素晴らしい人がいた。

そのベストアンサーの概要は、こうだった。

結論は最終的にあなたが決めることで、もう結論も出たようですが、「嘘をついている」「騙した」というなら、付き合う時点であなたが「結婚するなら子供が欲しいけどあなたはどうか？」と確認していなければ、嘘をついたことにはならないです。…
…世間一般的に結婚には経済力が付随するように、子供も付随するものでしょうが、…ただ、今後は「一般的にはこうだろう。相手も分かっているだろう。分かってるだろうから、何かあったら言ってくるはず」ではなく、一々言葉にして確認取った方がいいです。
結婚生活でも「そうだろうという思い込み」のラインが両者で違っていて、トラブルになることはよくありますのでね。

なるほど、人生経験豊かな人らしい。何事にも、誰にも必要な心得である。
これら登場人物が、実在の人であることを願う。言葉遣いのややギクシャクしたところをみると、実在の、我々同様の人々と思えて、親しみが湧く。

親が笑われる　　　　2018年　7月

「親が笑われる」と、よくカズエは言いました。私にしつけ的なことを言う時に。「食べるとき肘をついてはいけない、敷居や畳のへりを踏んではいけない、あんたがそんなことしていたら親の私が笑われる」という具合に。
それに因んで、ふと思い出すことがあります。カズエは新婚の頃、トシローと里帰りした時、学友だったノブオ君の母親から言われたそうです。「あんたの婿さんは，ありゃ、どうしたんじゃ？」と。当時、うぶなカズエはとっさに返答できなかったそうですが、今にして思えば「私も困っとる、何とかならんか」と言えばよかったと言います。
それにしても、ノブオ君のお母さん、正直な方ですね。「あんな婿よりは、うちの息子の方がよほどまし」と思われたかなとも想像してしまいます。多くの人はトシローを見て、同様に感じても言わなかったでしょう。その親を笑うだけで。笑われていたと思います。「あの夫婦、娘をなんという所へ嫁がせたんだろう！　捨てたも同然、なんという親だろう！」と。
トシローの親も多分近所からは笑いものになっていたと思います。「あんなボンクラに嫁とるなんて！」と。トシローをよく知っている人ほどそうだったでしょう。でも、やはり表立っては言わないでしょう。他人に余計なお節介やいている暇はないから。ごく少数の、正直すぎる人以外は言わないのです。
カズエの嫁ぎ先のご近所さんの中にも正直な方がいて、カズエに「あんた、なんでこんな所におるの？」と訊いてくれたといいます。でも、気遣ってもらったとしても、「親に捨てられたから」「騙されたから」

とは言えないのです。カズエは自分ではそんな気がしても、尚、「まさかそうじゃなかろう、何か親にも深い配慮があってのことだろう」と懸命に思うようにしていたと言います。底なしバカと私は思いますが、貧困生活で脳みその栄養も足りず、封建的な道徳や教えやで縛られていた時代の女性なら無理もないのでしょう。この女たちの習性を利用して、オヤジどもはしたい放題でした。

カズエの親にしろ、トシローの親にしろ、わが子を幸せにしたいという気持ちはみじんも見られません。ただただ厄介者を片づけたい、自分らの見栄や体面を取り繕いたいという意図しか読み取れません。

トシローの父だけでなく、母の方にも我々は殆ど親しみを覚えませんでした。失敗作の長男を見るに忍びなかったのか、我々の家にはほとんど居付かず、娘たちの嫁ぎ先等を転々としていました。時々家へ帰って来るとき、口癖のように「ここは陰気や」と言いました。私から言わせたら「陰気なのはあんたの方や」でした。うっとうしい顔と独特の臭気と共に帰ってくる婆さんは、その息子と同様の鼻つまみ者でした。

この婆さんに可愛がられたり、何かもらった記憶が私にはほとんどありません。弟も「逆さにしても鼻血も出ん」という、この婆さんオハコのセリフを覚えているだけだと言います。私は小学生になるかならずかの頃、一度だけ、うどんを食べに店へ連れて行ってもらったのを覚えています。私の食べ方に文句をつけ、「うどんはそんなにちょろちょろ食べるもんちゃう。こう、ガバッと、豪快にかき込んで食べるもんや、などとけしかけられ、私は熱いうどんと悪戦苦闘、味などさっぱりわかりませんでした。以後うどん嫌いになりました。やはりその頃でしょうか、自宅の食卓で夏ミカンか何か、大きくて子供にはむきにくい果物をむいてもらったこともありますが、そのむき方がぐしゃぐしゃで、汚らしく感じたものです。

汚らしく不快に感じるということは即、それと相性が悪いということです。我々母子はトシローとも、その親兄弟とも相性が合わなかった、合わずじまいでした。

トシローはカズエに体を要求する際、しばしば「汚らしそうにするな」と言ったそうですが、これまた知的障害者ならではの発言だと思います。多くの正常な男は、相手に汚らしそうなそぶりをされるだけで、萎えてしまうのです。

仮にトシローが脳膜炎後遺症もない正常な人間であっても、この、相性というのは大して変わらなかったと思います。というのも、脳膜炎や兵役のダメージを受けていないトシローのきょうだい達にも我々はそんなに好印象はもてなかったからです。病気や兵役の影響もないのに盗癖やうそつきの一族とはどういうものでしょう？
そっちの方がよほど始末悪いではありませんか。

それより何より、私は自分自身が汚ならしくてたまりませんでした。タバコ臭い不衛生な環境で、鼻や咽をしょっちゅう患いました。鼻づまりや咳で、家でも学校でも言いたいことの何分の一も言えませんでした。体力も劣っていて、友人たちの元気さにいつも圧倒されました。劣等感に押しつぶされ、寝る時にはもう朝など来てほしくないと思いました。時たまぐっすり眠れて目覚めた朝は、言いようもなくがっかりしました。「ああ、また起き上がって学校へ行かなあかん。あのままずうっと眠っていられたら、どんなによかったろう」と。

カズエはそんな私のことを意にも介さず、「陰気な子供らしくない奴」と言いました。悔しいことに、私は反論する元気もなく、ふてくされるしかありませんでした。「隙間風と雨漏りだらけのうちのぼろ家をなんとかしてほしい」と言うと怒りました。「贅沢言うな」と。何かにつけ、問題の核心を突くとカンカンでした。

子供の頃から親との親密な話合いをしてこなかった人は対話の術が身についていません。人の親になり、子供から話しかけられても、無視したり、拒絶したりするだけで、子供を納得させることができません。

私がバレエにあこがれたのは衣装やステージの華やかさもさることながら、切実には、レッスン場にだったのでしょう。近所の友達のおけいこを見学に行ったことが 1 度ありました。とんでもはねてもビクともしないおけいこ場。自分の家のように床がしなったり戸がぐらついたりしない、なんと頼もしいんだろう！

小学校高学年の頃だったでしょうか、私は恐る恐る母親の顔をうかがいながら、「バレエ習いたい」と言ってみました。すると「できんことを言うな！」と怒鳴られました。「自分が、何でもしたいことさせてくれる親の所へ生まれてこい」と言われました。私は何も言えず、胸えぐられたようで、泣くことさえできませんでした。「よそへ生まれてこい」やて。この人、自分で私を産んどいて、なんちゅうこと言うんやろ…。

その後、私のやけ食いが始まり、肥満児になったことは、以前にも書いた通りです。

それから数十年以上もしてから、私はこのことをカズエに問いただしました。相手は覚えていました。言われた方がどんなに凹んだかは分かっていませんでした。

そんな、子供の心をえぐるような返答するより、させてやりたくてもできん、と泣いてくれた方が、子供にはよほど優しく、分かり易かったのです。もしくは、お金が続かんから、ちょっとの間だけでいいか？　1 年とか半年とか…。それでも親の思いやりは伝わったでしょう。「よそへ生まれてこい！」よりはよほど。

思うにカズエ自身が子供の頃、そういう言い方で色んな希望を踏みにじられたのでしょう。

看護学校志望したカズエは父親からこう言われたそうです。「婦長にならんとつまらんぞ」と。まるで子供だましのような、はぐらかされ方だとカズエは情けなかったと言います。「なれるかどうかやってみなければわからないし、もしなれず、ヒラのままでも十分なのに…肥えタゴ担がされるよりはよほど」と心の中で反論したが、例によって口に出すとぶん殴られるので、黙って諦めたのです。この頃「死にたい」と思ったそうです。

今にして思えば、カズエが 10 歳の頃、この父親が連れ合いにカネに困った話をするのを聞いた時、同情したのが間違いだったのでしょう。子供にとって親とは同情を寄せる存在ではなく、頼る存在です。自信や誇りを育ててくれる頼もしい存在であるはずです。それができない男は甲斐性なしです。先が思いやられる、できたら早く逃げ出せばよかった。少なくとも、こんな人の餌食になってはたまるか、と警戒すべきだったのです。

世の中にはあてにもならない噂や諺が溢れていて、人を惑わせます。「親の意見となすびの花は千に一つの徒（あだ）もない」これはカズエの口癖でした。それにしても、二千、三千、それ以上なら、幾つか徒花はあるでしょう。あえてそれを考えず、自分の親もためになる意見をしてくれたに違いない、と思いたかったのでしょう。

結果はいい餌食でした。親と男のいい餌食。彼らの死後でさえ、カズエは彼らのことを思い出したがらず、彼らの名を聞くたび眉をひそめます。我々子供も同様です。ただ、事態の責任の所在を知りたいので、彼らについての考察をやめないだけです。好きで思い出話をしているのではないのです。

我々は子供の頃、毎年カズエの郷里へ里帰りしました。それほど嬉しくないことでしたが、親父と離れられるのは救いでした。郷里にお住まいの方々、一度でもお気付きでしたか。子供の我々には、あなた方の幸せな家庭を見せつけられるのが酷だったことを。どのいとこも、どの親も幸せそうでした。家もしっかりしていました。帰る日が来ると、えも言われぬ暗い気持ちになりました。

ところで、カズエを産んだカメさんよ、あんたはどこまで始末悪い人なんや。私がいちばん話したかった相手なのに、私がやっと物心ついたとき、あんたはもう死体だった。黄色い顔して床に転がっていた。歳は 60 過ぎだったか。
カメという名が嫌いで、自分で別の名前をつけていたとか。いつの時代にも名前の定まらん人はいるものよ。

カメは、「鶴は千年、**亀**は万年」に因んだ命名かな。60 そこそこでは長寿とはいえなかったけど。

今では私の方がはるか年上になるほど時が流れた。話し合いたい気持ちは募る一方だが、死人に口なし、やむなく手紙を書こうと思うが、お前さん字が読めんそうや。まあ、誰かに読んでもらって。あんたの子や亭主もそっちにおろうからな。

私が誰だか判るか？　カズエの子だよ。カズエが産んだ 2 番目の娘。最初の娘は 2 歳にもならんうちに死んで、その後できた子だ。名前も知らんだろ？　試しにカズエの子の名前を言うてみい。3 人全部言うてみ。1 人も言えんのじゃない？　世の中には、孫どころか、ひ孫、玄孫の名前まで言えるばあちゃんもいるというのに。全くわれらは影薄い。

突然だが、このセリフに覚えはない？「へん、なんぼでも、ねぶれ、通らんわい」
昔、あんたがカズエのそばを通ったときに言ったセリフ。若いカズエは床に座り、針に糸を通そうと苦心していた。ぼそぼそと乱れる糸の端を、舐めてまとめ、通そうとするが、うまくいかんので、また同じことを繰り返していると、横を通り過ぎるあんたがそう言ったという。
カズエは針を持つたび、糸を通すたび、この言い草を思い出すと言っていた。「一言、『糸の先を切れ』とでも言ってくれたら、いいのに、意地の悪い人やったで」と。

私もそう思うが、さらに思うに、きっとあんた自身も、その昔、誰かにそう言われたんじゃないか？
世の中には、自分がされて嫌だったことを人にはしないでおこうとする人やら、しようとする人がいる。同じ人が気分や体調次第で、変化することもある。とはいえ、カズエはあんたに励まされたとか、かわいがられたとかの覚えがないという。あんたの亭主からは更に。
あんたは、いじわるが趣味だったの？

「そーれ！」の掛け声と共に、まだ子どもだったカズエの肩に、大人並みの穀物束やら肥（こえ）タゴやらを担（かつ）がせ続け、すっかりセムシのようにしてしまったね。カズエはその異様な肩や背中を気にして、私の背中をなでながら「あんたら、ええなあ、すんなりしとって」と言った。私が子どもの頃、風呂屋でそう言った。実際、自分の親は特異な体つきだったから、私は親を他人と見間違うことはなかった。後ろ姿でもすぐわかった、自分の親だと。ただ、生まれつきそうなのかと思っていた。成長期に、腰にズンとこたえるような重荷を担（かつ）がされ続けたせいだとは知らなかった。腰も普通じゃなかったね、うまく言えないけど、ほかの人とはうんと違って見えた。

かわいそうだよ、あれじゃ舞妓（まいこ）にもなれない。舞妓の着付けはぐっと背中を出して見せるけど、それが、こんもり厳（いか）つい背中ではサマにならん。それにしても、踊りや三味線が好きで、憧（あこが）れてたよ。習いたくてしかたなかったって。

あんたもあんな肩をしていたのか？　私の手元にあるあんたの写真は正面しか見えないのでわからんが、とてもそんな厳（いか）つさは見受けられん。学校も中断させられ、親にこき使われたと聞くけど、重たい荷物も担がされていたのかい？　時には、か？　親にされて嫌だったことは自分の子にしてはいかんよ。それもひっきりなしに。

こんなことすっかり忘れているんだろうか？　誰に何を言ったか、したか…　あんたと一度も直接話したことがないので、さっぱり気心がつかめんのよ。

カズエのすぐ上のタミエには、せっせと白米食べさせ、麦飯ばかりのカズエが羨（うらや）むと、「おまえも働きに行くようになれば食わせる」と言って、結局は食わせなかった。工場へ働きに行くようになっても。まあ、現実はそれがカズエの体や頭に役立ったらしく、白米育ちの子より元気で長生きしたが。

忘れるの？　自分の言ったこと。カズエが「うちゃ、継子（ままこ）か？」と訊いてもあんたは無言。　忘れるの？　この子を産んだのは誰か？

カズエ達姉妹は誰が見ても、みんなよく似た顔だったから、継子（ままこ）は考えにくいけど、あんた、返事はしてやらにゃいかんよ。大事な問いには。そんなあんたに育てられたせいか、カズエは返事をいいかげんにしがちだった。我々子どもが、あれこれ訊いても、ろくすっぽ答えない。答えてもこっちを向いて答えない。そんな子ども時代だった。私は。

さて、私が伝え聞いた晩年のおまえさんの至言はこうだ。「わしゃ、いーっぱい罪を作っとるから、よーう供養してくれーよ」

長男の嫁に言ったそうだ。カズエはその嫁から聞いて私に伝えた。

あー、腰ぬけたよ。世の中にそんなことを思う人がいて、また口に出すとは！

子や孫をさんざん虐め、損ない、死なせ、その子らに詫びもせず、誰かに供養してもらって自分の罪が消えるとでも思っているの？　あんたがその損なわれた子だったら、そんな人許す？

あんたに線香や花は役にも立ちそうにない。そんなもの供えても、思いあがるだけという気がする。私の指摘はそれよりいくらかマシかも。ほかの誰に宛てたものでもなく、ピンポイント、おまえさん宛のものだから。

おまえさんら夫婦が産んだ娘の一人、一番の働き手、第 4 子が私を産んだ。私以外にも何人か産んだが、私がいちばん彼女の面倒を見た。有体にいえば、手を焼いた。彼女のせいではない。あんたたちがみるべき面倒をろくすっぽみずに、彼女を放り出したので、子どもの私にそのお鉢が回ってきたの。カズエは死ぬまではあんたら夫婦を怨んでいた。95 歳まで生きたが、大してボケなかった。おまえさんらにすれば残念だろうけど、両親から受けた不当な仕打ちをきちんと覚えていた。もう二度とあんた方のような親のもとに生まれることはないだろう。卒業出来た、あんたらから。

だから、私はあんたとも縁切り出来ているのだが、一人の女として、母親として、あんたを思ってみると、色々と思いが湧き出てくる。どんな話にも出てこないほどのお粗末さ、最低の母親はどのようにして出来上がってしまうのか。あんた自身、子供の頃、どれほどひどい扱いを受けたのか。

そんなことに思いを巡らせるのは、パンドラの箱を開けるようなことかもしれん。

だからそれはほどほどにしよう。

今回あんたに言いたいのは、カズエも私もあんたら夫婦に騙されてしまうほど間抜けじゃないということだ。普通、人が自分の祖父母に呼びかける時にはあんたやおまえさんとは言わない。

言わないが、私はそうとしか言えない、その理由も解ってくるだろう、私の話を聞けば。

カメさん、一体あんたはあのカズエをどうしようとしたんだい？

嫁にやった？　冗談だろ？　見合いも形だけ、娘はうす暗い部屋で相手の顔もよく見えないと訴えたのに、あんたはそそくさと知らん顔、サッサと話を進め、結婚式当日、娘を死ぬほど落胆させたね。娘はよほど逃げ出そうかと思ったが、帰ればオヤジからビンタ食らうことを恐れ、ためらってしまった…。何と惨めな始まりだろう！　その後も何度も嫌だ、帰りたいと実家に助けを求めて来るのを、あんたら夫婦は拒絶した。親父は「もう遅い」、あんたは「どこが悪い？」とか言って。

いやはや、「どこが」じゃないんだ。カズエも言った通り「全部」なんだ。こういうことは。

あんた自身、離婚、再婚という経験あるのに。嫌な男と暮らすことの苦痛を人一倍知っていたんじゃないのか？　再婚してやっと思う相手に巡り合えたんだろう？　娘たちの何人かにも再婚の道をひらいてやったのに、なぜ、一人カズエにだけはそうしてやらなかった？　カズエが死ぬ少し前にしみじみ言っ

たことはこうだった。「あーあ、気の合う人と暮らしたかった！」
　私は、その気持ちは大事に持ち続けるようにと言っておいた。「それが人間の本来やからな」と。
　気の合う人と暮らすだけでも、もっと元気で介護も不要、ピンピンしていたかもしれん。100 歳過ぎても、オムツも要らず。嫌いな相手とはどういうことか教えようか？　相手のチンポも見たことがないということだ。私が十代の終わり頃、うっかりトイレの中のオヤジのを見てしまい、その大きさに驚いた話をカズエにしたら、こう言った。「えー！　あんたそんな汚いモン見たん？！　あたしでも見たことないのに！」
　私は子どもの頃、銭湯で、老若男女いろんな人々を見たから、オヤジのも知っていた筈だったが、幼い頃の認識と思春期以降のそれは違う。十代終り頃の私は「しぼんでいてこれか…」と思った。
　田舎育ちのカズエの方は一人用の五右衛門風呂しか経験なく、男の裸体など目にする機会もないまま嫁いできたのだろう。それで、いきなり手篭めにされ、股間に大ケガさせられたら、そのブツを厭わしがるのも無理はない。むろん股間のブツだけでなく、相手の全身どこからどこまで大嫌いで、後姿も足音も、声もしぐさもぞっとするわけだ。こんなのは、親の言いつけを守って、好きになろうたって、なれるものではない。好き嫌いは本人の権利だよ。基本的人権なんて言葉は、あんたには解らんだろうが、解り易くいえば、子どもを親の犠牲にしてはいかんということだ。親の気まぐれ、親の都合で、子を捨てたり、売ったりしてはいかんということだ。子どもは楽しむべき自分の人生も楽しめず、命が縮む。顔が曇る。自分も周りも暗くなる。その子を遠ざけ、見ずに済ますというのでは、親の値打ちもクソもないよ。
　カズエの良い人、戦死した人は諦めざるを得ないが、それを和らげてくれそうな人は探せばいただろう。あんたら親が手助けしなければ、そのとっかかりもつかめない時代じゃないか。健常な娘一人を障害者の餌食にした。異郷の見知らぬ馬の骨の餌食にし、見て見ぬふりし続けたあんた方、遠く離れた住み慣れた我が家で、さぞかしあんたら夫婦は仲睦まじく暮らしたんだろうね。
　カメさん、あんたは朝、亭主を送り出すとき、その後姿を眺めては「うちのとっつあんは結構ななあ…」と、のろけていたというじゃないか。カズエにしっかり見られていたんだよ。

　あんたの亭主テツゴローは正直に白状している。「娘を捨てた、女の子を一人捨てたなあ」と。それを聞いたあんたはまた、驚いたように娘に言ってみせる。「とっつあんが、娘を捨てたなあ、と、言うちゃったよ」
　どんな神経だ？　まさかあんたには、それほど異常な結婚とは思えなかったとでも？
　いやはや、死人に口なし、この辺が一番困るところだが、解らぬからぬことは解らぬからぬままにしておこう。なまじ、解るほどに、あんた似てきやせんかと怖いからな。

　それより何より、亭主の言葉を十分理解できなかったなら、娘に言う前に亭主に言えよ。坊主の説法を理解できぬまま、誰かにそのまま言う信徒がいるが、それ並みだ。夫婦は対話だろう、解らなければ訊けよ「どういう意味？」解れば「それダメ」と。さらには、はっきり言え、「娘を捨てるようなことは相ならん」と。

自分がそうされることを考えてみろ。娘は思う人に戦死された悲しみでいっぱいだった。自活の為に看護学校へ行こうとする健気さもオヤジは踏みにじった。その時のことをカズエは忘れられなかった。

頑固オヤジの機嫌のいい時を見計らって、おそるおそる看護学校へ行きたいと申し出たカズエに、オヤジはこう言ったという。「百姓はどうする？」カズエは内心「そんなの私の知ったことか」と思ったが、言うとビンタなので、だまっていた。オヤジはこうも言ったという。「(看護婦になるなら）婦長にならにゃつまらんぞ」と。「そんなの大変で、とても私にはムリだわ」と何とか思わせよう、諦めさせようと子供だましのような、脅しのようなセリフを並べ、カズエを落胆させたのだ。
洋裁学校へ行きたいという願いも踏みにじられた。
いずれも、カズエが勤めていた工場でもらった給料を、全部オヤジに渡さず、自分で貯めていたら、叶った希望だ。カズエが毎月持ち帰る給料袋を、このオヤジは、無言で、袋ごとひったくるように持って行ったという。
これをカズエは「自分はオヤジに**芽を摘まれた**」と表現した。「**芽を全部摘まれてしまった**」と。聞いたのは数年も前だが、余りに痛々しく、私はこの言葉を再現することもできなかった。思い出すのも苦痛だった。
カメさん、カズエはあんたにこの話はしたんだろうか？　しなかったろうね。あんたに話そうなんて思いつきもしないよ。いつも何の役にも立たないんだから。

しかしこれぐらいは想像つかんか？　成人後、間もなく、丸腰で遠い異郷へ放り出される娘の心細さ。まともな見合いも、付き合いも全くなしのぶっつけ本番。相手の男はおまえさんらから見ても酷かったんだろう。あんたの亭主テツが「娘を捨てた」というほどだから。見目形もさることながら、お頭が壊れていたんだ。脳膜炎の後遺症だとよ。カズエからも聞いたろう？　婚礼後間もなく姑が明かした。（というより口が滑った）幼児期に脳膜炎で医者もさじ投げ、死んだと諦めたのに、何日後かに見たら、生きていた、と。
そんなことは見合いの前に言うべきだし、結婚後判ったんなら、娘の親は烈火のごとく怒り、連れ戻すべきだ。
現実にはカズエはむろん、あんたら親に言いつけたが、そろってトボケて見せたというじゃないか。例のセリフだ「もう遅い」とか、「どこが悪い？」とか。カズエは必死で「どこもかしこも全部！」と訴えるのに、あんたは取り合わなかったね。他人でもしないよ、そんな仕打ち。
食いぶち減らしさえ出来たら何でもしようというわけか。孫の何人かもその調子で片付けた。ごみのように、猫の子のように。

カズエからおまえさんらへの伝言。「子を捨てるほどなら、そもそも子が出来るようなことをするな」そんじょそこらの坊主より高度な説教だろう。これに尽きる。これで、水子の供養も無用。命は生じず、間引かずに済むのだ。因みに、坊さんが、間引かれた子どもをどのように憐れんで見せ、どのようにそれが罪なことか、その親に説教しても、そういう親たちが皆無になることを本気で望んでいるだろうか。

望むわけなかろ。そんな親たちこそいい客なんだ。
　子どもの数は自分の経済力で養えるだけにとどめておくことだ。それが動物と違う人間の値打ちというものだろう。大根じゃあるまいし、やたら植え付け、チョンチョン間引きするんじゃないよ。種まき、芽を出したら、それを全部育てるのが人間。真理はとてもシンプル。そのシンプルな計算の出来ない大人が子どもを損なう。

　「銭をこいで（細かく砕いて数を増やして）使いたいのう」とか、テツが愚痴ながら、カメとやりくりに頭を痛めていたそうな。
　10 歳の頃、両親のやりくり話を、ふすまごしに聞き、気の毒に思い、「自分も早う大きゅうなって助けてあげにゃ」と思ったカズエ。成長し、実際、懸命に助けたカズエ。その娘を、捨て猫同然の目に遭わせるテツの無慈悲さは一体何なのか。生い立ちは、彼の兄たちが何人も夭折した後、何とか育った男子ということで、大事に育てられたというが、大事にされるのは男だけと思ったのか？　男は何をしても許されるとでも？
　だろう、だろう、図体も大きく、何でも殴れば解決するのだから、知性や理性を磨くチャンスもない。磨くどころか、最初から持ち合わせもない。子や孫を選り取り見取り、えこひいきするのがいけないと思っていない。野生動物にそんなのいるな。パンダは双子産んでも大きい方しか育てず、もう一方には目もくれない。タスマニアデビルは 1 度に何十匹も子を産むが、乳首の数 4 匹までしか育てない。

　そうだ、テツは人間というより、その類だ。加えて、前時代的意識どっぷりの男偏重。身を粉にして家計に貢献したカズエを無視、その一方で、孫息子を後生大事にした。「わしゃマサさえおりゃええんじゃ」と平気で言い放つ。カズエは若い頃から、そのセリフを何度か聞いたという。跡取り孫息子マサさえいればいい、娘は捨て去る。捨てた娘の、その名前もおぼつかないほど念入りに捨て去るのだ。堕されたり、裏山へ捨てられた孫たちも同様。大方は名もない、ゴミ同様のものだった。私自身もその手合いだ。テツは我々の名前さえ知らない。

　実際、我々を産んだカズエもテツから名前を呼ばれたことがない。カズエの記憶に一度もないという。カズエを「捨てたこと」を白状した時の彼のセリフも「娘を捨てた」で、しかなく、何人もいる娘の名前など、どうでもよかったのだろう。覚える気さえなかったかも。

　そのくせ　テツは死後何年かしてカズエの夢に出てきた。「わしゃ、玉ねぎの皮を食うとるんじゃ」と、物乞いするようなようすで。名前はおぼつかないが、カネの工面はよくしてくれる子だと当て込んでいたのか。ど甲斐性なし男に嫁がされ、子育て真最中で汲々のカズエに、すまなかったとも、やりくり大変かとも言わず、只々、「わしは食うに困っとるんじゃ」と訴えて来る。カズエはきっぱり言った。「うちへ言うてきても知らん！」と。それから二度と出てこなくなったという。

この話を聞かされた時には私は思い付きもしなかったが、ひょっとすると、テツが「娘を捨てた」と言ったのは、カネヅルを手放してしまった後悔の念を漏らしたのかもしれない。「子どもの中でも、とりわけよく働くあの娘を手元に置いておけば何かと心強かったのに、惜しいことをした、娘を一人捨てたなあ」という具合である。なきにしもあらずだ、甲斐性なしとはそういうものだろう。

因みにテツが当て込んでいたマサだが、ものの見事に外してくれたらしい。先祖供養をしないという。墓も放置で草ぼうぼう。カズエはこれを知り、大いに溜飲を下げた。ざまあみろ、くそおやじめ、思い知れ、とばかりに、ケラケラ笑った。死ぬ前に知ってよかった。ほんとによかった。

捨てられた小さな命の数々をいい加減にして、何のテツらの供養どころか。更に、テツが戸籍上の父親ユーキチと、実は赤の他人で、ユーキチに疎(うと)まれていたことを考え合わせたら、そっちからも爪はじき。

これについてはのちに触れる。カメさん、あんたの口の軽さで、私までがこんなことを知ることになる。ユーキチの妻アキばあさんは、たいした息子を産んでしまったものだと、カズエは言っていた。

ところで、もみ消された小さな命はその後、仮に手厚い供養を受けてもおさまらないだろう。それより、誰に、どんなやり方で、どんなふうに殺(や)られたかを具(つぶさ)に知ってもらいたいだろう。祖母カメの手にかかって母乳を断たれ、便秘で悶死(もんし)したトミコは、自分が「病気で死んだ」などということにされて納得するだろうか？　「皆(みんな)で世話し、一生懸命育てたが、病気で死んだ…」なんてきれいごとにされて。

トミコを覚えているか？　カメさん。あんたの長男の先妻の子。別れて実家へ帰ったその女性が産んだ、その産まれたてを、あんた、さらいに行ったってね。向こうではまた別の名前をつけていたかもしれないが、とにかくあんたはトミコと呼んでいた。「どんな字書くの？」と、私、うっかり聞きたくなりそう。あんた、字の読み書きできないんだったね。亭主がつけたのか？その名前。

ともかく、名前をつけたのは、その子に人権を認めたわけだ。

そうだとも、彼らはゴミでも獣(けもの)でもなかった。我々と同じ人間だった。

そうだ、カメさん、カズエがある日、何十年も前のあんたの言動を話さなければ、私はもっとあんたを買いかぶるところだった。もっとまともなおばあちゃんだったと思って。私がまだ十代だった頃だと思う。カズエと親しい近所の女性が産婦人科医院に勤めていて、カズエに堕胎の話をしたそうだ。ちょいちょいその手術はあるが、7 カ月にもなる子を堕(おろ)すのは初めてで、その頃にもなると堕(おろ)される時、泣くというのだ。

その時、カズエはあんたが自分の長女チエコの堕胎に立ち会った話を思い出し、私に話した。その昔は患者の親が立ち会うこともできたようだ。「チーの息子」と、カメは言ったというから、男児だ。

その胎児も 7 カ月だった。「（胎内から引きずりだされる時）白目をむいてわしをにらんだ、あれは怖

かったぞ」とカメが恐ろしそうに言ったという。ある時、突然言ったそうだ。カズエにすれば、なぜ自分がそんな事を聞かされるのか、わからなかったし、返答のしようもなかったという。カズエは未成年だった。長女チエコとは 10 歳以上離れていた。姉チエコは最初の結婚が破たんし、再婚で落ち着いた。その再婚に当たって、母親のカメが堕胎させたそうだ。血のつながった孫を引きずりだし、にらまれて怖かったという祖母とはどんな神経か。為すすべもない胎児の方が、祖母より何倍も怖く、痛かったろう。苦しかったろう。

　その話はその後も何度か聞いたが、何度聞いても、カメさん、あんたが子を憐れむ言葉は聞けなかった。詫びる言葉もさらさら。

　因みにカズエの妹にあたる娘（ユキコ）にも再婚させる時、堕胎させている。いやはや氷山の一角とも思えてくる。カメ自身の堕胎も私は当然疑っている。カメ 40 過ぎで生まれた末娘は堕胎しそこねた結果というから、全くの邪推でもあるまい。そんなことも、カメは本来カズエに言うべきではないのだ。「おろそうとあれこれやったが、うまくいかんで産んでしもうた。（早産で、未熟児に近いのかもしれない）じゃから、あの子は、柄（から）も小さく、髪も赤茶けて…」などと喋りまくるんじゃないよ、全く！

　その上、黙っていればいいのに、こんなことまでカズエに言っていたそうだ。

「うちは子供を 1 人も死なすことなく育て上げた」と、自慢たらしく。

　それを聞いて、私は「え？」と思った。末娘を必死で堕（おろ）として失敗し、産んでしまったというカメさん、あんたには、実に不似合いなセリフだよ。疑い深い私には、まるであんたが「成功した堕胎」を必死で隠ぺいしているように聞こえる。真実はカメのみぞ知る、だが、嘘つき女が何を言っても信じて貰えないことを知るべきだよ、カメさん。

　ウソと言えば、あんた、カズエに白米食わすといって食わさなかったことなど、かすんでしまうような大ウソをついていた。それはカズエが 90 歳も過ぎた頃、カズエの妹がよこした手紙で判った。例の赤毛の末娘。「近頃、姉さんの夢をよく見るので、気がかりだ」と言ってよこした。折しもカズエがいまだにうなされるトミコの夢で、私も動揺していた折から、「この話、この人に言わずに誰に言う？」と、迷わず言うと、全くの拍子抜け。「それは姉さんの思い違い」などと思い切りハズレな反応、傲慢な決めつけ。話し込むほど、ズレまくるので、こっちも相手を見切ったが、その時、手紙や電話は何度かやり取りした。

　その中で、カメさん、あんたのことを書いていた。カズエ 21 歳の結婚の時、妹ムツコは 12 になるかならずだ。あんたはそそくさと神戸へカズエを片づけてしまった後、ムツコには言ったそうな。「娘をあんな遠い所へ一人残して帰るのはとてもつらく、駅で別れる時は後ろ髪引かれる思いだった」

　これを読んでカズエは怒り心頭、「二枚舌とはこのことや！」と怒った。婚礼前の見合いでも、その後の別れ話でも、何の助けの手ものべず、見捨てたくせに、それを知らぬムツコの前では、何を慈悲深い母親を気取って芝居がかったセリフを垂れ流すか！

　カズエが怒るのも無理はない。見合いでの不備についても冷淡な上に、結婚後、困り切って何度助けを求めても知らぬ顔したカメを、誠実な母親とは思ってはいなかったが、こんなにウソツキでもあったのか、と改めてあんたを見直していたよ。

　ムツコの手紙にはテツゴローのセリフまで書かれていた。「娘を 1 人捨てた」。カメさん、あんたにも

言ったセリフで、こちらはあんたほどの大ウソではないようだ。小ウソとでも言おうか、玉虫色の言い草で始末悪い。それを子供のムツコは「父は、娘の嫁ぎ先をずいぶん遠く感じた故に言ったことだと思う」などと解釈したそうだ。そのムツコ、70 年後、老人になってからの解釈もそのまま。成長しそこなって老化だけが進んだのか。そもそも、カメさん、あんたの家では皆、オヤジに質問をしないのか。確認や質問、会話はないのか、それほどまでに。「それどういう意味？」と訊けば済むことじゃないか。

そもそも、この、テツの言う　捨てた　は正しくない。正しくは売ったのだ。200 円で。見合いのその席で娘に無断で結納として受け取っている。娘は知らなかった。後日、カメさん、あんたが喋るまで。

だから「捨てた」発言も真面目にわかろうとする必要なし。「200 円では安すぎた、捨てたようなもんだ」と思って言ったのか、(その金額の真相さえ受け取った本人しか知らない)、「ごじゃな娘を遠くへ追放出来た、捨てたなあ」とホッとしたのか、それともさすがに相手の男のお粗末さに気付いて、「いい男に嫁がせられなかった、娘を捨てたなあ」と思って言ったかは不明だ。
いずれにしろ、娘の幸福を考える父親なら、娘を捨てたりしないということだ。

ところで、この石頭ムツコとのやり取りで、私は、ちょっとした発見をした。

堕されそこなった胎児というものは、生れ落ちると親を怨むよりは、尊敬する傾向がある。健全な者なら、批判できることも、そうでない者にはできなくなるようだ。親への尊敬を超えて、崇拝の域にも達する。胎内では親に必至の抵抗、反抗をしたであろうのに、生まれおちた途端、豹変する。助けてくれた命の恩人、とでもいうように。

何やら支配者と被支配者の秘密を覗き見るようだ。人を支配するには、適当に壊しておくこと。健全な人間は人を批判でき、あれこれ抵抗したり、文句を言うので面倒だ。壊れた者はそれができず、只々自らの生存を感謝するだけなので、扱い易い。しかし、壊れ方が酷いほどいいというわけでもない。あまりひどいと、使いものにならんので、適当な壊れ方が大事なのだ。

親子の間に生存競争があるとすれば、堕され損なった胎児は勝利者と言えるのだろうか？

胎児に限らず、親に処分されそこなった子は勝ったのか？　親に。　抗争による欠損はあっても、生き延びはしたから、負けたわけではないだろう。しかし、手放しで**勝利**とも言い難い。勝利に付きものの喜びがない。敵に止めを刺せていないからか？

とにもかくにも、カズエは聞かされなくていいことの、たらふく聞かされ、見せられ、身に余る重荷を背負わされたまま、異郷へとばされた。カメさん、テッつぁん、あんたらがしっかりカズエの話を聞いて

やらなかったから、カズエはあんたらに言うべきことを子どもの私に言うしかなかった。あんたらはしっかりどころか、ほんの少しも聞いてやらなかった。弁舌に困るとぶん殴るだけの脳ミソ。図体だけデカイ典型的なバカ。自分と血縁だなんて、「汚らわしい」のひとことだ。テッつぁん。あんたが諸悪の根源だよ。腕力だけの脳足りん。ど甲斐性なしに加えて、わが娘で欲情満たすことぐらい屁の河童。その娘はカズエのすぐ上の姉だ。いい年頃になっても平気でオヤジの蚊帳の中へ入っていく。「気持ち悪〜」と、思いながら見ていたカズエに彼らは気付いていたか？　当時よくいた暴君オヤジの見本がそこにもいたのだ。

さて、カズエがしょいこまされた婿について、私がカズエに聞かされた話は、例えば、新婚早々、赤紙来て、婿が召集されたので、ほっと喜び暮らしていたのに、戦地から訳わからん判読不能な手紙よこし、苛立たせた。その上、しばらくしたら、死にもせずに帰ってきて、死ぬほどがっかりした、とか、里帰りに一緒に連れていくのが恥ずかしくてたまらんという話。出された料理をガツガツ腹壊すまで食い散らす。あの娘はあんな男としか一緒になかったかと思われると情けない。町を一緒に歩くのなどご免だ。見るのも嫌だ。等々。多分、カズエは思うことのほんの片鱗、口に出しただけだろうけど、残るよ、子どもの心には。普通子どもが聞かされないようなことばかりだから。

それでカズエが私に感謝してくれたかって？　ああ少しはしたろう。それと「子どもらしくない！」と、大いにけなしてくれもした。彼女は混乱してたよ。ムリもないだろ。あんたらが、カズエに、これっぽっちも親らしいことをしてやらなかったからだ。

あんたらが婿の異常さを認めなかった分、子どもの私に認めてもらおうとさえしていた。

何故あんな男とサッサと別れないのかと、子どものころから私はしばしば尋ねた。カズエの答えはこうだった。「あんたら子どもが何もわからんうちに別れていたら、きっと、どんなにいいお父さんだったろうと思うだろう。お母さん、わがままで別れたんやろうと思うやろ？」

この返答には参った。まるで子どもに男の異常さを見せつけて自分に賛同してもらいたいといわんばかりだ。そんなことが子どもの役割か？

異常な男からさっさと子どもを救い出し、遠ざけるのが母親の甲斐性というもの。心身共にふがいない男を自分の父親だと思い知ったところで、子どもに何の喜びがあろうか？　遺伝の恐怖が募るだけだ。

私が何度も説教繰り返し、あれこれ解説し、カズエはやっとこれを理解したが、つまずかせたのは親だ。親自身の無慈悲に加えて、それさえもボカしてしまうような、親についての迷信だ。

「親の意見となすびの花は千に一つの徒もない」がカズエの口癖だった。ある日、私から、「万に一つはあるだろう。億にはもっと」と言われるまで。このあと話す「トミコ事件」が他人ごとではないことに気付くまでは、カズエにとって「親」はどこまでも善良な信頼に足る存在だった。

またこれも言える。「なぜ別れないの？」という子どもの質問に、カズエが率直に「親が帰ってくるなというから」と答えていたら、ごたごたはもっと早く解決していた。知らぬ間にカズエは親を庇い、親の

せいにしないでおこうともしていたようだ。

　ところで、年月経るにつれ、カズエは亭主トシローの年金に期待が増大していく。トシローが最初の勤め先で盗みを働き、クビになった後、親戚を頼ってその再就職にこぎつけたのはカズエだ。その後も大変な思いをして、亭主のケツ叩いて働かせ続けた。中途半端に離婚して、いずれ夫に支給されるその年金をふいにしてたまるか。
　それは私にもわかり易かった。幸いなことにカズエの方が長く生き延び、遺族年金を受け取ることができた。驚いたことに、カズエも幾つも会社勤めを続けていたので、自身の年金もあったが、金額が低く、夫の遺族年金を選ぶ方が有利だったことだ。その昔、女性の給料はいかに低かったかということだ。あんなにフルタイムで働き続けていたのに…

　因みに、亭主を見送ったカズエが、まず私に言ったことは「あいつな、私に『汚らしそうにするな』言うねん、あんたどう思う？」だった。私は即答した。「汚いやん」。カズエは「そやろ？」と喜んだ。
訊かれるまでもなく、葬儀直後に私は思ったのだ。遺骨に触れたカズエに、「やめろ、そんな汚いこと」と。先祖の墓に坊主も同伴で納骨に行った時、遺骨の納まりが悪くて、カズエが指先で直した。爪の先でちょんと、はじくような触れ方だったが、私は「そんな汚い物触るな」と思った。「坊主にさせろ」と。
　思うに、人が何かを汚く感じるのは、それが自分に有害で、処理できない時なのだ。だから、その感覚に素直に従うのがいい。逆らえば命がけの大ごとになる。カズエの結婚のようなことになってしまう。
　男の死後、カズエは男の愛用のマグカップを処分し、その他、男の思い出につながりそうなものは次々処分した。

　カメさん、あんたは何の病気で死んだ？　苦しんだってね。トシローもいい加減苦しんだらしい。ヘビースモーカーだったしね、ガンだよ。肝臓からどこから、手がつけられないほど広がっていた。わが弟は、長男ということで医者からオヤジの内臓開けて見せられ、とんだ災難。気持ち悪くて何日も飯食えなくなったって。

　とにかく死んだよ、やっと。ちゃんとカズエより先に。
　カズエ 60 過ぎかな、その頃。それからしばらく 20 年足らずの間が、やっと彼女自身の時間だった。苦しんだ期間 40 年余りの半分にも満たない。まあ、ないよりましではある。失われた楽しみを取り戻そうというように、老人会に参加したり、カラオケ仲間と楽しんだり、顔つきも以前よりよほど元気そうになった。なんだ、この人、以前は、それ薬用酒や何やと体調整える為、あれこれ苦労していたのに、実は嫌な男がいなくなるだけで健康になれたんだ！　彼女だけではなく，我々子どももそうだった。葬儀でも悲しんでみせたのは親戚連中だけ。一つ屋根の下で暮らした我々は肩の荷降ろし、人心地（ひとごこち）ついた。これでやっと人並みに暮らせるとホッとした。部屋に鍵かけ回らずにすむのだ。タバコに燻（いぶ）されずに済む。何より姿を見ずに済むのだ！

その昔、子ども時代、夏休み、しばしの息抜きを求めてカズエの実家へ行っては帰る、あの苦行。しばしの休暇後、自宅へ戻らねばならないときの、いいようもない憂鬱。田舎の人はみんな幸せそうに暮らしていた。今でも忘れられないのが、実家の地を踏んだ途端、カズエが泣き始めること。懐かしい人々への挨拶もそこそこ、おいおい泣くのである。子どもの私は驚いた。忘れた頃、また夏が来て、田舎へ行くとカズエが泣き、帰る時にも泣いていたようだ。「ここを離れたくないんだ」と何となくわかってくる。ところで、私の最大の関心事はカズエの言葉使いだった。見事なバイリンガルにも思えた。その地へ帰れば、すぐその地の言葉になり、故郷の人には福山弁、私たちには神戸弁をきっちり使い分けた。

カズエの実家以外にも、幾つか親戚回りをして寝泊りもしたが、どの家も広くきれいで、しっかりしていた。こんな人たちと親戚なんだから、自分たちも幸せな筈、でも実際は違う。我々母子は口には出さないが、思いは同じだった。憂鬱の種はわが家がみすぼらしいことだけではない。そこに居座る住人なのだ。というより、そういう住人だから、ボロ屋へ家族を住まわせても、なんとも思わないのだ。子どもが自分のボロ屋を苦にして友達も呼べずにいるのに、知らん顔。まだ子どもがお腹の中にいる頃は、徹夜マージャンで散々カズエを苛立たせたこの男は、子供ができたらできたで、徹マンよりはマシと言わんばかりに、平気で次々ギャンブルにカネつぎ込むのだ。競輪、競馬、パチンコ、麻雀等々。

同じ借家住まいだった近所の子の父親は、安いうちに借家を買い取り、立派な自宅に建て直した。

さてカズエも年齢重ね、足腰弱り、介護を受けるようになった。そのうち要介護度も進み、私がこの要介護老人と同居し始めたのは 90 歳頃だった。同居の目的はカズエの目ン玉黒い内に、あれこれ訊いておこうと思ったからだ。親が死んでしまってから、あれも訊いておけばよかった、これも言っておけばよかったと悔やむ人がいる。その親が死なないまでも呆けてしまい、責任追及どころか、介護するしかなくなる場合もある。想像するだけでもぞっとする。

もし私がそんな目にあったら、介護などしないし、グレまくってしまうだろう。まさにこの人物にぶつけたいという怨み辛みを、その人物がうけとめられなくなってしまう事態は私の想像を超える。そういう時、人は犯罪や自殺に走るのではないか？

まだカズエが 1 人暮らししていた時、私は自分の子ども時代からの恨み辛みをぶちまけに行った。

それに加えて、私の不満はカズエが、私の前でこれ見よがしに、孫娘達を寵愛することだった。弟が私より先に結婚し娘 2 人生まれ、その孫たちをカズエは可愛がっていた。私の眼にも可愛くは映ったし、かまってやったこともあったが、親にも祖父母にもかまわれず、寂しい思いをしまくった自分の子供時代を思い出さずにはいられなかった。カズエは私と顔を合わせれば、こっちが訊きもしないのに、やれ昨日は孫娘がこう言ったの、どうしたのと、嬉しそうに報告する。親と車で立ち寄った時も、盛んに、おばあちゃん乗り、と小さな手で座席を指して誘ってくれるんやで。などと、でれでれ。

えー加減にせー、と私はぶち切れた。「昔ほったらかした娘の前で、嬉しそうにそれと同じ年頃の娘を可愛がる話をするな！」

するとカズエはやっと気付いたように「そうか、もうあんたは大人になってるから、ええんかと思うとった」と言った。私は大人になったといっても、成長に必要な気遣いやふれあいのないままの、時間の経

過があっただけだ。満たされないままの、子どもはしっかり今も居座っている。
　因みに、2歳離れた弟は病弱だったせいで、カズエはそっちに付きっ切り。事情は薄々分かっていても、甘えたい盛りの私はいつも「ボクちゃんだけかわいがる」と不満を言っていた。それはカズエもよく覚えていた。
「子の私への手抜きも詫びずに、孫、孫と嬉しそうにかまいまくるな！　あの子らは両親に可愛がられてるだけで十分やろ。私は親にも、じじばばにもかまわれなかったわ！」
　小学生の頃、近所の同級生がバレエを始め、私を誘ってくれて、自分もしたいとおそるおそる言った時、カズエが雷のように「できんことを言うな！」と、怒鳴ったこと。「そんなことが出来る親の所へ生まれてこい！」と追い打ちをかけられ、私はやけ食いを始め、太り始めたこと。ダメでもあんな言い方せず、一緒に泣いてくれるだけでも、私の気持ちや体はもっと変わっていただろうこと…その他、暑さ寒さも直撃のボロ家という劣悪環境で、年中快適な勉強部屋持つ子に負けない成績とってくるのに、ほめもせず、ちょっと成績下がるとボロカスになじる…
　思い出せる限り、あれこれまくしたてた。
　カズエはしょんぼりした。色々思い当たることもあるようで、詫びていたが、突然泣き出した。
「あーあ、あの婚礼の時、逃げ出して帰っとりゃよかったんや！」と叫んだ。
　初対面で嫌だと思った相手を、親の言いつけだから、とか、親せきの世話だから、などと思って無理に我慢したことを悔いているようだった。それも、その我慢が、子どもの幸せにいくらかでも役立てばまだしも、全く、子どもも幸せでなかったとわかり、愕然としたようだった。
「ニューギニアへ行きたい、ミユキさんに会いたいなあ！」とカズエは泣いた。「ミユキさんはどこですかー、　と大声で呼べば『おお、わしゃ、ここじゃ』と今にも出てきそうな気がする」と、泣き続けていた。
　私はその時、初めて血の通ったカズエを見た気がした。私が子どもの頃からずーっと能面のような、血の通わぬ顔をしていたのは、この気持ちをずーっと押し殺していたからなのだ。そういえばこの人、時々ミユキさんの思い出話するときだけは、優しい顔になっていたなあ…とも思った。
　戦死したミユキさんはカズエの中身をすっかり持ち去ってしまった。優しさ、温かさ、細やかさなどをすっかり持ち去り、我々は彼女の抜けがらだけを見ていたんだ…。私はそんな気がして自分の子どもの頃を思い出し、妙な納得をした。
　私59歳、カズエ89歳の時である。無知なまま嫁がされた自分は、**強姦**されたと言明したのも、この時だった。

　因みに、「ミユキ」とは「幸」と書くのだと私が知ったのは、これより前だったか後だったか…。ふと私がカズエに「ミユキとはどんな字？」と尋ねた時、「あんたと同じ字や」と言った。私の戸籍上の名前に使われている字。命名は男親だろう。カズエは男と余計な話をしたくなくて、私に別の名前をつけて呼び続けていたのだ。私が自分に「幸子」という名前があると知ったのは小学校へ上がる直前である。突然、私はカズエにこう言われた。
「あんたの名前は**さちこ**やで」
　子供はかなしいものだ。自動的に、「うん」と言ってしまう。きっと心の中では、いろんな疑問や抵抗が渦巻いていただろうに。「**さちこ**は筋向いの**さちこ**ちゃんの名前やんか。**さちこ**ちゃん遊びましょ、と

言ってよく遊びに行くあの子の名前やんか。なんで、私が？」とか思ったに違いないが、口には出さなかった。学校ではカズエの予告通り、私は**さちこ**ということになっていた。

　さて、要介護状態になってしまったことは、カズエにとって実に不本意で悔しいことだったようだ。何でも人一倍テキパキこなし、自分ほど偉い者はいないというような迫力で人をけなしまくり、笑っていたのに、それができなくなる…。それはカズエの本意ではなく、そうとでも思わなければ惨めでやりきれないという事情もあった。しかし、そのはったりが効かなくなる…

　その自覚ができ始めると、私に対する態度も変化してきた。それはかなり以前、80 代半ば頃から見え始めていた。

　私は息子の高校進学について学校で教師と面談後、自宅への道を急いでいた。自転車で坂を下っていた時、タクシーとぶつかり、飛ばされて膝を打った。運転手が出てきて、警察にも届けてくれ、病院で手当ても受けたのだが、自宅で待っているカズエと、ケアマネの方が気になっていた、ケアプランについて話し合う約束をしていたのだ。電話で事情を話し、陳謝し、延期してもらったが、カズエがさぞかしカンカンだろうと、びくびくしながら帰宅した。

「何をぼさーっとしとったんや！」と怒鳴られるだろうと思ったが、私を待っていたカズエはこう言った。

「（あんた）急いどったんやわ…」

　その言い方が、私を労うような、思いやる様な言い方だったので、私は拍子抜けした。え？この人、人間変わった！

　変わる要因として、息子への期待外れと、その分、娘の方への傾倒もあったかもしれない。「長男だから、当然自分が老母の面倒はみる」とハッタリかましていた男が、いざというときは何の役にも立たず、何かにつけ、近くに住む娘の世話になるという現実。気心知れない息子の嫁より、なじみの娘の方がいいという気持ち、そんなこんなで早急に、カズエの気持ちは、息子より娘の方へなびいていっていたのだろう。

　そうだ、こんなこともあった。孫娘が成長し、大学卒業前の研修か何かで、カズエの家へ何泊かさせてもらえないかと言って来た。（言って来たのは直接本人からではなく、その父親からだったらしい）カズエがまだ何とか独り暮らし出来ている頃だったが、足腰は弱り、膝も具合悪かったので、私は反対した。

「やめとき。あんたも、もう 80 も過ぎで足腰ガタも来とる。ムリしたら、ろくなことにならんで」

その忠告にもかかわらず、カズエは可愛い孫娘の為とばかりに、寝泊り食事、買い出しなどまで頑張った。後日、私はご近所さんから言われることになる。「おばあちゃん、しんどそうに足引きずって、買い物袋さげて帰ってきよった。よう、あんなお年寄りをこき使うわな、息子さんも」息子だけではない、世話してもらった孫娘本人も、階段下り上がりで息切れする老人に「おばあちゃん頑張りよ。ええ運動になるんやで」と、ぬかしたそうである。人の表情や体調を読めないバカの集まりである。こんな連中に感謝されるよりは、嫌われて、自分の体を守る方が賢明というものだ。

　果たしてカズエはその後体調ガタガタになった。それみたことかと私に言われ、それからは、私に謙虚にもなり、何かと傾注してくるようになった。

カズエの場合、足腰は弱っていたが、頭はしっかりしていたので、私はなんとかそれを維持させようと必死だった。ボケられてたまるか、と、あれこれ手を尽くした。食事や入れ歯、その他色々学び、世話したので、周囲からは面倒見のいい子だと見えただろう。
要介護老人の世話をしつつ、取り調べというのはまるで、高齢犯罪者を扱うようなものだ。因みに身内とギクシャク関係の高齢者たちは、肩身の狭い思いするより、他人からの世話の方がよくて、故意に犯罪者となる者も増えているという。さもありなん。更に言えば、高齢者でなくても、野宿や針のむしろより、刑務所がいいのだ。

さて老人介護経験者の大多数が陥る様に、私も老人虐待をした。叩いたり、つねったりである。個人的にはそんな言葉で片付けられたくない、子供時代の復讐である。相手もそれを理解していたので、仕方なく耐えていた。ケアマネや社会福祉士は今現在の老人の被害を問題にし、かつての幼児の虐待被害には疎い。老人のアザや傷跡は彼らにチヤホヤと気遣ってもらえるが、その昔の幼児の深い心身の傷は誰からも気遣われることはなかったし、今もない。
私の暴力、暴言は、ほとんど無意識に出て来た。昔、幼児期の自分の記憶が思い出されると、無力だったその頃のもどかしさを挽回しようとばかりに、今は、やせ衰えてしまった老人に仕返しするのだ。ときには小学生の時の担任の暴行を再現するようなやり口も出てきた。両手で拳骨を作り、頭を両側から挟んでグリグリ圧するのだ。教師はそれを「グリコ」と呼び、お得意のお仕置きだった。私９歳ぐらいの頃である。幼少年期に暴行にさらされると、身にしみついてしまう。苦痛と、その仕返しが。

介護は赤の他人の方がいい。今現在の老人の状態を正視できる他人が。

老人ホームもピンからキリだ。そう、カズエも入ったことがある。１年足らずだが。近所の特養だったが、酷いところだった。歩ける者もさっさと車椅子生活にし、出て来るお茶はとことん出がらし、職員たちも決して飲まない。それが神戸市の監査のある日だけマシになるというもの。まともなお茶がないかと言えば、むろんある。応接室ではきちんと普通のお茶が出て来る。
入所者の入れ歯が破損していても知らん顔で使わせ続け、オムツ取替えは枚数ケチるのか、尻はいつもかぶれてジュクジュク。そこへ、これでもか、これでもかというほど、アズノール軟膏を塗りたくる。（自宅へ連れ戻したら間もなく治った、何も塗らず）医師も看護師も必要もない薬を飲ませることが大好きで、目薬点眼は３種類を一時にドバドバ。なにしろ、体ガタガタ、頭ピンボケ老人、ばかり相手のことだから、やりたい放題。しかし全く改善する気がないのは、ここでも入所希望の待機者が何百人もいるからだ。実情知らぬは恐ろしい。私は何度も施設長に面会を申し入れたが、応じられることはなかった。
ダメ施設の見本だった。
そこからの脱出も実は容易なことではなく、さながら「アルカトラズからの脱出」並みの難業だった。何と施設の待遇が老人虐待同然であるくせに、かつての私の老人への暴行をとやかく言うのだ。施設を取り締まる市職員が出てきて私に説教する。
「お宅の場合、ご本人が自宅介護で随分ぶたれたりしていたようなので、それを考慮して優先的に入所させてあげた」などと恩着せがましく言う。「自宅の状況が改善されたのを確認できるまで退所は認めら

れません」とも。施設や市の職員との面接では私の夫も同席したが、彼はその市職員にかみついた。「その費用、あんたが払ってくれるのか？」すると、「いいえ」。ええかげんにせー、である。
　消費者センターやその他相談窓口で色々学んだら、特養（特別養護老人ホーム）入所には、普通の「契約入所」と、高齢者虐待防止法による「措置入所」があるそうで、後者は公費だということだ。こっちなら、好き勝手に退所できないと言われても仕方ないが、我々契約入所者に対し、この職員、なんとも横柄、呆れたことにその上司も同様だった。契約入所と措置入所の区別もつかない、お粗末すぎて話しにならない。

　入所契約の時にそのようなことを何もきかされていない、こちらとしては運よく入れたとしか思っていない。優先して入所させたことを理由に退所の自由の制限をしたいなら、契約書にも重要事項として明記しろ。してないのは違法だ、契約自体を解約しろ、と凄んで、出てきた。破損した入れ歯を黙って使わせていたり、介護どころか、老人を危険にさらしたということで、慰謝料欲しい所だ、料金など払えるか、と、最終月の請求には応じていない。
　すると施設職員、脅すような口ぶりで、「こちらには施設顧問弁護士もいる」と言う。「こちらも望む所だ、呼んでほしい」と言っておいたが、なしのつぶてである。

　介護は他人の方がいいとも言い切れない、とわかった。皆、くたびれ過ぎて、人を介護できる程の人間が殆ど実在しないのもわかった。実在するだろうが、なかなか巡り合えないと言う方がいいか。

　身内でも、要介護老人に悪感情をもたずに済んだ者が介護に携われば、いいのだろうが、現実は怨みを持つ子が携わる場合が多い。怨み憎しみは愛着の裏返しともいうから、要は気がかりなわけだ。無関心な子は全くとっかかりもできないが、無関心でいられない子は、巻き込まれてしまう。介護の渦に。

　施設のずさんさよりはわが子の世話の方が嬉しかったのだろう。カズエは喜んで帰って来た。
嬉しいと言っても、辛口娘の遠慮ないお小言を浴びせられる日々ではあるが、慣れというのは恐ろしい。また、かつて自分が八つ当たりしたことを思い出せば、仕方ない、と観念していたようである。以前のデイサービスも再開して、懐かしい顔なじみにも会え、嬉しいようだった。毎年年賀状をくれる甥っ子が、故郷の近況も知らせてくれた。久しぶりに直ぐ下の妹とも話せた。「田舎のこと、どうなってるんか、何でもいっぱい教えてな！」と私にねだるカズエは子どものように嬉しそうだった。親よりもきょうだいよりも、血も涙もある甥っ子が誰よりありがたいと喜んだ。そばに居合わせることができていたら、しっかり手を握らせてくれとせがんだことだろう。それから転倒、骨折して入院するまでの 8 カ月余りがカズエの有終の美というところだろう。

　特養へ入所間もない頃は、やせ我慢して、施設を終の棲家にしようと頑張っていたようだが、何しろ話し相手も殆どいない、いても普通の家庭で、普通に暮らした奥さん連中と話し合うわけない。寂しさつのってか、幻聴、幻覚、夜間彷徨などが始まった。私は週に 3~4 日は会いに行っていたが、短時間でもあ

り、寂しかったのだろう。好物のコーヒーや果物を差し入れにいった。そういう味覚の楽しみも切り捨てられている生活だった。「どの人もこの人も皆、夢の希望もない顔をしている」とカズエは言った。その通りだった。

ある夕方「ご本人がしきりに娘さんに会いたがっている」と、施設から電話があり、私は家事もそこそこ、あわてて行った。職員に訊かれた「ゆかこ」ってどなたのこと？と。

カズエはかなり正気をとりもどしていて、私に一緒にここへ泊ってほしいと言った。出来ないとは思ったが、職員に訊くと、やはりダメ。カズエはうなだれ、しみじみと「家を出たのが間違いやった」と言った、私は決心を固めていた。連れ戻さなければならんな、と。その後、紆余曲折を経て、やっと連れ帰ってほどなく、その施設での暴力事件が報道された。職員が入所者の顎かどこかを骨折させるようなけがを負わせたということだった。

起こるべくして起きた事件、私にはそう思えた。残念なのは加害者が実名報道されたのに、その顔が思い浮かべられないことだった。あの施設では職員に名札がなかった。わたしが不便に感じて訊いたら、「入所者を抱きかかえたりする時、名札が体に当たって、邪魔になったり、痛かったりするといけないから」という返事だった。「何たる怠慢」と私は思った。他の施設では名前を衣服にプリントしたり、柔らかい素材の名札を縫いつけたりしているのに…。

そう、そう、「施設長に会わせろ！」と頑張っていた時、ある職員が言った。「もう何度か会っておられると思いますよ、廊下などで。その辺、よくうろうろしてますから」

名札がないというのは、都合のいいものなんだろう、向こうにとっては。

私は自分の子どもを虐待しないでおくことで精いっぱいだった。子育ては一応済んでいた。

ともかく、年齢的にも遅ればせに人の親になった私は、自分が親にされたことで、嫌だったことはわが子にはせずにおこうと懸命だった。何とかそれはできたと思う。私は息子に暴力を振るわなかった。(うっかりやった時のために、罰金制度を作り、時々はそのせわになったが)、暴言も発しなかった。話し相手にもなってやれた。普通にまともに働く夫と暮らせばそれは楽々果たせることだった。その普通の生活をしてみて、改めて、かつてのカズエや我々の異常な日々に愕然とした。

あれは生活とか、家庭とか言えるものではなかった。再就職にありついた亭主は何とか会社勤めは続けたが、盗み癖は生涯治らなかったし、タバコの煙やヤニもなくなることはなかった。カズエはそれを理由に家の掃除もろくにしなかった。そもそも家なんて言える代物ではなかった。下手に触(さわ)って、却(かえ)って、がたつかせたり、怪我したりするよりは、触らない方がまし。古い壁は落ちて来るし、柱はささくれる。間取りは悪いし、台所は土間で、食卓との行き来はその都度、履物をはいたりぬいだりしなければならなかった。その上(あが)りかまち(座敷へ上がる縁(へり))にガスコンロがあった。恐ろしいガスコンロ！

昔は自動点火ではなかった。マッチで点火するのだが、時々、ガスの出具合のせいか、**ボン！**と大きな爆発音がする。その恐ろしいガスコンロがそんな妙な所にあった。調理台のそばではない。そもそも調理台もコンロ台もなく、まな板も流し台に何か工夫して、乗せていたようだ。流し台はコンクリートのような色だった。台所もその他の作りも、収納もずさん。物の出し入れに便利なようには出来ていない。しま

いこむと出せなくなる。それを棚など増やして改善してくれるような男は誰もいない。
　そのころ、カズエの実家の台所はどうだったかな？　かまどのようなものがあったような気もする。むろん土間で、広いが何かと不便そうだった。そこで叔母の一人と居合わせていた時、叔母が私にこう言ったことがある。
「ゆかちゃんの所は都会じゃし、もっときれいで便利な台所じゃろ？」と。
　私はその時どう答えたかはっきり覚えていない。「違う」とはっきり言えなかったと思う。「ううううん」とか、否定のつもりで音声を発していたかもしれないが、どう解釈されたかは不明である。何よりもカズエのことが気になって露骨には答えられなかった。「要らんこと言わんでええんや！」と叱られることを恐れていた。何しろ、田舎へ帰るというのは、我々にとっては一息つくと同時に、見栄を張りに行くようなものだった。服から靴から帽子から、一張羅を身につけ、機嫌よさそうにしていること。これが暗黙の了解だった。カズエも、惨状をいくら告げても救済の手も延べないテツに対して対応を変えたのだろう。カズエはとっつあんに挨拶もしなかった。一度もそうしている場面を見たことがない。それどころか、彼らが相対している場面を見たことがない。

　さて、昔の自宅の話に戻ると、便所も怖かった。その頃は皆、和式汲み取り便所だが、うちはその床板が頼りなかった。子どもの私でも怖いのに、大人たちはどうだったんだろう？
「行ったところに用事がある！」とカズエはよくわめいていた。掃除をしても、しても、やりがいのない家だと諦める前のことだろうか。掃除だけではない、洗濯も、子の世話も、片付けや整理整頓も、家屋に構造的な欠陥があれば、ちっとも捗らないものである。

　貴重品が突然消えることもあり続けた。かと思えば、買った覚えもないものが置いてある。
　それで、我々が「怪しい人」に目を向けると、その人が「わしを信用でけへんのか？！」と凄む。
　信用なんか一度もしたことない。あんたを信用なんか、誰も。
　給料袋ごと失くした、とか、持ち帰っても子供だましのような数字の書き変えをしていたり、勝つ勝つと大金つぎ込んで大負けしたり、さんざんカズエを騙してきたじゃないか。
　また、これはカズエが後日明かしたことだが、警察に保護された亭主を引き取りに行くことも何度かあったという。行くと、奥からピーナツなどをボリボリかじりなから出て来る、その男の家族だというのが恥ずかしくて、消えてしまいたかった、という。

　私が 18 歳の頃、カズエのやりくりと近所の人の親切で、おくればせにボロボロ自宅が改築された。借家で、修理は家主の仕事なのに、ケチで、なかなか動かず、カズエがしびれを切らして、交渉し、実行した。その時、普通、障子やふすまでいい所を、頑丈な鍵付き引き戸にしてと頼み、大工を戸惑わせた。防犯の為である。
　改築は、住人が住まいしたままでしてくれた。私には神業のように思えた。多分貧しい我々の経費節減を考えてくれたのだろう。ありがたいことだった。

軋(きし)んだり、たわんだりしない床、傾いていない柱や建具、雨漏りしない天井、それらがどんなに日々の気分を安定させるか、私は 18 歳にしてやっと実感できた。引き戸は確かに明るさを損なったが、重苦しくても、安心できる方がよかった。

ボロ家で、盗人亭主に悩まされていた頃のカズエの八つ当たり暴言は忘れてやる方がいいのだが、私は物忘れが苦手である。ましてや記憶力抜群のころに吸収してしまったセリフはなかなか消え去らない。因みにこれらの口上はカズエオリジナルではなく、親の受け売り。後にきいてみると、殆(ほとん)どがそうだった。私を凹ませたセリフの殆どが、かつてカズエ自身が親から聞かされたセリフだった。

例えば、

「さっさとしーな！　何させてもグズい！」
「何を着せても似合わん子や」
「子供は知らんでええ」
「親に見せられんものがあるのか？」（と、勝手に日記やメモを覗きまくる）
「大人の話に口を出すな」
「後(あと)にしーな。今、それどころやないんや」（その、後(あと)が来たためしがない）
「贅沢言うな、気持ちの持ちようで、なんとでもなる」（けんかは家の設計が悪いから起こるという私の意見や、提案に答えて）
「若い時の苦労は買ってでもしろ」
「できんことを言うな！　何でも、と気前よくさせてくれる親の所へ生まれてこい！」
「〇〇ちゃん見てみーな。何でもようできる。人にできることが自分にできんわけないやろ！」等々。
「気持ちがたるんどるからしんどいんや！這(ほ)うてでも（学校へ）いけ！」

この種の罵詈雑言を浴びせられたカズエは「何くそ！」と思って強くなった、ということだったが、世の中にはそんな子ばかりではない。他人に言われたならなら「へっ！」と、気にせずに済むことでも、親に言われたら、ぐさりと突き刺さってしまう子がいる。誰よりも自分をよく知っている筈の親が言うのだから、本当なのだ、自分はダメなのだ、と落ち込んでしまう。現に私は、「もっと気前のいい親の所へ生まれてこい！」と言われた時、真正直に受け取り、一度死なないとできないな、と思った。親のくせに、自分が産んでおいてなんてことを言うんだろうとも思ったが、生れて来た自分の方が悪いのかとも思えた。どちらが悪いのか、より悪いのか、わからなくなった。
その後、時を経てわかってきたことだが、どちらも悪くない、そんな状況に我々を追い込んだヤツらが悪いのだ。その時には気づくことさえできなかったヤツらが…

強姦を結婚に仕立てたヤツらだ。

そもそも強姦されて子を産んだ女が、その子どもを健全に育てられる筈ないのだ。

さて、カズエを長年怨み続けて、このころやっと解決した件を記しておこう。私が 2－3 歳頃だったか、商店街をカズエにおんぶされて通っていた時、ある小ぶりな人形が目にとまった。欲しがったら、つねられた。負ぶわれたまま、尻だか太ももだか思い切りつねられ、泣きだすと、更に、ひねり切られるようにされて、泣き喚いた。おんぶされたままで、逃げ出すこともできない幼児をよくもまあ、つねりまくってくれたなという怨みを大人になっても持ち続けたが、口に出して言うこともなく、何十年も過ぎた。

介護中、カズエが粗相をしたのなんのと、よくカズエをたたいた。介護の煩わしさに直面しての、その場しのぎの苦し紛れか、遠い昔の復讐か、自分でもよくわからなかったが、カズエからの抗議に、私は「昔されたことの仕返しや」と答えていた。「小さい私がおんぶされたまま、逃げられんのに、なんどもつねりまくったやろ？！」と。カズエはしんみりした顔でうなずいた。「ああ、そうか」と。多分、以前にも、カズエは昔、私をそんな目にあわせてしまった訳を手短に話したことがあり、私も理解はしていた筈だ。しかしそのときのカズエの謝罪がぼやけていたのか、私の体は納得していなかった。私が指摘しなければ、つねりまくったことも忘れかけていたかもしれない。

その事情とはこうだ。トシローが勤め先で盗みを働き、クビにさせられたのを、なんとか許してもらおうと、幼児を背負って会社へ駆けつけたことがある。こんな小さい子もいるので助けて下さい、と許しを乞うたが、結局は許してもらえなかった。共犯者あるいは扇動者はうまく逃げて、トシロー1 人に罪を着せたということだ。会社が警察沙汰にもしてくれなかったので、カズエはこれを離婚のきっかけにもできなかった。涙も出ない、虻蜂取らずの、情けなさすぎる話。詳細な事情が解り、やっと私は溜飲を下げた。記憶に残っていた痛みまで和らいでいくようだった。

絶望の道中、背中の子を気遣うゆとりもなく、欲しがるものを買ってやるカネもむろんなく、私が今になって思うことは、やはり、こんな男に嫁がせて知らん顔のカズエの両親の非情さだ。

話が前後するが、思いついた時に記しておこう。

亡くなる前年だったか、カズエが私に「母親らしいことをしてやれんで、ごめんやったな」と言ったことに対して、私はきちんと答えが出せた。かなり以前から、カズエは似たようなことは言い、私はその都度、適当に応じていたように思う。「ホンマや、しんどかったで」とか、「過ぎたことは、もうええやんか」とか。しかし、それでは十分でない気がして来た。こう答えることにした。

「そんなこと思わんでいい」と。「あんたが、めちゃめちゃやったから、真犯人が判ったんや」

カズエはホッとした顔で礼を言った。実際、なまじカズエがムリにいい母親を演じることなどできていたら、私の不幸の原因、その真犯人は判からずじまいだ。それはほかでもない、カメさん、テッつぁん、あんたらのことだが、そのまた真犯人というべき人物もいるだろう。カメの学業を中断させた親やテツ

を増長させた親。どんな親でも命さえくれたら崇め奉るというのがそもそもの間違いだ。「親には従順であれ」がそもそもの間違い。それで大勢の娘が父親に凌辱され、売り飛ばされた。反省も詫びもしない親が類は友を呼んで、テツのような輩が横行する。

彼らは子どもを自分の所有物だと思い込んでいる。社交辞令的に「子どもの人権」「子どもは授かり者」などと口走ることはあっても、内心はそう思っていない。自分が作った自分の道具で、使うも壊すも自分に権利ありと信じている。意識改革は絶望的だ。

彼らの意識を探る為、ひょっとして、と考えてみた。思い切り低級なモチベーションで人の親になったのではないか、つまり、自分が親から受けた暴行を誰かに受け売りしたいから、今度は自分が親になる…。暴言、暴挙を受け売りしたくて、その対象である子を儲ける…なんともはや、やりきれないはなしだが、これが結構しっくりきてしまうのだ。彼らは暴言や暴力を暴行だと思っていない。しつけや愛の鞭などと思っているし、そう言う。親として威張りたい、彼らはこれが何よりも優先する。子どもの表情など二の次なのだ。これが最優先されるべきなのにもかかわらず。

ところで、テツの横暴は親からの暴行によるとは思えない。親にこき使われたカメはそうでも、テツが虐待されたとは考えられない、ネグレクト（育児放棄）はありうる。血も心も通わぬ父親に疎んじられ、家伝の何をも伝授されず、飼われていただけ。なるほど、一種の虐待だ。子供の心を読める親になれる可能性は極めて低い。

さて、話を戻して、私がカズエと同居してまだ日も浅い頃のこと、カズエが見た「**トミコの夢**」についての話。**トミコ**、私が聞いたこともない名前だった。

聞けばその昔、カズエの兄（カメの長男）が初婚の嫁と別れた。その女性が実家で産んだ子だった。実家は裕福で、そのまま女性に任せた方が子は順調に育ったであろうのに、カメがその子を引きとりに行った。確か、その時代の法律では、離婚したら、子供は父の戸籍に入ることになっていたようだから、無茶とも言えないが、それは父方で乳母や養育係をきちんと準備できる場合のことで、それができもしないのに、子を引きとるのは子を殺すようなものだ。

カズエによれば、カメさん、あんたはその見本で、とにかく相手から養育費を請求されることだけを恐れて、がむしゃらに子をさらいに行ったのだろうということだ。常々見慣れている人物が何を思うかはすぐ判るようだ。カメという女はカネの計算第一、赤子を見ても、血を分けた孫、などという気持ちはサラサラ湧かないようで、これが子沢山族に時々見受けられる現象で、恐れ入る。

カメにすれば、珍しくもない数多孫子の一人だが、先方にすれば大事な一粒種である。ましてや、乳離れもまだ遠い先の産まれたての嬰児。

その赤子を、何の話し合いも、時期的な打ち合わせもなく、いきなり連れ出そうとするカメは、その実母や祖母から、「あんたは鬼のようなことをする！」と非難されたという。それも聞かず、さらって帰ってきたカメは、カズエに「あんたは鬼のようなことをする人じゃ、と相手から言われた」と言って赤子をカズエのそばに置いたという。カズエはそう言われたなら返せばいいのに、と内心思ったが、十代の未熟

さもあってか、言えなかった。
　結局は、何となく子の世話はカズエの仕事みたいなことになってしまい、重湯を作ったりオムツを替えたりしたが、便秘をしたらしく、赤い顔をして、きばっていた。カズエはそれがかわいそうで忘れられないと言った。カメはただの一度も手伝いも、のぞきにさえもこなかった。カズエはトミコの夢を今でも見ると言って泣いた。育たなかった。遺体は手近かな箱（多分そうめん箱）に入れて裏山へ運ばれた。それを運ぶオヤジの後ろ姿をカズエは覚えているそうだ。カズエは泣いたが、カメもその夫も涙一つこぼさなかった。カズエの見る限り。
　トミコの実父である兄は軍属で戦地へ行きっぱなしだったので、このことさえ知らないだろうとカズエは言った。後に位牌などで存在だけ知ったとしても、実情は知らないだろう。現にカズエより年少の妹は、カメから、病死した赤子だと聞かされ、それを信じている。先にも述べたと思うが、かたくなに親の言葉信じ込み、私がカズエの若い日の出来事を話しても「そりゃ思い違いじゃろ。姉さん、お歳で認知症になって、そんなこと言うんじゃろ」などと言い放った。長年会ってもおらず、医者でもないくせに、人に病名つけるとはずいぶん偉くなったものだ、元農協職員夫人は。例の、カメに堕され損なった。赤毛の小柄な娘である。

　さて、嬰児を奪われた女性はその後、短命に終わったそうだ。乳も張ったろうに、吸ってくれる赤子もなくし、どんなにつらかったろう。
　カズエは赤子にもっと野菜汁なども与え、便秘させないようにしてやればよかったのか、などと悔いたりしていた。

　その話を聞くうち、私は腹が立ってきた。赤子に要るのは母乳だけだ。　母乳を断つから死んだのだ。「トミコが死んだ責任はあんたにはない」と断言した。当然だ。
　「カメやその亭主テツゴローの責任や。なんであんたが育てなあかんの？　筋違いやし、結婚も出産もしたことない娘にできるわけない」
　それを聞いてカズエはいくらかホッとしたような様子で言った。
　「ああ、これを言わんと死ねんかったんやな」と。
　「当たり前や、そんな大事なこと、なんでずっと今まで、黙っとったんや？」
　「ええ話やないしな…」
　「何を言うか、ええや悪いや言うとれん。重大なことや。あんたもトミコと同じ目に遭わあされたんやで。処分されたんや。嫁入りに見せかけて。だから、我々あんな酷い目に遭うたんや。家庭やなかった、あれは。自分の孫を何人も殺すような人間は、自分の子もそうするで」
　それを聞くとカズエは驚き、しかし霧が晴れたように、こう言った。
　「あー、そうか！　わるーい人じゃったんじゃなあ！」
　その後さみしそうにこう言った。「要らん子やったんやわ、私」

その時すぐにではなかったが、私はそれに反論した。
「そうではなく、いろんなことを知りすぎているので、煙たくて遠ざけたのだ」と。
それもカズエが知りたがった訳でもなく、大方は一方的にカメがしゃべるのだ。字の読み書きできない分、しゃべりまくるのか。亭主テツゴローの素性にまで言及し、彼の実の父親は同居している爺さんではなく、裏に住む男だともいう。なるほど顔もそっちとそっくりだったというからコトは深刻。

ここで、テツの戸籍上の父、ユーキチじいさんの哀歌を思い出してみよう。夕食後、寝そべって彼は歌う。
♪バカじゃ、バカじゃ、**バカトラ**じゃ、大きいばかりでチエなけにゃ、バカじゃ、バカじゃ、**バカトラ**じゃ
その歌を聞いたのはカズエだけではない。**バカトラ**とは誰のことなのか、聞き出そうとする者はいなかったが、大きいヤツは１人しかない。

大きいヤツ自身は自分がこう歌われていると知っていたのだろうか？　歌声は聞いている筈だが…

当時彼らはそんなことに気を回すゆとりもなく、子を食わせたり、娘たちを片づけることで汲々だったのか。次々嫁がせてはいけそうだが、カメによる孫の堕胎や育児放棄も知っているカズエが、何かの拍子に、近所の誰かに、喋りでもでもしたら…。日頃から、この親たちはカズエを煙たがっていたようだ。「カズは順ならん（従順でない）」と常々こぼしていたそうである。いくら思慮浅いカメでも、ちと、あの娘には喋りすぎた、要らんことをいろいろ喋ってしまった、と後悔しなかったとも限らない。
そんな心配が心の片隅にある矢先、遠い県外、兵庫県からの縁談は渡りに船。夫婦そろって尻に帆かけて娘をせきたて、花嫁衣装を着させたわけだ。結婚相手が人であれ、サルであれ、何だっていいのだ。
花嫁姿の写真は今も残っている。左側は切り捨てられ、右側の新婦だけだが。これだって不憫でたまらんから、処分しようと思う。カズエの絶望がじかに伝わってくるようで、見るに堪えない。

カメさんよ。そういうわけだ。あんたらはカズエを嫁入りさせるふりして、処分しようとしたんだろ？
初端（しょっぱな）、見合いで断られるとまずいから、薄暗い部屋で、相手の顔もロクに見させず、首尾よく婚姻届け出だせたらこっちのもん。テツは見合いのその場で 200 円の結納受取り、あとは娘に帰って来るな、来るなと言い続けたらいい。そのうち、身投げか入水（じゅすい）してくれたら世話ない…うちらは手を汚さず処分できる…まあ、泣くそぶりぐらいはしなくては…
などと心待ちにしていたのに、その娘が死にもせずに、子を産んでは里帰りしてくるので、がっかりか？　はたまた、その子のうちの１人が、あれこれカズエに入れ知恵するので、悔しいか？

広島県福山から兵庫県神戸。当時のお前さんらにすれば、おもいきり遠ざけた。遠ざけておきさえすれば、バレなくて済むと思ったか？　逆だ。近くでは判らんことでも、遠くからは丸見えになる。

悪いな、お前さんらほどの知恵では徹底したことはできなかったようだ。カズエを処分するならもっと徹底すべきだったな。手を汚さずに、など、ずる過ぎる。だまし続けるのではなく、とどめを刺すべきだった。あの胎児のように、白目むくまでな。

「みんなが私を騙したよ」カズエは言った。90 歳にもなろうかというカズエが、子どものような泣き顔で私に訴えた。

実はそれよりずっと以前に私は気付いたことがあった。この人、騙されて、騙されて、ここまできたんだな、と。まだ私が小学生ぐらいの頃だったろうか、ラジオで、何たらの懸賞の話があった。「当選者の発表は発送をもって代えさせて頂きます」と言うアナウンスに、カズエがこう言った。「ほんまかどうか、わかるかいな」と。つまり当選者に賞品を送るというのは、嘘かも知れない、とカズエは思っていたのだ。私は驚き、凹んだ。この人、誰かに期待させられてガッカリしたことがいっぱいあったんだろうな、と思った。それが身内や特に親だとは、その頃は思いもしなかった。

それにしても、そのカズエは、人を騙そうとはしなかった。自分が騙されたのだから、自分も騙してやろうということはしなかった。無知ゆえに、人を戸惑わせることはあるにしても。

その昔、カズエを守り、かばうべき身内は皆、知らんふりしてカズエを捨てた。

違いない。カズエがムリヤリしょいこまされた婿を見て、あけすけに呆れて見せたのは近所の人だけ。「あんたの、あの婿は、ありゃどーしたんじゃ？」と驚いてくれたのは近所の同級生の母親だけだった。

カズエはそれで支えられた。自分は間違っていないのだと。

そのおばさんが身近にいてくれる人なら、泣きついて行っただろう。しかし、今や遠い地の人。自分の気持ちを話す気力もなく、何も言えなかったという。

カズエの無口や話下手は、暴力頼みの親の育て方による成果だと思われる。子供のころから、対話や会話が尊重されることはなかったという。読み書きなども、もってのほか。そんな暇あれば野良仕事手伝えというわけだ。きちんとした返事をする習慣さえなかったようだ。

亭主との会話を避ける生活がそれに追い打ち掛けたらしく、私はまともに会話している大人を家の中で見たことがなかった。なじるか怒鳴るか、そっぽ向くか、そんなところだ。

おまけに、身なりはいつもみすぼらしく、髪はぼさぼさ服は着たきり。家の掃除も、してもすぐにヤニだらけになると、ほったらかし。肺病患い、しばしば、咳こんでいた。小学生の頃、参観日に来られるのがいやだった。後ろから咳が聞こえてきて、すぐうちの親だと判る。他の誰に判るでもないのに恥ずかしかった。元気できれいな親が欲しい、こんな親、嫌だとずっと思っていた。

それでも、時々、葬式か結婚式か、きれいに化粧し、着飾ることもあった。そんな時「なぜいつもきれいにしないの？」ときくと、即答、「ちょっと小奇麗にすると、あいつがじろじろみるからや！」

ギャーッというカズエの叫び声はしばしば聞いた。突然床に寝転がったまま手足ばたつかせ、ギャーッと喚く。幼い頃は、どの母親もすることかと思ったが、無論違う。今にして思えば、あれは我々子どもの

見るものではなかった。意に添わぬ男との暮らしに耐えかねての叫びは、カズエの親きょうだいが見るものだったのだ。
　それにしても、というより、それだからこそ、じじばば、我々が子供の頃、ただの一度もあの家を覗きに来なかったな。歩くと床たわみ、傾き、雨漏り、隙間風びゅうびゅうのあばら家を。近所の家では、遠い北海道やアメリカからでも、じじばばが孫に会いに来ていたというのに…
　こちらから行ったときでも、じじいは何の愛想もなかった。（婆は既にいなかった）カズエと話しているのも見たことがない。我々を歓迎するでなく、追い返す出なく，ぼーっと突っ立っていただけだ。目が合ったこともなく、手が触れた記憶もない。家は頑丈だった。柱は太く、飛んでもはねてもビクともしない床。トイレは家の中にもあったようだが、私は外のをよく覚えている。すり鉢型の穴で、し尿のようなものが溜まっていた。ちょっと違和感あった。玄関の横の端っこだけど、囲いもなく丸見え。肥タゴで運ぶに似便利だからか。
　風呂は五右衛門風呂で怖かった。そばには牛小屋、牛に覗かれ、恐怖倍増だった。

　そうそう、爺は縁側に、なすびやキュウリで作った動物を並べていた。田舎で、おもちゃを売る店も少

ないから、我々におもちゃを作ってくれたのかと私は思った。よほど後になって、それは盆の先祖のお供え飾りだと知った。我々には馴染みのない習慣だった。家に仏壇はあったが。

　その頃、子供の私はカズエの嫁入りの実情を知らなかった。知っていたらじいに訊いたのにと悔やまれる。「じい、うちのお母ちゃん。嫌な男にいきなり、でかいチンポ突っ込まれてゲロ吐いたんよ。どんな悪いことしたから、そんな目に遭わされるん？　うちのお母ちゃん」と。
　そうしたら、テツは私を「子供のくせに生意気なことを！」といわんばかりに、ぶん殴り殺したろうか？　私も**トミコ**や**チーの息子**の仲間入りだったか。あの悲しい**いとこ**たちと。

　そうだ、そうだ、じじばば、あんたらは我々一家を一度ものぞきに来なかったが、チエコさんは来てくれた。あんたが言う「**チー**」。あんたの長女でカズエの姉。カズエの親戚で何人か立ち寄ってくれた人はいたが、何かのついでに、とか、近くへ嫁入りしてきたからとかだった。そんなのではなく、わざわざ我々に会いに来てくれたのはチエコさんだけだった。
　私が小学生の頃だったか、ある夏、突然訪ねてきた。スマホもケータイもない時代、地図や交番を頼ってか、洋服に草履ばきで「前もって知らせるより、案外に（突然に）来る方がよかろうと思って」とにこやかに。多分お土産などでも喜ばせてくれたと思うが、私がよく覚えているのは、一緒に裏の銭湯へ行ったこと。当時、多分 50 代ぐらいだったチエコさんの胸はペタンコに縮み上がり、乳首だけが大きかった。子供もいたし、授乳も終えているはずだが、こんなに縮む人もいるんだ！と私は驚いた。自宅に風呂がなく、銭湯に行き慣れていたので、老若男女色んな裸体をみて、乳房も千差万別なのを知っていたが、まれに見るコンパクトさ。何より、身近に大勢見慣れている垂れ下がった胸とは大違い。授乳の役割終えた後は邪魔にならぬよう、縮み上がる、なんて便利なんだろう！　私は非常な憧れを抱いた。私もその頃になったら、あんな風になりたい、と。切望したが、結果は、なれなかった。その話はまた別の機会に…
　チエコおばさんは日帰りだったが、私はとても嬉しかった。こんなことまたあればいいな、泊ってくれたらな、とも思ったが、それきりだった。のちにカズエが言った。チエコの当時の夫がカズエの縁談に係

わったので、チエコは結婚後のカズエの苦労を知ると、それを放っておけなかったのだろう、と。
　同情はしてくれる、憐れんではくれる。しかし救い出してはくれない。誰も、いつも、お決まりのパターンだ。更に言えば、チエコさん自身は離婚も再婚もできていたのだ。

　その頃、むろん私は「堕(おろ)されたチーの息子」のことなど知らない。チエコさん自身、母親のカメが妹のカズエに自分の堕胎の話をしたことも知らなかっただろう。カメさん、あんたは何かと的を外す。言うべきことを言うべき相手に言えず、とんでもない人に言ってしまう。それだけでなく、その、言ったことさえ忘れてしまうのか？　聞かされたれた方はどんなに気が重いことか。
　多分、非識字、昔で言う文盲(もんもう)のせいも大きいのか。身の回りの出来事を起きた順に整理できず、因果関係も把握できず、だから、失敗からも何も学べず、同じような失敗を繰り返す…

　出産を少なくとも 8 回も繰り返すヒマあれば、平仮名だけでも覚えたらよかったのに…
　言うまい、言うまい、現実は、あんたはそうしなかったのだ。

　カズエの縁談についての占い。実際の見合い前にこの縁談を占い師に見てもらった、という話はカズエから何度か聞かされていた。その見立ては、「凶ではあるが、女性の方の星が強いから、（断らなくても）いいんじゃないか」と言われたという。私が知らなかったことは、それはカズエ自身が占い師を尋ね当てて聞き出したことで、親は知らん顔だったということ。私は 60 も過ぎてからそれを知った。根掘り葉掘り聞き出さねば判らぬことだらけだ。
　実に、カズエの親はカズエを産んだと言うだけ。強いて言うなら食わせはした。家畜並み。それだけで生涯感謝し続けよ、というのが当時の社会通念だったか。わが子に何も教えられず、助けられず、頼もしさのかけらもない男が家長や戸主としてふんぞり返っていたのだ。女子供(おんなこども)に振るう腕力だけは二人前という男が。娘を嫁がせるということは、娘を幸せにしなければならないことだとも知らず、こき使った後、売り飛ばすことだと思っていた大バカが。
　それにしてもその占い師、結婚を競技や博打(ばくち)のように思っていたのか？　生れて来るかも知れない子どもには何の配慮もない見立てではないか…子が生れることなど想定外？
　少しでも、子どもを思いやる気持ちがあれば、思いとどまらせただろう。こんな縁談。

　ところで、私自身の結婚についても少し触れておこう。
　そもそも子どものころから、女親のあり様(さま)を見せつけられ、自分は絶対結婚せずにおこうと思っていた。うっかりハメられ、もがいていたカズエを「結婚した女」だと思っていた。TV ドラマや映画での幸せな結婚というのは作り話で、現実はそれをした途端、女は不幸に、惨めになると信じて疑わなかった。子どもにとっては現実の自分の親の姿こそが真実で、ドラマやお話しの親は虚構にすぎない。結婚すれ

ば。出産、育児で下肢静脈瘤、歯は弱り、胸は下垂し、容色衰え、体形崩れる。それが現実、真実。防ぐには結婚しないこと。

実際私が 20 歳の頃、カズエに嫁に行けと見合いを勧められた時、「あんたみたいになるのはごめんや」と断って、カズエを泣かせたことがある。訥弁のカズエは「どの男もこんなのではない、もっとまともなのもいる」と言った。わたしにすれば、そんな雲をつかむような話、信じられる筈はない。またその頃はカズエの結婚が余りにも不本意なものだったとは知らなかった。結婚相手は自身が選んだと思っていた。

とにかく私は「結婚は人生の墓場」を確信して疑わなかった。結婚しない女性も歳とればそれなりに衰えるだろうけど、亭主や子どもに煩わされて、あんな狂乱状態になる羽目には陥らない。

年頃になって、友人達が次々結婚していくのを、恐ろしく、愚かしく感じて見ていた。羨ましいとは思えず、結婚相手が実は暴君だったり、甲斐性無しだったりして破綻すると、それみたことか、と溜飲を下げるほどだった。結婚式に呼ばれても行ったことはなかった。祝福する気が全くなかったから。

更に、好意を覚える異性に巡り合えても、その人との結婚式という場面が私をビビらせた。

その席にヤツらがわたしの**両親**として並ぶというのは耐え難いこと、特に私がオヤジに養われたなどと人々に思われるのは、想像するだけでもぞっとすることだった。そういう気持ちを、好きな相手に伝えるのは至難の技であった。

とにかくオヤジがいるうちは、話にならない。一体いつまで生きるのだろうと絶望したり、実際入院してから死ぬまでの時間と来たら、その 1〜2 週間が長くて、長くて、思い出すのも語るのも辛い。省略しよう。

とにかく、ある日やっとオヤジが死んだ。33 歳の私は相手もじっくり選ばずに結婚した。親父の死去で浮かれていた。これでやっと人並みだと。相手は誰でもよかった。というより、全くときめかない相手だった。これでよし、と、奇妙なことに、そう思ってしまった。ずっと、幸福な結婚が作り話で、嫌な生活が現実の結婚だと思い込んでいたあの思想が私を支配していたのだろう。思想どころか、真理だった、当時の私には。

加えて、カズエの助言が発破をかけた。「一度してみいな。嫌やったら帰ってきたらええんや」

自分が経験した苦しみを、自分の子にはさせない、という気概を感じ、私はしてみることにした。

結果はやはり 1 年経たずに帰ってくることになった。つくづく実感したのは、離婚するのは結婚するよりはるかに面倒だということ。でも、というか、だからこそ、しておいた方が、世渡りはし易い。全くの独身者より、重みのあるものとして扱ってくれる。あるいは気安さのようなものもある。×一同志は特に。私が次に知り合うことになる男性も×一だった。

初対面で自分の給与明細を見せる率直さが私に刺激を与えたのか、それまで何年も止まっていた生理が始まった。ほどなく、その人と結婚することになり、その後、子どもの誕生となる。私は望まなかった

が、相手が欲しがった。別れた女性との間に娘がいて、養育費も払っていた。私は、彼がいつまでもその子に引きずられないようにするためにも、がんばろうか、という気になってがんばった。
　一目見て、カズエが見込んだ男だった。父親としてはイマイチだが、邪悪さはない、との推薦で私は決断した。

　実際そういう男が父親になってしまっても、子どもに謙虚に接することで、子どもは順調に育つ。中身もないのに威張(いば)るから、子どもがぐれる。あるいはその親をマネて威張るのだ。威張らない人がいい。殴(なぐ)らず、どつかず、しばかず、怒鳴らない人がいい。そういう人と暮らせるのは楽しいことだ。

　聞いてるか、カメばあさん、カズエは娘にそういう道を開いたんだ。おまえさんとは似ても似つかぬ、鳶(とび)が鷹(たか)を産んだとはこのことだ。

　私はカズエからあんたの子供時代が酷(ひど)いものだったと聞いた。農作業や弟や妹の世話の為に、学校もやめさせられた、と。字の読み書きもできないということは、よほど年少の頃にやめたんだろう。
　あんたの生い立ちを詳しく知れば、泣けてくるようなことになるのかもしれん。あんたの薄情さや愚かさがあんたのせいではなく、あんたの親のせいで出来上がってしまったことだと知ったら…何と哀れな少女、哀れな女だろうかと…

　しかし私があんたの親になりかわって、あんたを憐れんだりはできない。順逆だよ、それは。あんたを憐れみ、救い出すのはあんたの親の役割。私は断る。私やカズエは、あんたの子孫だからね。子にとって親や先祖は憐れんだり助けたりする存在じゃない。頼れる存在でなければならんの。子は先祖のあんたらを憐れむようにはできてないの。救い出すようにも。

　色々あんたに言ってきたけど、あんた方、こんなの到底理解できないほどの重症かも…と思いもするんだ。あんたら夫婦が揃って知的障害者だったっていうこともありうる。
　つまりね、カズエがしょいこまされたあの脳膜炎後遺症の男とどっこいどっこいだったんじゃないかとも思えて来る。類は友を呼ぶっていうし。そう考えた方がむしろ疲れないよ、こっちは。
　だったら問題は飛躍する。どんな知的障害者からでも、まともな子が生まれるのだったら、その子どもを誰がどうやって養護するのか？ということ。
　カズエによれば、実父よりよほど血も涙もあったというユーキチじいさん。多分血のつながりはなかろうけど、テツよりは、よほど自分をかまってくれたという。駄菓子屋やあちこちへ連れていってくれたし、教訓めいたことも教えた。
　テツがアイスキャンデーを買ってくれたのは、南京（かぼちゃ）満載の大八車押しをした後だけだったが、ユーキチは何もしないでもおやつを買ってくれた。

ユーキチの哀歌を心にとめたのは、カズエだけだったのか？
♪バカじゃ、**バカ**じゃ、**バカトラ**じゃ。大きいばかりでチエなけにゃ、**バカ**じゃ、**バカ**じゃ、**バカトラ**じゃ

妻が自分以外の男のとの間に子を儲け（詳しい事情は分からないが）その息子を実子として育てることになったユーキチじいさん。多分夭折する自分の実の息子たちに代わって、名前だけでも継いでくれる男子として受け入れたのだろう。名前でもわかる。テツゴローは「鉄五郎」で五男なのだ。しかし、育ててみるとこいつがイマイチ。自分の血筋は途絶える、そのさびしさを補って余りあるような可愛げも、聡明さもこの息子にはない。デカイだけだ。
そういう悲哀が私には伝わってくる。

バカトラとは**馬鹿虎**なのか**ばかとら**なのか、じいさんの頭にはどの字が浮かんでいたのか、知るすべもないが、いずれにしろ、ほめ言葉ではない。

我々はその続きを歌う。
♪その**ばか**を退治できぬは、もっと**ばか**

と、でも言いたいところだが、それでは身も蓋もないし、
赤の他人であるにもかかわらず、カズエを孫娘として、かわいがってくれた親切に感謝して、
こう歌おう。

♪バカじゃ、**バカ**じゃ、**バカトラ**じゃ。大きいばかりでチエなけにゃ、**バカ**じゃ、**バカ**じゃ、**バカトラ**じゃ

♪その**ばか**をどうにもできぬは、やはり**ばか**。

ねえ、ユーキチじいさん、我々、ばかじゃなくなるにはどうしたらいいんだろうね？

カメさんにも増して、わたしゃ、ユーキッつぁんと話したくなったよ。

ユーキチじいさん

2018年7月

テツよりは利口だったようだが、惜しむらくは、その熱心な稲荷信仰。熱心すぎて、いなりのいーなり。すっかり食われてしまったことだ。
カズエから聞いた話では、じいさん、自分が60過ぎで死ぬというお告げを信じていたが、それを過ぎ

ても死なないので、**自分は生き過ぎだ**　と、断じ、自殺したという。80 を過ぎていた。猫いらずか何かの服毒自殺だったらしく、カズエは家族からではなく、近所の人の話を小耳に挟んで知ったようだ。

信じ込むというのは怖いなと思う。この話を聞いて、我々なら、先ず、吹き出してしまう。

人の寿命を言い当てようとした、イナリさんか何者か知らんが、見事に失敗したのだ。それまで、何やらご利益的なことで、じいさんを引き付け、奉（たてまつ）らせることに成功していたが、寿命については当てられなかった。**「イナリとはその程度のものだ」**と気付けばすむことだ。

60 何歳から 80 何歳の間、いくらでも考える時間あったのに、それに思い至らないというのはすごいものだ。じいさんの盲信、じいさんの信仰というものは…。

なぜ、ちょっと訊いてみなかったのだろう？　孫のカズエにでも。小さな子どもほど、そういうことはよくわかる。自分をよくかまってくれたじいさんの為に 10 歳のカズエは一生懸命考えて、きっと教えただろう、

「イナリさんにも苦手はあるよ、ハズレて幸い、じいちゃん、寿命トクしてよかったね」とか言って。

そうそう、忘れてならないのは、天子（てんし）様行列見物に連れて行ってもらったこと。カズエ 6 歳ぐらいだったというが、町まで乗り物にまで乗って行ったんじゃないかな。大通りに大勢並んで天子様（天皇を昔はそう言った）のお通りを待っていた。やっとその人が来たというので、見ようと頑張ろうとしたら、じいちゃん、カズエの頭を押さえこんで言った。「お顔を見たら、目がつぶれるぞ！」と。お辞儀の姿勢のまま行列が通り過ぎるまで押さえこまれていた。「あほらし」とカズエは思ったそうだ。「わざわざ、ここまでやってきて、目指す行列の肝心なモノ見ずに帰るって。一体何のために来たの？　」と。

じいちゃん、その昔、天子（てんし）様とか、現人神（あらひとがみ）とか言われた人物、結局は、神風も吹かせられずに、大勢の若い兵士を犬死させたよ。世界初の原爆投下実験に自国の非武装、無辜（むこ）の民をどっさり差出し、戦争負けて、人間宣言したんだよ。世にも恥ずべき宣言を。**神（かみ）改め、象徴とやらになり下がったその男は、さいごはガンで死んだよ。ケツの穴から出血しまくってね。**

我々食事中にも、お構いなく「下血（げけつ）ニュース」流されまくって、さんざんだった。

現人神（あらひとがみ）のなれの果て。それでも目覚めぬ国民は、またぞろ、その息子を担ぎあげた、天皇に。

先代と、どっこいどっこいの、お頭（つむ）の程度のその面（つら）は、どう見てもキツネかタヌキ、その辺だ。一族郎党その生き物たちに、何ができるって、繁殖だけだよ。

それをいいカネヅルにしたがる取り巻き連中が、国民の血税貪り，やりたい放題やってるよ。今もやってる、やりたい放題…

じいちゃん、死んでから気付いた？　自分が騙されていた、と言って気に障(さわ)るなら、相手を買い被っていたって。それで増長させたのよ、彼らを。相手なしでやっていけるのはどちら側？　我々の方でしょ。取引相手を必要としているはイナリや天皇。独り君臨したって、奉(たてまつ)り、貢ぐ民がいなければ、彼らの生業(なりわい)、成り立たんのだから。

貢(みつぎ)に見合う恩恵を受けたためしもないままに、またぞろ、ぞろぞろ貢ぎ続ける、そういう民(たみ)を、じいちゃん、一体どう思う？

シズの至言

2018 年 7 月

あんたの名前「シズ」だが、戸籍謄本には「シツ」とある。濁点の無い昔の表記か、ともかく我々には「シズ」で通っていた。我々の父親ということになっていた男トシローを産んだ女、そのあんたの口癖。「戦争があの子（トシロー）をあんなにしてしもた」「あの子は戦争で、あないなってしもうた」これがあんたの名言至言だ。

戦争へ行かない頃の「あの子」を知らない私に、そんなこと言ったって…？

いや、別に私に言っていたのではなかったのだろう。ひとりごとのように、自分に言っていた。

実はあんたは必至で自分のミスを覆い隠そうとしていたんだ。カズエを嫁に迎えて間もなく、うっかり喋ってしまった脳膜炎事件。「トシローは脳膜炎で死んどった。幼児期に脳膜炎になり、医者がさじ投げ、死んだと諦めたが、2~3 日して、見たら、生きとった」

生き延びはしたが、後遺症が残り、両親の苦の種となったことだろう。なぜ長男が脳膜炎（髄膜炎）にかかるようなことになったのか、子供をどんな不衛生、どんなずさんな扱いをしていたのか、いなかったのか私は知るすべもない。

私がその子の親なら、知的障害者となってしまった息子に健常者と同じ生活を強いるのではなく、その時代ではあっても、それなりの環境を整えてやる。家庭を持たせるなどとは考えもしないだろうが、あんたらはそうしなかった。私ならこの息子の世話に生涯をささげ、さらに子を産み増やすことなど考えもしないが、あんたらはそれもしなかった。その長男の後も 8 人の子を産み続けた。長男の前に生れて若死にした長女も含めると計 10 人の子の親となった。それも戸籍上の事だけだ。事実は判らん。

私が物心ついた時、もう、シズの夫というものはいなかった。伝え聞けば、カズエが嫁いで来て日も浅い内に死亡したという。往診受けた直後、苦しみだして、あっという間に死んだらしい。今でいう医療過誤だろう。カズエの疎開中に。私が生まれる何年も前だ。

シズよ、カズエの婿を産んだあんたは、夫亡き後も、長らく生き延びた。カズエの婿である長男と同居

するのが当時の習わしなのに、あんたはいつも娘の嫁ぎ先を転々とし、長男の家に居付かなかったね。時々帰ってくるあんたは「この家は陰気や」と言いながら入ってきた。誰のせい？
　亭主が長男トシローに嫁とろうという話に、あんたは何の反対もせず、罪悪感もなかったのか？
　トシローについて、あんたの口癖は「戦争であの子はあんなになってしもうた」「戦争があの子をあないした」
　最初は私もそれを信じたこともあった。でもすぐに変だと思うようになった。他でもない、あんたがカズエに言った脳膜炎の件。カズエをたまげさせたあの件だ。
　あんたの亭主はそれが漏れたとは知らぬまま死んだかもしれん。ずるさこの上ない。
　まだ、うっかり喋ってしまうあんたの方がまだマシだよ。
　でも、そのあと後悔したかも知れんね。亭主に口止めされていたろうから。

　その、ずるさこの上ない亭主に言う。「あの子は戦争に行く前から変だった。脳膜炎後遺症で十分壊れていた。でも戦争にも使えないほどの壊れ方でもなかったから、採用された」
　それでも多分、戦地での生活で壊れ方は酷くなりこそすれ、マシになるようなことはなかろうから、シズはそこへしがみついた。腹壊すまでのガツガツ食いや、その他の行儀悪さ、物覚えの悪さも、何もかも、軍隊生活のせいとしたわけだ。
　多分、カズエと同様、彼の戦死を心待ちにしていただろう。
　そういう場合に限って戦死しない。物事は思うようにはいかないものだ。

　しかし、とにかく、見たくはない。自分の失敗作を見たくない。婆（ばばあ）の本音はそんなところ。

　それはさておき、おシズ、あんた、嫁のカズエをとことんこき使ったね。
　金品もむしり取った。着物や石鹸、化粧品…使おうと思うと見当たらない。
　カズエが嫌がると、シズやその取り巻きはカズエを「水くさい」と非難。

　カズエを所帯の買い物に行かせるにも、カネくれん、カズエの所持金あてにしたそうだ。
　聞いたことないよ。日々の買い物も嫁の財布に手をつっこむとは。

　シズよ、あんたについては、あまり書き連ねたくない。あんたの息子と並んで、思い出したくもない相手だ。雑巾もフキンも区別なし、不衛生この上なかったし、悪臭まで漂ってきそうだ。
　大好きなばあちゃんになら、自分の名前をまちがって呼ばれたら、大ごとで、すぐさま言い直してもらうが、あんたにならどう呼ばれようがよかったよ。よく別人の名前で呼んでいたね。どうせこっちも返事しなかったから、なんてことないが。
　結局は、まともに私の名を呼ぶ**じじばば**など、どっちにもいなかった。男親側にも女親側にも。

　ともかく、口を滑らしてくれたことは評価しておく。謎解きの大きなヒントになったからな。

トシロー迷言拾遺　　　　　　　　　　　　　　　　　　2018年8月

トシロー、この男に関して私が今でも覚えていることは「彼より1cmでも大きくなりたかった」ということだ。それ以外にも大していい思い出はない。快・不快を＋－で表すと合計が－（マイナス）は確実。何しろ、この男の死亡は我々の安息だったのだから。それでバンザイ。もう忘れていいはずだった。

しかし、今またそれを思い出し、しかも記録したいと思うようになったのは、私にとって思わぬ収穫、勝利だと言ってもいい。

かつては、それについて、何を思い出すのも苦痛、頭をかすめるのも嫌で、振り払っていた。あいつのことを忘れることのできる薬があれば、借金してでも手に入れたいと思った。

それが、今はこうして少しでも詳しく、正確に思い出そうとしている。これは私が治癒に向かい、あるいは、治癒したのかもしれない。…治癒はともかく、勝利？……人々が勝ち負けの尺度を用いない所でも、私はしばしばその物差しを使ってしまう。有体(ありてい)に言って、それが私にはいちばん判り易いからだ。

親に関する思い出で、親を誇れる人もいれば、誇れない人もいる。更にはその親から逃げ出せたことを誇るしかない人もいる。逃れ、あるいは、打ち負かしたことを。私はこの類(たぐい)の一人である。

親に虐待されて死ぬ子供を世間は憐れみ、涙するが、その親が死刑になったという話はきいたことがない。子供のうち、殺され損ねた生き残りの子の養育係がいなくなると困るせいか、殺人犯は死刑免(まぬが)れ、生き延びる。軽微な処罰で、のうのうと。

さてまた、親に殺されそうな子が親に打ち勝ち、生き延びたら、世の中、あるいは社会は、その子をほめるだろうか？

殺されたも同然なほど、親に人生台無しにされた子が、これ以上損なわれたくないと、その親を殺したら？

社会はその子をほめない。断じて。その子は百発百中、犯罪者になる。1968年、栃木尊属殺人事件の被告を見るがいい。長年実父に強姦され続けた娘が、ある日ついに実父を殺した。

当時は「不同意性交等罪」や「強制性交等罪」の規定もなく「強姦罪」はあっても、親告罪で被害者の告訴がなければ処罰されず、被害者の負担が重すぎた。だが、それが不要の「不同意性交等罪」ができた今日でも、その罪に問う前に被害者が加害者を殺してしまえば、立場逆転、被害者が加害者、犯罪者になってしまうだろう。

ともかく、栃木尊属殺人事件当時の強姦され続けた娘の立場を想像してみよう。次のような実情だ。

「私の父親、私が14歳の頃から15年間強姦し続け、母親が咎(とが)めても聞き入れず、殺すぞと追い出しました。逃げられなかった私は妊娠し、子供まで産み育てるハメになりました。何人も。私にいい人ができて結婚しようとしても父が邪魔するんです。困ります…どうにかなりませんか」

先ずは裁判所に告訴して、そんなふうに言えばよかったのか？　仮に言ったとして、有効な手を打って

くれたのか？　裁判所が。
　この億劫で役立たずの告訴をすっとばして自ら犯人処罰に及んだ女性は、自分の方が加害者になってしまった。本来は被害者の自分が加害者、殺人犯となってしまった。女性は自首した。それでこの父娘の異常な関係が暴かれることになる。ということは、ここまでできない娘たちの実情は、発覚しないままだということだ。娘一人で、おいそれと大の男を殺れるものではない。娘がいくら体格良くても、男の協力もなければやり遂げられない。男は最期はおとなしく、逆らいもせず殺られたという。「お前にやられるなら本望だ」とか言って。首を絞めてもらったのだ。あり得ない横着の極み。ずるさの極み。
　この**被告**女性の健全さが認められ、執行猶予付判決が下されるまでには 4 年半かかった。無償で彼女の弁護を引き受けた奇特な弁護士、親子 2 代の熱意によって奇跡的に救われたのだ。更に、尊属殺人は普通殺人より重罰という古臭い法律が削除されるには事件から 30 年近くが必要だった。1995 年、刑法 200 条削除。殺人は、他人であれ親であれ同等の罪、ということで納まった。

　家父長制度の残滓とも言えるこの法律が、憲法違反で無効となって久しい今も、尚、親の「威厳」は居残り続ける。世俗の随所に。伝統、しきたり、権威等を重んじる各界に。
　とかく世間はうるさい。古臭い。子が親の記憶を有体にたどり、供述すると、きく人は眉ひそめ、「親を悪く言うのは天に唾するようなこと」と恫喝まがいのことを言う。悪く言うというより、ありのままを語っても、悪口と言われては、こちらはよけいに黙っていられない。その弊害から極力逃れ、生き延びた子供の苦労も思ってみろ、だ。親に守られ、慈しまれた子供時代しか知らない者には到底想像もつかないだろう。そんな彼らの言い草も私はよく知っている。
　「どんな親でも親は親。彼らがいてくれたからこそ、あなたがいる。先祖や親の恥になるようなことを、なぜ暴露する？」
　そういう発想が出来ること自体、彼らは、子供時代を忘れているのだ。親の恥を隠しておこうだって？　子供にはそんなゆとりはない。
　子供には「切実な必要」しかない。それを主張するから子供なのだ。親の貧しさを隠してやろうと空腹を我慢する子供は生き延びられない。親の恥になろうがかまわず、金持ちの子の弁当盗む子が生き延びる。「駅の子」と呼ばれた戦争孤児の生存競争は、親の恥を通り越して、国の恥を露呈した現実だった。
　試しに、有名無実、機能不全になり果てた親や国家に属してみろ。それらをどう言いたくなるか。
　長年の兵役で、持病の後遺症に更に拍車がかかった廃人と、一緒に暮らしてみろというのだ。ヘビースモーカーで大イビキ。それを人迷惑とも思わぬそいつと、ものの 3 日も同居できたら、大したものだ。少なくとも、人間同士の生活が可能かどうか、体験してから、言えばいい。説教まがいの寝言など。

　私の場合、きょうだい、親戚たちは屁の突っ張り。他人同然、というより、それより悪い。

他人の中には親戚連中より、よほど捌けた人もいる。トシローが健常者ではないと気付く人だ。幼少時の髄膜炎後遺症に加え、成人後の兵役体験による PTSD（心的外傷）。これではとても健常者の生活は無理だと気付き、それを言う人。トシロー自身にもその親にも。

そんな人が一人でもいてくれたらよかった。彼が嫁を娶る前に。娶ると言っても、自力で何が出来るわけでなく、近所に嫁の来手がなく、親がさらって来た田舎娘を手篭めにしたというだけだ。彼に少しでも知恵が残っていれば、自分に妻子扶養など無理だと解り、結婚を思いとどまるだろう。知恵足らずはそれができない。どころか、何とか自分も人並みに、とばかり、背伸びして「結婚」する。いっちょまえに。

わが息子の障害あることを、ひた隠しにして他人に「婿」として押し付けた父親、その後まもなくお陀仏する。騙され、さらわれ、子を産まされる嫁の悲惨は見ずじまい。その嫁が子供らばかりか亭主まで養わされるのは、知らずじまいの見ずじまい。あの世でとことん苦しめ、見下げ果てたクソ野郎。幸い、私はあんたの写真一枚見たことないよ。その面など全く知らないのがせめての救い。この世に存在したことさえ知りたくない。

さて、テーマはトシローの迷言だった。至言だった。

日常生活においても、我々は何かと彼との係わり合いは避けたかった。彼の妻子 3 人が 3 人共それについては一致していた。すると彼は言う

「あんたらは冷たい。他人さんの方がよほど情がある」

なんともはや、それはこっちのセリフだよ。呆れて返答もできずにいるこちらを見て、「言い負かした」とでも思い込むのか、態度横柄、仏頂面で棲息続ける。

親が連れて来た田舎娘を、親の言うなりに娶った男。魂胆は子供にも丸見えだった。女郎屋通いの節約だ。タダで女に触れるのは、それしかなかろ？　最初から、家族を養う気などみじんもなく、失業したらしっぱなし。嫁にケツ叩かれての再就職。その嫁が夜の生活に乗ってこんから、働く意欲も出てこんわ、などと寝言のたまう、あのトシローの口癖。

「おまえら冷たい、他人さんらの方がよっぽど情あるわ」

「ほんなら、他人さんに世話してもらえ」と言い返していた嫁。

その嫁の口癖はこうだった。

「あー、あいつには何も言うまい、受け答えもせんでおこうと思うとっても、そこにおったら言うてし

まう。ろくでもない返事しか返ってこんのがわかっとっても、ついなあ…」
　そうなのだ。我々子供も、つい、何かを尋ねてしまうことがあった。そこにいるから。なまじ人間の服を着て、おはよう、おやすみ、ぐらいは言えるから、もっと別のことも言えるのかと錯覚してしまう。それで話しかけ、結局言わなければよかったと後悔する。そんなことがよくあった。

何を訊いても尋ねても、「好きなようにせえ。どっちでもええ」

　「こっちか」と訊くと、「そうや」
　「あっちか」と訊くと、「そうや」
　「一体どっちがホンマや」と言うと
　「どっちでもええ」
　訊く嫁はかわいそうだな、と私は思った。恐ろしいな、とも。結婚などするからこうなったんや、と。
　結婚というのが、その昔、旧民法の時代には、娘たちの宿命のような義務っぽいもので、自分の意向は容れられないことが多かった。それを私は若い頃、知らなかった。娘たちの多くが性知識無しで放り出されることも知らなかった。
　そういう娘たちは、初夜（これも今ではほぼ死語だが）で驚き、戸惑い、傷つき、運が良ければ新夫に労わってもらえ、悪ければ、暴行暴言の憂き目に遭う。

　もっと悪ければ私を産んだ女のように、「なんじゃ、こいつ、脳足りんのせいか、妙なことする。変な癖あるなあ」となる。信頼はむろん信用もできず、嫌悪しか抱かぬ相手からのその行為はただ、その男の固有のビョーキぐらいにしか認識されない。
　まるっきり相手を信用しないということはそうなのだ。さらわれ、手篭めにされた娘は相手を信じなかった。「結婚したら皆、こないするんや」と言われても、信じなかった。お前だけの妙な癖や、と思うのだ。彼女は相手を嫌悪し、怨んだには違いないが、凌辱されても、死のうとするような気性ではない。加えられた苦痛ゆえに復讐を企てはしても、死んでしまおうなどとは思わないのだ、彼女の場合。自身の体は何ものにも優る武器であり、自身に宿り、自身が生みだした子供は当然自身のもの。何の、男と関係あろうか。これが彼女の思いだった。彼女にとっての自明の真理だ。

　現実にも、出産、育児のどこに男の出番があろう？　出産を手伝うのも、当時は産婆（助産師）と呼ばれる女性しかいない。妊娠の原因を知る情報などありはしない。産婦人科医などいても、手の届く存在ではない。高嶺の花、自分とは無縁なのだ。書物の類もそうそう手に入らず、そもそも平易な書きようではない。
　加えて、庶民の家には電話もない頃、郷里から遠く離れ、女親、姉などとのやり取りも困難では、監禁されたも同然である。

私を産んだ女は、子供を産んだ後、帰省し、女きょうだいなどと交わした乏しい情報で、やっと、妊娠の仕組みを知ったという。知ったというより、いやいや認めざるをえなかった。「えー？　どこの婿さんでも、夜、あんな悪さをするんか？」と。それをきいて、私は呆れたが、許した。彼女に「男のおかげで子を得た」という認識が全くなかったことは、私にとって、せめてものことだった。私より先に生まれて2歳足らずで死んだ幼女を惜しみ、悲しみ、自ら病気になりかけた気持ちもわかった。自身の唯一の分身に先立たれ、後追いしたくなるほど、明けても暮れても泣き暮らしたという。そうそう、その時彼女を更に落ち込ませた一言は、親戚の「大丈夫や、また（子は）できるわいな」だった。

こんなことを彼女がスラスラ自発的に話したのではない。彼女のそばで暮らした私が、折あるごとに訊き出し、なんとか得た断片の数々をつなぎ合わせたのだ。拒否や反発、罵詈雑言にも屈することなく、執拗に訊き出した。同居する身近な人物の顔が異様に暗ければ、気になるのが当然だろう。「よその母親たちのような明るさ楽しさが全くない、うちの母さんどうなっとるの？」が、私の探求のきっかけだった。こちらの素朴な意図にもかかわらず、相手は言う。「おっそろし！（恐ろしい）、いやらしい！子供らしない！」

近所の井戸端会議でエッチな話に嬉しがる、よそのおばさんたちとは、あまりに違う。ひとり顔ひきつらせるわが親を見れば、思うよ、「これは何？」。

そうそう、彼女だけでなく、彼女の姉までが私を咎めた。小学生だった私は、夏休み、田舎へ帰省中のある日、伯母に説教された。曰く「あんたな、あんまり問うて問うて、お母ちゃんを困らしちゃ、いけんのよ」と。つまり「あんた、あまり質問攻めにしてお母さんを困らせてはいけないよ」というのだ。私がぽかんとしていると伯母は言った。「あんたのお母ちゃんが困っとる。『うちの子が、どうしたら赤ちゃんできるの？と問うて来て困るんじゃ』と言うとる」

私にすれば、その質問ばかりを、そんなに、ひんぱんにした覚えはなかったが、あれこれ訊かれる側には、そこが一番痛い所となってしまったのだろう。（早期に性教育を受けない）子供なら、誰でも一度はするような質問を、夫婦円満な両親なら、大して苦もなく受け入れるだろう。子供にわかる説明もできるだろうが、そうでない夫婦はお手上げである。

お母ちゃんを困らすなと、伯母に説教されても、納得いかない私の顔を読みとったのか、伯母は「道端でつるむ犬」を例にして説明した。最後にこう付け加えた。「じゃが、人間さまは外ではせんの。ちゃんと行儀よく家の中に入ってするのじゃ」（それにしても、最近、そんなの、とんと見ない。野良犬が減り、ペットたちは行儀よくお家に入っているのだろう）

その時、私は小学生の何年生だったかよく覚えていないが、それは知っていた。同級生の物知り自慢の男子が、百科事典の図解を得意げに見せ、みんなにレクチャーしたのだ。翌日、ある女子生徒が言った。「うちのお母さん、そんなの絶対ウソだと言った」と。私を産んだ女以外にも、それと似た目にあった女性がいたのだろう。出来事と出産の因果関係を認めたくない女たちが。

ともかく私は伯母には「うん」と言って、その場を収めたと思う。
「そんなこと知ってるわ」とか、
「おばちゃんが知っていることを、うちのお母ちゃんは知らんのか？」
などと言って困らせることはしなかった。大人を困らせるのは、とてもいけないことらしいから。
　因みに、この伯母こそ、その昔、しばしば父親の寝床へ出向いたデリヘル娘だ。

　伯母の回答はズレていた。こちらで修正するしかなかった。問題の根本は、子供からの質問に、親が答えられないことなのだ。互いに信頼しあった上で結ばれた男女なら、自分たちの子供がその出生について質問して来ても、悪びれずに答えられる。照れたりすることぐらいはあるかも知れないが、嫌悪や不快の表情で逃げ出すようなことはないはずだ。ここが問題なのに、伯母はそこをすっとばした。本当に理解できないでいたのか、トボケる方が楽だと思ったのか。大人の側に責任あることを、子供のせいにする。「お母ちゃんを困らしちゃいけんよ」だと？　なら、子供でなく人形を置いとけ。子供は人形ではない、目も耳もき働き、脳みそもあるのだ。しかし体力がない。大きさが圧倒的に足りない。自衛本能なのか、子供は黙る。
　さて、もっと私が幼く、同級生の百科事典の図解も見ないころ、オヤジに質問したことがある。トシローにこう尋ねた。「世に中になんで男がおるのん？　赤ちゃん産むのも女。ご飯作るのも女、買い物も、洗濯も、本読んでくれるのも女やんか。男おらんでも、ちっとも困らんやん」
　すると、彼はちょっと困ったような、にやけた顔でこう言った。
　「ほな、そない思うとれや」と。
　「違うぞ、男ががっぽり稼いで来るから女が買い物できるんや」とも、言えない実情では、そうとしか言えなかったのだろう。赤ちゃんについては「幼児の浅知恵」と、笑っていたのだろう。「まだ何も知らんのやなあ」などと。自分がそれを教えるべきだとは思いもしなかったようだ。お前も年頃になれば解るわ、とばかりにトボケた。
　こういう男は彼だけでなく、ざらにいた。つまり「子供は社会が育てる」と思っている人。「親は子が死なんようにさえしていれば、それで事足りる。その他、面倒なことは、世の中から学ぶわ、放っておけ」というわけだ。

　彼の口癖の一つが、「男はべらべらしゃべるもんやない」だった。会社という隠れ蓑へ逃げ込み、その中のことは喋らん。その外のことも喋らん、教えん、もちろん、炊事洗濯、家事一切せん、で済むのが男なら、男とは、これほど楽なものはない。

　喋らないから、家族間の相互理解、意思の疎通などおぼつかない。人の顔色も読めないこの男は相手を押さえこんで、自分が得る快感を、相手も得ていると思い込んだかもしれないのだ。得ていないことが判ったら、それは相手の欠陥…愚昧、思い上がりにはきりがない。とにかく会話の決定的な欠落が彼らの特徴だ。
　女側の言い分はこう。「くたびれて眠ろうと思うとるのに、重たーいのが、どさーっと上からのしかか

ってきて、迷惑な千万。体もたんから、もうやめてくれ言うて、それから一切応じてない」
　彼らの寝床が1階と2階に分かれた日があった。男が1階、それ以外は皆2階だった。彼らがまだ40代かそこらのことだ。その頃には男に避妊もさせていたようだ。私が押し入れで見つけた小箱を、女が慌てて取り上げた。そんなものは子供の触るものではない、というように。いつだったか正確には思い出せないが、女は何度か中絶もしたと言った。苦痛でしかない付き合いの上に、避妊や中絶のわずらわしさが加わるとなれば、付き合い自体をやめたくなる気持ちもわかる。ゴム装着ひとつにしろ、男には容易ではなかったろう。それにまつわるゴタゴタも、私にはたやすく想像できる。

　とにもかくにも、女は、苦役と引き換えに子供たちという分身、味方を得たのだ。育てるにあたっても、男は邪魔こそすれ、役立つことは何もしなかった。（現に1人死なせた）男については、さっさと消え失せろ、と願うだけだったと思う。目に付くところにいればつい、用事を頼みそうになったり、顔つきが娘に似ているのかな、と気が散ったり、自分から干された男が、年頃になった娘に手を出さないかと心配になったり、よけいな気苦労をしてしまう。さっさと失せろ、この邪魔者、と。

　男はそんな女の気持ちをいくばくかでも知っていただろうか。知らないだろう。知る訳ないのだ。
　デリカシーのかけらも持ち合わせない男は、自分のおかげで子供の何人かを授かった女が、少しも自分に感謝せず、優遇せず、汚らわしそうにし続けるのを不満に思っていたのだから。

　本来家族を養うべき自分が、実際は家族に養われていることを考えずに済む人生とはどんなものだろう。それはそれで「勝ち」なのか？　厚顔無恥であり、不幸でしかないと私は思うのだが、壊れた頭ではそうは感じないらしい。
　無知も無恥も彼らにとっては武器であり、誇りである。暴力を恥じるどころか、それに依存し、誇示する。

　トシロー、あんたは、新妻（にいづま）に、少女を半殺しにする様（さま）を見せつけ、得意になっていたってね。

　その少女がどんな失言、どんな無礼をしたか知らんが、大の男が、小学生の妹を、力任（ちからまか）せに暴行する姿は醜いことの上ないよ。あんたの母親もきょうだいたちも、その場にいたのに、誰も止めない。新妻はぞっとしたが、実家でも親父（おやじ）がよく暴力振るっていたので、男とはこんなものかと諦めた。その表情を少しでも読める男なら、妻の失望、軽蔑、嫌悪など、すぐに察知できただろうに。
　女はその後、自分の子に教えた。「あの男には逆らうな。自分がどんなに正しいと思っても何も言うな。怒らせると何をするかわからん。自分は、昔、あの男が小さな妹を半殺しにするのを見た」と。
　あんたにあるのは欲と衝動だけで、その他、知情意、何もない。「他者の気持ちはどうでもいい」更に「自分を恐れ、自分の言うなりになればもっといい」
　その日その日が自分に心地よく、暑さ寒さ、空腹、渇きをしのげたら、それでいいのだ。お気に入りドラマやギャンブルで、タバコふかして失われた青春を取り戻すことが何より大事。「わしの楽しみ」何より大事。

この男が、もし壊れていなかったら、などと私も、夢想してみたこともある。この男が髄膜炎にも PTSD にもかからなければ、どんなだっただろう？などと。しかしあらゆる意味でそれは空しい。彼のきょうだいたち、髄膜炎に罹らなかった兄弟姉妹の生存者数人を私は知っていたが、また会いたくなるような人はほとんどいなかった。それどころか、トシローの病気を、その嫁の冷淡さ故の結果だなどと言いがかりを付ける者までいて、私と弟は強く抗議した。日頃は何かと反発しあう我々が、この時はがっちり組んで、まくしたてた。相手が口ごもり、凹むまで。

壊れていなくてもこの一族は、この程度なのだろう。そう私も思い、弟はこの家など絶家してもいいと言い出した。達観である。その後、自らの結婚に際し、オヤジの結婚を見下してこう言った。「自分が結婚するのは、経済的な自信ができたからだ。オヤジみたいに欲望だけで結婚するヤツの気が知れん。こんなヤツに嫁とらせるようなこと、自分がその親なら絶対にせん」と。彼は晴れの結婚式を自分たち 2 人だけで済ました。彼の母親と私はその記念写真を見た。オヤジは？　知らん。見たかどうかも私は知らない。弟に訊いてみる気もしない。

お手本にならないような親の元で育つ子が、曲がりなりにも、親たるものがどうあるべきかを心得るのは容易ではない。そして、それを実行できたら、世間はその本人をほめるか？　いや、多くの場合、親をほめる。「さぞかし立派なお父様に育てられたんでしょうな」とか。

我々子供はしばしばそういう目にあった。しかし、「いえ、違いますよ。オヤジは手のつけられんドガイショナシで、我々子供は艱難辛苦、その害から逃れてきたのですよ」なんて言えないのだ。言ったら最後、我々もその同類だと見做されてしまう。もしくは親を悪く言うとんでもないやつだ、とか、恩知らずだとか。傍観者の寝言にはキリがない。

だから黙るしかない。まるで、親なしか、木の股から生まれたような顔をして。

我々の女親はそれも見越して、よく言っていた。「オヤジがアホなことを外へ行って言うなよ。あんたらもその仲間やと思われるから」と。

TV のホームドラマは概して我々には有害だった。麻薬のような作用というか、しばし現実逃避はさせてくれるが、現実に引き戻される時の不快感がたまらなかった。友人たちの家庭の話も、苦痛だった。優しい母親や、頼もしい父親自慢の話は聞くに耐えなかった。「宿題、わからん所、お父ちゃんが教えてくれたの！」と、近所の同い年の子が嬉しそうに言った時、私は頭を殴られた気がした。その子は自慢したつもりはなかったのだろう。嬉しかった話をしただけだ。

映画やドラマや、とりわけ、同級生の話からは遠ざかろう、つい、自分にもそういう嬉しいことがあるかもしれないと、夢想してしまい、結局はガッカリするハメになるのだから。

夢想は時間のムダ。反実仮想は時間のムダ。

さて、どんな親でも亡くなればその良さが判るとかいうが、私は判らずじまい。も少し早く消えてくれたなら私の人生もっと開けたかも、とは思う。（病ゆえにしろ）悪人だった人間が、死んで仏になるという思想も私にはない。暴君ネロは死んでも暴君。死んで仏になる筈ない。死後、病治癒ということはあるかもしれん。あってもあの世での事だ。そのおこぼれがこの世にいくらかでもあるというのか？　治癒するヒマあれば、生まれ変わる方が手っ取り早いようにも思う。

さて、オヤジ存命中の話しに戻ろう。タバコやめたら少しは賢くなるかもと、私は気骨折って喫煙を止めさせようとしたこともある。女親は若い頃のそんな私を不憫だと言った。無駄なことだ、あの男に何をしてもあかんで、と。

その通りだった。口先だけは、「やめる。今度こそ絶対止める」と言うから、余計始末悪い。聞かされた者は期待してしまうではないか。競輪競馬、パチンコ等々、ギャンブル狂もその調子で、治らなかった。体弱り動けなくなるまで。

おバカは誰と、どう暮らせばいいんだろう？　誰にでも人権あって、死ねとは言えないとしたら、どこでどうさせたら、家族や周囲をそこなわずに済むのだろう？　いわゆる福祉の充実で済む問題？

今の時代、障害者が生まれたり、障害者になってしまったりしても、福祉施設があるじゃないか、その法律もなんとか整備され、頼ればいいんだ、その道のプロに。

それとも、そんな障害者が生れないようにすることこそが重要なのか？

今では自分に関係ないよ、と突き放せない、私の中に居座り続ける気がかりである。

数年前だったか、出産前の検診で、胎児の障害発覚し、出産断念した女性が TV 取材に応じていた。裕福でもないその女性は、その子たちが生まれてきたら、養育に健常者の何倍もの費用や気遣いが必要で、親子共倒れになってしまう、やって行く自信がない、と泣いていた。胎児は男女の双子で、とっさに私は、ある冷血夫婦を思い浮かべた。自分の孫子を散々殺め、抹殺したあの夫婦を。育ち過ぎて自分たちの手に負えなくなった娘は、嫁がせるふりして、捨てたあの夫婦。

戸籍上の私の祖父母。母方の祖父母である。

健常者である娘を障害者に売り飛ばしたあの夫婦。おそろいのおバカだったね、あれも。トシローの父親から、僅かな結納金を見合いのその場で掴まされ、丸めこまれた田舎者。子沢山の貧乏親父には、救いの神にも思えたのか。

物心ついた頃から「結婚」の胡散臭さに手を焼いていた私は友人たちのように、結婚にあこがれたりできなかった。「結婚は人生の墓場」が私にとっての公理。「自明の理」だった。
それで、親戚や友人の結婚式に出たこともなければ、祝意を表したこともない。
彼らの結婚生活が破綻したら、それ見たことかと溜飲を下げた。独り秘かにニンマリと。
でも、近ごろは、その同級生と話してみたいと思う。あの子も２回目（の結婚）しただろうか、それとも３回目…

トシローの言葉拾遺など目論んで始めた作業、うまくいかない。いくはずもないんだろう。私が拾い集めてしまうのは、つい、その嫁の方。彼女から、もう縁切れたぞ、嫁なんていうな、と抗議する声まで聞こえてきそうだ。そうだね、すまんよ。

あ、一つ思い出した。トシローのこれは至言だ。金言だ。「保証人にだけは、なるな」

すかさず女の声がする。「まぐれあたりに、一つぐらいはマトモっぽいことも言うやろ、どこで聞き覚えてきたのか知らんが」と。なるほど、軍配は、やはりあんたの方になるのかな。
ついでに訊くが、あんたが産んだ男児がよ、トシローとその一族にあいそつかし、絶家していいとまで言えたほどの男がよ。その後、死んだあんたを迎えに来たが、あんたは行ったのか？　一瞬でも？　息子の家に？
あんたが生きているうちは自宅にも呼ばず、こちらへ出向くのも、ほんの時々。介護の**か**の字も、面会の**め**の字もせん男が、死んだら急に身内面して、うちへ来るなり土下座した。「兄さん、済みませんでした！」やて。「姉さん」とは言わんのだ。

知ってるだろうが、その男、あんたの葬式には自前の位牌携えて、戒名書いて持ってきた。前日に、喪主たる私から、「位牌はこっちの葬儀セットにあるから不要」と念押されたにもかかわらず、当日、自前の位牌を、これ見よがしに持ってきた。葬儀後、遺骨も欲しいと言うので、渡したが、出棺の時、私が
「ミユキさんの所へ行きよー」
というのを聞いて、穏やかではなかったかも。自分が持ち帰る遺骨はすっかり抜けがらで、中身はミユキの元へ行ったとなれば、亡母を祀る自分の立場がない。
ミユキを愛した亡母の気持ちを（私ほどではないにしろ）結構知ってはいるくせに、彼女個人の幸せは二の次三の次。妻や世間への見栄もあるのか。世帯主にふさわしい世間並みの体裁保つことに汲々だ。

彼に私は教えた筈だ。トシローの父親は、無知な田舎娘の人生を台無しにした**犯罪者**だと。赤の他人の

純真無垢な娘の人生台無しにした。キム・ジョンナム（金正男）を殺したジョンウン（正恩）より悪いのだ。と。
　彼はうなずいた。だから、私は彼に先祖を捨てる勇気ぐらいはあると思っていた。どころか既にそうしている、妻子への見栄で、露骨にはしていないかもしれないが…と。

　住人が１人減り、（その年金もなくなったので）それにふさわしい慎ましい部屋へ移ると、そこは淡路島を背景に、大橋かかる海が見える。以前よりもいい景色。そこへ尋ね来た弟も言う「前よりええな」と。
　「夜景はもっとええから、また夜にもおいで」と言ったのがこの５月。そのうち、ぶっちゃけ語り合おう、チューハイ、ビール、枝豆、スルメで、我々しか知らない艱難辛苦　通過、万歳！の打ち上げやろうと思っていた。「きょうだいのうち、私にだけ名前がふたつあるのはなんでや思う？」とか訊いてみて、訊かれて初めて、考え始めるだろう弟を笑ってやろうと思っていた。
　「あれ？　そないゆうたら、そやな、なんでや？」

　そんなやり取り楽しみにしていたのに、ある日を境にメールも届かん。せっかく明石海峡大橋の夜景ライトアップ画像送ったのに、なんとエラーで返ってくる。やむなく電話でその無礼を責めると、迷惑メールが毎日多量に来て、受信拒否しているとのこと。全部拒否せず、より分けたらどうかと言って電話切ったが、そばで夫が笑う。「うちは**迷惑**なんや」
　昨年私を振った従兄も、その前、私の方から見切った叔母も、そうだったが、私が身内同士でしか出来ない話をしたがると彼らはスルリとそれを交わし、他人同士でも出来るような話に逃げ込んでしまう。「特殊」を追究したい私と、「標準」に逃げ込もうとする彼ら。気軽に話し、付き合える筈の彼らに、非常な気遣いをする自分。接するたびに募る疲労。割に合わんな。これでは身内の意味がない。それに気付いて、もうやめた。私には親きょうだいなどいないのだ。または、弟などはまだ治癒していない。幼児時代の思い出の整理もまだつかず、触れられることさえ耐えがたいのだ。そっとしておくしかない。

　盆や彼岸はこの国の風物詩？　よくは知らんが、抵抗なくその習わしに染まれる人はしたらいい。キュウリやナスで馬や牛を作ればいい。私はできない。子どもに伝えようとも思わない。我々の遺骨や位牌も無用の長物。むろん墓も。

　亡母の位牌や遺骨を持ち帰ったあの男、盆や彼岸に墓参りを相も変わらずしているのだろうか。カスのクソの無知と愚昧のご先祖様に、いまだにお参りしているのだろうか？　せっかくトシローより何 cm も大きくなったというのにさー。

　トシローの続きを語ろう。もうすぐ終わる。あと少しだ。

　今でも私に印象深いのは、「保証人になるな」の忠告が、やたら力がこもっていたこと。子供にろくな

こと教えられなかった自分だが、これだけは自信をもって言える、というような迫力だった。その時、私がどう答えたか忘れたが、わりとすんなり聞き入れたような気がする。むろん内心は、

「そんなこと、あんたに言われんでも知ってるわ。」と思ったが。

大事なことはそれをしっかり実行したこと。これをトシロー、あんたに報告するよ。

20 年近くも前のこと、夫の兄貴が夫に保証人を頼んできた。不動産購入の契約に必要だと言って。「連帯保証人」というヤツだ。その嫁の言い草がこうだった。「何も、お宅に迷惑掛けないわ。そこにハンコ押してくれるだけでいいの」電話口で私は絶句。切った後、夫に言った。「絶対だめ」

うまくは説明できなかったと思う。しかし、この悪名高い保証人を引き受けたばっかりに、人生損ねた人たちの話をあれこれ聞いていたので、私は身体を張って反対した。

「断ったら兄貴と気まずくなる…」とかグダグダ言う夫に私は言った。「絶交してもええから、やめて」自分たちの別れ話にまで発展しそうな気配に、夫は折れて、断った。絶縁した。義兄夫婦からも、その後、全く音沙汰なし。その後、更に調べたら、この連帯保証人制度は世界に類見ぬ悪しき制度とわかってきた。軍隊や部活の「連帯責任」にも通じる発想。こんなことが随所に蔓延、子どもたちまで惑わそうとする嫌な国だ。連帯保証人制度と皇室制度は日本の恥。

ともかく、訳わからん親戚と縁切れて、私は清々している。その後も連帯保証人に限らず、なるべく保証人は引き受けないことにしている。長期にわたりそうなものは特に。自身が保証人を頼みたいときも、個人に頼まず業者を探す。

そういう気配を察知して、転勤族のわが弟も、うちへ賃貸保証人の依頼をしなくなってきた。

しまった、彼の依頼を回避する時、言うべきだった。「亡きトシローの訓辞(くんじ)だ」と。

ミユキ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2018 年 7 月

一人の青年が命を落とすというのは大変なことなのだ。

彼一人のみならず、彼を必要としていた人々の人生丸ごと奪ってしまう。

勤め先では頼もしい上司であり、善き隣人でもあり、嬉しそうにカズエにエッチないたずらを仕掛けてくる幼友達ミユキ。

冬場の帰路では自分の外套に「入れ」と言ってカズエを連れ帰ってくれたミユキ。

「いたずらせんから、入れ」という言葉をしっかり守って連れて帰った。

その青年さえ生きていたら、下らんことはすべてチャラになった。

カズエは，石頭オヤジに苛立ったり、将来八方ふさがりで、死のうかと思ったりせずにすんだ。とりわ

け、どこの馬の骨かわからん男に売り飛ばされ、股間に大けがを負わされることもなかったのだ。
馬の骨はとことん鈍感だから、どれほど自分が嫌われているか、人から指摘されるまで、気づこうとしなかった。エロ本読みふけり、「いやよいやよも好きのうち」的な思い込みで生きていた。
　カズエのような無知で無力な田舎娘だから、さらわれて来て、いきなりこんな男をしょいこまされたが、少しでもその男を知っている女なら、決して一緒にならないだろう。
　そもそも親がさせない。こんな男に嫁がせるなど、まともな親なら、決してしないことだ。
　カズエは望み通りミユキと添えていたら、両手に花、資格も伴侶も得られたのだ。ミユキなら、看護学校へも行かせてくれたろうとカズエは言った。悔しさに歯を食いしばることもなく、生涯丈夫な歯でいられだたろう。
　カズエの損失は計り知れない。
　はかない気晴らしにしかならぬような子の何人かを得ても、ミユキを失った損失は、とてもとても埋められない。
　それをカズエは口に出したことはない。しかし私には丸見え。
　ミユキを語るような目で私を見たことはなく、私を見る目は汚物を見る目に近かった。「お父さんとそっくりやな」とまで言われたことがある。とどめを刺されたようなものだ。
　他にも言葉にもできないことは幾つもある。

　思えば、親になる為の何の準備も出来ていない女が、騙され、脅され，死にそこなって、人の親になってしまったのだから、その務めを果たせないのはムリもないのだ。
　22 歳でニューギニアへ行かされ、帰らぬ人となった青年を私は深く悼む。その時カズエは 20 歳で、翌年嫁に出されている。
　人間だれしもいつかは死ぬが、22 歳は若すぎる。
　ましてや、その人を当てにし、その人なしでは成り立たない人々の人生も狂わせてしまう死は罪深い。
　殺人そのもの。愚昧、低能、狂信的な日本国家は戦後になっても大して改まってはいない。

　私なんかが生まれてくるよりは、ミユキに死なずにいてほしかったとつくづく思う。
　誰が人生狂わされた女の惨状など見たいものか。

　その惨状から始まった私の命は、なるほど普通の命とは違っていた。
　むろん幼い頃には気づかない、自分の命の始まりが愛情や信頼などではなく、言葉にもできない暴行や、虐待、冷遇などから発生してしまった代物だなんて気付かない。
　しかし子どもはバカではいられない。気付く日が来る。日々の不自由、他の子どもにはどんどん実現していく幸福が、自分にはちっとも来ない、一目瞭然、衣食住のお粗末さ、体の貧弱さ、体調悪さ、その原因が親だと気付かずに済ますことなどどうしてできよう？　まともに熟睡できる部屋さえないのだ。いびき筒抜けの安普請、傾き、たわむ柱や床。甲斐性無しのくせに子を作るからこうなるという単純明快な理屈。自分のいわゆる**ひねくれ**も、それなりの理由があったと判ってくる。子どもらしく素直にしろ、等の寝言は自分に通用する筈ないと判ってくる。それは、健全で、気心通じ合った男女の間に生まれた子の話。真面目に働く甲斐性ある大黒柱あっての話。

それとはかけ離れた条件下、生じてしまった命には、その命なりの言い分がある。

要するに毎日が苦痛なのだ。だから、自分の誕生を喜べない、感謝もできない、ただ、死ぬという手間が増えるだけの負の遺産だと。

こんなに露骨に白状すればスッキリする。これを私は産んだ女カズエに言ってやった。すると彼女は言った。「産んでやってごめん。わるかった」と。

それで私は溜飲を下げたのだ。不思議なことに、その瞬間、私は彼女の守護役を引き受けていいような気持ちになった。お人好しの彼女にあれこれ入れ知恵したり世話したり、やりがいあったよ、それなりに。うっかり死にそびれてるじゃないか、私…なんて思ったりもして…

ほんの子どもの頃、私は女親を眺めて、「この人、釈迦やキリストよりも、偉いというか、あてになるんじゃないか」と、ふと思ったことがある。子どもだから「偉い人」という言葉が言い易く、思い浮かんだのかもしれないが、自分にとって、一番確かな人という気がしたのだ。

ミユキさん、あんたがいなくなり、カズエはすっかり腑抜けになった。

これこそ確かなことだった。我々に隠したい「確かさ」だ。

かわいそうだったよ。何とか寂しさ紛らわそうと、子どもや、孫やカラオケや、あれこれ気晴らししていたが、やっぱり一番の幸せは、あんたの所へ行くことだろう。

年老いて不自由な体になったカズエが、やっとその老体から抜け出せた時、

柩に花束投げ入れながら私は言った。「ミユキさんとこへ行きや」と、

送りだしてやったんだよ、17 歳のカズエの写真を白いベールで飾って、

送り出した。あんたの所へ。

行ったんだろうな、会えてるんだろうな。

大好きなあんたに。